

The up \LaTeX 2 $_{\epsilon}$ Sources

Ken Nakano & Japanese \TeX Development Community & TTK

2017/07/29u01

Contents

a	uplvers.dtx	1
1	バージョンの設定	1
1.1	\LaTeX 2.09 互換モードの抑制	1
1.2	パッチファイルのロード	2
1.3	起動時に表示するバナー	3
1.4	ハイフネーション関連	4
1.5	latexrelease パッケージへの対応	4
b	uplfonts.dtx	6
2	概要	6
2.1	DOCSTRIP プログラムのためのオプション	6
3	コード	7
3.1	準備	7
3.1.1	和文フォント属性	7
3.1.2	長さ変数	8
3.1.3	一時コマンド	8
3.1.4	フォントリスト	9
3.1.5	支柱	10
3.2	コマンド	12
3.3	デフォルト設定ファイルの読み込み	32

4	デフォルト設定ファイル	33
4.1	合成文字	33
4.2	イタリック補正	36
4.3	テキストフォント	37
4.4	プリロードフォント	38
4.5	組版パラメータ	39
5	フォント定義ファイル	40
c	ukinsoku.dtx	42
6	禁則	42
6.1	半角文字に対する禁則	42
6.2	全角文字に対する禁則	43
7	文字間のスペース	46
7.1	ある英字と前後の漢字の間の制御	46
7.2	ある漢字と前後の英字の間の制御	49
d	ujclasses.dtx	52
8	オプションスイッチ	52
9	オプションの宣言	53
9.1	用紙オプション	54
9.2	サイズオプション	54
9.3	横置きオプション	55
9.4	トンボオプション	55
9.5	面付けオプション	55
9.6	組方向オプション	56
9.7	両面、片面オプション	56
9.8	二段組オプション	56
9.9	表題ページオプション	56
9.10	右左起こしオプション	56
9.11	数式のオプション	56
9.12	参考文献のオプション	57
9.13	日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字	57

9.14 ドラフトオプション	58
9.15 オプションの実行	58
10 フォント	58
11 レイアウト	62
11.1 用紙サイズの決定	62
11.2 段落の形	62
11.3 ページレイアウト	63
11.3.1 縦方向のスペース	63
11.3.2 本文領域	64
11.3.3 マージン	69
11.4 脚注	73
11.5 フロート	73
11.5.1 フロートパラメータ	73
11.5.2 フロートオブジェクトの上限値	75
12 改ページ（日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ）	76
13 ページスタイル	78
13.1 マークについて	78
13.2 plain ページスタイル	79
13.3 jpl@in ページスタイル	79
13.4 headnombre ページスタイル	79
13.5 footnombre ページスタイル	80
13.6 headings スタイル	80
13.7 bothstyle スタイル	81
13.8 myheading スタイル	82
14 文書コマンド	83
14.1 表題	83
14.2 概要	88
14.3 章見出し	89
14.3.1 マークコマンド	89
14.3.2 カウンタの定義	89
14.3.3 前付け、本文、後付け	90
14.3.4 ボックスの組み立て	91
14.3.5 part レベル	92

14.3.6	chapter レベル	95
14.3.7	下位レベルの見出し	97
14.3.8	付録	97
14.4	リスト環境	98
14.4.1	enumerate 環境	101
14.4.2	itemize 環境	102
14.4.3	description 環境	103
14.4.4	verse 環境	103
14.4.5	quotation 環境	103
14.4.6	quote 環境	104
14.5	フロート	104
14.5.1	figure 環境	104
14.5.2	table 環境	105
14.6	キャプション	106
14.7	コマンドパラメータの設定	106
14.7.1	array と tabular 環境	106
14.7.2	tabbing 環境	107
14.7.3	minipage 環境	107
14.7.4	framebox 環境	107
14.7.5	equation と eqnarray 環境	107
15	フォントコマンド	107
16	相互参照	109
16.1	目次	109
16.1.1	本文目次	111
16.1.2	図目次と表目次	114
16.2	参考文献	114
16.3	索引	115
16.4	脚注	116
17	今日の日付	116
18	初期設定	117
	変更履歴	119

File a uplvers.dtx

1 バージョンの設定

まず、このディストリビューションでの up \LaTeX 2 ϵ の日付とバージョン番号を定義します。また、up \LaTeX 2 ϵ が起動されたときに表示される文字列の設定もします。

このバージョンの up \LaTeX 2 ϵ は、次のバージョンの \LaTeX ¹ をもとにしています。

```
1 <*2ekernel>
2 %\def\fmtname{LaTeX2e}
3 %\edef\fmtversion
4 </2ekernel>
5 <latexrelease>\edef\latexreleaseversion
6 <platexrelease>\edef\pknown@latexreleaseversion
7 <*2ekernel | latexrelease | platexrelease>
8   {2017/04/15}
9 </2ekernel | latexrelease | platexrelease>

\fmtname up $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  のフォーマットファイル名とバージョンです。
\fmtversion 10 <*plcore>
\ppatch@level 11 \def\fmtname{pLaTeX2e}
12 \def\fmtversion
13 </plcore>
14 <platexrelease>\edef\platexreleaseversion
15 <*plcore | platexrelease>
16   {2017/07/29u01}
17 </plcore | platexrelease>
18 <*plcore>
19 \def\ppatch@level{0}
20 </plcore>
```

1.1 \LaTeX 2.09 互換モードの抑制

`\documentstyle` p \LaTeX は、`\documentclass` の代わりに `\documentstyle` が使われると \LaTeX 2.09 互換モードに入ります。しかし、up \LaTeX は新しいマクロパッケージですので、 \LaTeX 2.09 互換モードをサポートしません。このため、`plcore.dtx` の定義を上書きして明確なエラーを出します。

```
21 <*plfinal>
22 \def\documentstyle{%
23   \@latex@error{upLaTeX does NOT support LaTeX 2.09 compatibility
24     mode.\MessageBreak Use \noexpand\documentclass instead}{%
25     \noexpand\documentstyle is an old convention of LaTeX 2.09,
```

¹ \LaTeX authors: Johannes Braams, David Carlisle, Alan Jeffrey, Leslie Lamport, Frank Mittelbach, Chris Rowley, Rainer Schöpf

1.3 起動時に表示するバナー

`\everyjob` 起動時に表示される文字列です。L^AT_EX にパッチが当てられている場合は、それも表示します。

```
64 \ifx\patch@level\@undefined % fallback if undefined in LaTeX
65   \def\patch@level{0}\fi
66 \ifx\ppatch@level\@undefined % fallback if undefined in upLaTeX
67   \def\ppatch@level{0}\fi
68 \begingroup
69   \def\parse@@BANNER\typeout#1\typeout#2#3\relax{#1}
70   \edef\latexTMP{%
71     \ifnum\ppatch@level=0
72       \everyjob{\noexpand\typeout{%
73         \pfmtname\space<\pfmtversion>\space
74         (based on \expandafter\parse@@BANNER\latexBANNER)}}%
75     \else
76       \everyjob{\noexpand\typeout{%
77         \pfmtname\space<\pfmtversion>+\ppatch@level\space
78         (based on \expandafter\parse@@BANNER\latexBANNER)}}%
79     \fi
80   }
81 \expandafter
82 \endgroup \latexTMP
```

pL^AT_EX や upL^AT_EX は、独自のハイフネーション・パターンを定義していません。T_EX Live の標準的インストールでは、代わりに L^AT_EX が読み込んでいる Babel パッケージのものが適用されるはずですから、起動時の文字列にも `hyphen.cfg` のバージョンを反映します (Babel パッケージの `hyphen.cfg` でない場合は、何も表示されず空行になるはずです)。

```
83 \begingroup
84   \def\parse@@BANNER\typeout#1\typeout#2#3\relax{#2}
85   \edef\latexTMP{%
86     \the\everyjob\noexpand\typeout{\expandafter\parse@@BANNER\latexBANNER}%
87   }
88   \everyjob=\expandafter{\latexTMP}%
89   \edef\latexTMP{%
90     \noexpand\let\noexpand\latexBANNER=\noexpand\@undefined
91     \noexpand\everyjob={\the\everyjob}%
92   }
93   \expandafter
94 \endgroup \latexTMP
95 \</p\final>
```


1.4 ハイフネーション関連

`\l@nohyphenation` L^AT_EX 2_ε 2017-04-15 で、`\verb` の途中でハイフネーションが起きないようにする修正が入りました。この修正には `\l@nohyphenation` が定義済みでなければなりません^が、通常は Babel の定義ファイルによって提供されています。L^AT_EX 2_ε は特殊な状況も想定して `lATEX` final で対策しているようですので、pL^AT_EX 2_ε も念のため `plfinal` で対策します（参考：latex2e svn r1405）。

```
96 <*plfinal>
97 \ifx\l@nohyphenation \undefined
98   \newlanguage\l@nohyphenation
99 \fi
```

`\document@default@language` L^AT_EX 2_ε 2017-04-15 で導入されたパラメータです。更新タイミングのずれの可能性を考慮し、pL^AT_EX 2_ε でも準備しておきます。`verbatim` 環境の途中で改ページが起きた場合にヘッダでハイフネーションが抑制されないように、`\@outputpage` で `\language` をリセットするときに使われます（参考：latex2e svn r1407）。

```
100 \ifx\document@default@language \undefined
101   \let\document@default@language\m@ne
102 \fi
103 </plfinal>
```

1.5 latexrelease パッケージへの対応

最後に、`latexrelease` パッケージへの対応です。

`\plIncludeInRelease`

```
104 <*plcore | platexrelease>
105 \def\plIncludeInRelease#1{\kernel@ifnextchar [%
106   {\@plIncludeInRelease{#1}}
107   {\@plIncludeInRelease{#1}[#1]}}
108 \def\@plIncludeInRelease#1[#2]{\@plIncludeInRelease{#2}}
109 \def\@plIncludeInRelease#1#2#3{%
110   \toks@{[#1] #3}%
111   \expandafter\ifx\csname\string#2+\@currname+IIR\endcsname\relax
112     \ifnum\expandafter\@parse@version#1//00\@nil
113       >\expandafter\@parse@version\pfmtversion//00\@nil
114       \GenericInfo{}\{Skipping: \the\toks@\}%
115       \expandafter\expandafter\expandafter\@gobble\plIncludeInRelease
116     \else
117       \GenericInfo{}\{Applying: \the\toks@\}%
118       \expandafter\let\csname\string#2+\@currname+IIR\endcsname\@empty
119     \fi
120   \else
121     \GenericInfo{}\{Already applied: \the\toks@\}%
122     \expandafter\@gobble\plIncludeInRelease
```

```

123 \fi
124 }

125 \long\def\@gobble@plIncludeInRelease#1\plEndIncludeInRelease{}
126 \let\plEndIncludeInRelease\relax
127 </plcore | platexrelease>

```

$\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ が提供する latexrelease パッケージが読み込まれていて、かつ $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ が提供する platexrelease パッケージが読み込まれていない場合は、警告を出します。

```

128 <*plfinal>
129 \AtBeginDocument{%
130   \ifpackageloaded{latexrelease}{%
131     \ifpackageloaded{platexrelease}{}{%
132       \@latex@warning@no@line{%
133         Package latexrelease is loaded.\MessageBreak
134         Some patches in pLaTeX2e core may be overwritten.\MessageBreak
135         Consider using platexrelease.\MessageBreak
136         See platex.pdf for detail}%
137     }%
138   }{}%
139 }
140 </plfinal>

```

File b

uplfonts.dtx

2 概要

ここでは、和文書体を NFSS2 のインターフェイスで選択するためのコマンドやマクロについて説明をしています。また、フォント定義ファイルや初期設定ファイルなどの説明もしています。新しいフォント選択コマンドの使い方については、`fntguide.tex` や `usrguide.tex` を参照してください。

第 2 節 この節です。このファイルの概要と DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示しています。

第 3 節 実際のコードの部分です。

第 4 節 プリロードフォントやエラーフォントなどの初期設定について説明をしています。

第 5 節 フォント定義ファイルについて説明をしています。

2.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション

DOCSTRIP プログラムのためのオプションを次に示します。

オプション	意味
plcore	<code>uplfonts.ltx</code> を生成します。
trace	<code>uptrace.sty</code> を生成します。
JY2mc	横組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JY2gt	横組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
JT2mc	縦組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JT2gt	縦組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
pldefs	<code>upldefs.ltx</code> を生成します。次の 4 つのオプションを付加することで、プリロードするフォントを選択することができます。デフォルトは 10pt です。
xpt	10pt プリロード
xipt	11pt プリロード
xiipt	12pt プリロード
ori	<code>plfonts.tex</code> に似たプリロード

3 コード

この節で、具体的に NFSS2 を拡張するコマンドやマクロの定義を行なっています。

3.1 準備

NFSS2 を拡張するための準備です。和文フォントの属性を格納するオブジェクトや長さ変数、属性を切替える際の判断材料として使うリストなどを定義しています。

uptrace パッケージは L^AT_EX の tracefnt パッケージに依存します。

```
1 \trace
2 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
3 \ProvidesPackage{uptrace}
4 [2017/03/05 v1.6f-u00 Standard upLaTeX package (font tracing)]
5 \RequirePackageWithOptions{tracefnt}
6 \trace
```

3.1.1 和文フォント属性

ここでは、和文フォントの属性を格納するためのオブジェクトについて説明をしています。

`\k@encoding` 和文エンコードを示すオブジェクトです。`\ck@encoding` は、最後に選択された和文エンコード名を示しています。`\cy@encoding` と `\ct@encoding` はそれぞれ、最後に選択された、横組用と縦組用の和文エンコード名を示しています。

```
\ct@encoding 7 \plcore
8 \let\k@encoding\@empty
9 \let\ck@encoding\@empty
10 \def\cy@encoding{JY2}
11 \def\ct@encoding{JT2}
```

`\k@family` 和文書体のファミリーを示すオブジェクトです。

```
12 \let\k@family\@empty
```

`\k@series` 和文書体のシリーズを示すオブジェクトです。

```
13 \let\k@series\@empty
```

`\k@shape` 和文書体のシェイプを示すオブジェクトです。

```
14 \let\k@shape\@empty
```

`\curr@kfontshape` 現在の和文フォント名を示すオブジェクトです。

```
15 \def\curr@kfontshape{\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape}
```

`\rel@fontshape` 関連付けされたフォント名を示すオブジェクトです。

```
16 \def\rel@fontshape{\f@encoding/\f@family/\f@series/\f@shape}
```

3.1.2 長さ変数

ここでは、和文フォントの幅や高さなどを格納する変数について説明をしています。

頭文字が大文字の変数は、ノーマルサイズの書体の大きさを、基準値となります。これらは、`jart10.clo` などの補助クラスファイルで設定されます。

小文字だけからなる変数は、フォントが変更されたときに (`\selectfont` 内で) 更新されます。

`\Cht` `\Cht` は基準となる和文フォントの文字の高さを示します。`\cht` は現在の和文フォントの文字の高さを示します。なお、この“高さ”はベースラインより上の長さです。

```
17 \newdimen\Cht
18 \newdimen\cht
```

`\Cdp` `\Cdp` は基準となる和文フォントの文字の深さを示します。`\cdp` は現在の和文フォントの文字の深さを示します。なお、この“深さ”はベースラインより下の長さです。

```
19 \newdimen\Cdp
20 \newdimen\cdp
```

`\Cwd` `\Cwd` は基準となる和文フォントの文字の幅を示します。`\cwd` は現在の和文フォントの文字の幅を示します。

```
21 \newdimen\Cwd
22 \newdimen\cwd
```

`\Cvs` `\Cvs` は基準となる行送りを示します。ノーマルサイズの `\baselineskip` と同値です。`\cvs` は現在の行送りを示します。

```
23 \newdimen\Cvs
24 \newdimen\cvs
```

`\Chs` `\Chs` は基準となる字送りを示します。`\Cwd` と同値です。`\chs` は現在の字送りを示します。

```
25 \newdimen\Chs
26 \newdimen\chs
```

`\cHT` `\cHT` は、現在のフォントの高さに深さを加えた長さを示します。`\set@fontsize` コマンド (実際は `\size@update`) で更新されます。

```
27 \newdimen\cHT
```

3.1.3 一時コマンド

`\afont` \LaTeX 内部の `\do@subst@correction` マクロでは、`\fontname\font` で返される外部フォント名を用いて、 \LaTeX フォント名を定義しています。したがって、`\font` をそのまま使うと、和文フォント名に欧文の外部フォントが登録されたり、縦組フォ

ント名に横組用の外部フォントが割り付けられたりしますので、`\jfont` か `\tfont` を用いるようにします。`\afont` は、`\font` コマンドの保存用です。

```
28 \let\afont\font
```

3.1.4 フォントリスト

ここでは、フォントのエンコードやファミリの名前を登録するリストについて説明をしています。

pLaTeX 2_ε の NFSS2 では、一つのコマンドで和文か欧文のいずれか、あるいは両方を変更するため、コマンドに指定された引数が何を示すのかを判断しなくてはなりません。この判断材料として、リストを用います。

このときの具体的な判断手順については、エンコード選択コマンドやファミリ選択コマンドなどの定義を参照してください。

`\inlist@` 次のコマンドは、エンコードやファミリのリスト内に第二引数で指定された文字列があるかどうかを調べるマクロです。

```
29 \def\inlist@#1#2{%
30   \def\in@@##1<#1>##2##3\in@{%
31     \ifx\in@@##2\in@false\else\in@true\fi}%
32   \in@@##2<#1>\in@\in@@}
```

`\enc@elt` `\enc@elt` と `\fam@elt` は、登録されているエンコードに対して、なんらかの処理を逐次的に行ないたいときに使用することができます。

```
33 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}
34 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}
```

`\fenc@list` `\fenc@list` には、`\DeclareFontEncoding` コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。

`\kenc@list` `\kyenc@list` には、`\DeclareYokoKanjiEncoding` コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。`\ktenc@list` には、`\DeclareTateKanjiEncoding` コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにエンコードの登録をするように `\DeclareFontEncoding` を再定義する前に、欧文エンコードが宣言されるため、リストに登録されないからです。

```
35 \def\fenc@list{\enc@elt<OML>\enc@elt<T1>\enc@elt<OT1>\enc@elt<OMS>%
36               \enc@elt<OMX>\enc@elt<TS1>\enc@elt<U>}
37 \let\kenc@list\@empty
38 \let\kyenc@list\@empty
39 \let\ktenc@list\@empty
```

`\kfam@list` `\kfam@list` には、`\DeclareKanjiFamily` コマンドで宣言されたファミリ名が格納されていきます。

`\notkfam@list`

`\notffam@list` File b: uplfonts.dtx Date: 2017/03/08 Version v1.6g-u00

`\ffam@list` には、`\DeclareFontFamily` コマンドで宣言されたファミリー名が格納されていきます。

`\notkfam@list` には、和文ファミリーではないと推測されたファミリー名が格納されていきます。このリストは `\fontfamily` コマンドで作成されます。

`\notffam@list` には欧文ファミリーではないと推測されたファミリー名が格納されていきます。このリストは `\fontfamily` コマンドで作成されます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにファミリーの登録をするように、`\DeclareFontFamily` が再定義される前に、このコマンドが使用されるため、リストに登録されないからです。

```
40 \def\kfam@list{\fam@elt<mc>\fam@elt<gt>}
41 \def\ffam@list{\fam@elt<cmr>\fam@elt<cmss>\fam@elt<cmtt>%
42               \fam@elt<cmm>\fam@elt<cmsy>\fam@elt<cmex>}
```

つぎの二つのリストの初期値として、上記の値を用います。これらのファミリー名は、和文でないこと、欧文でないことがはっきりしています。

```
43 \let\notkfam@list\ffam@list
44 \let\notffam@list\kfam@list
```

3.1.5 支柱

行間の調整などに用いる支柱です。支柱のもととなるボックスの大きさは、フォントサイズが変更されるたびに、`\set@fontsize` コマンドによって変化します。

フォントサイズが変更されたときに、`\set@fontsize` コマンドで更新されます。

従来、横組ボックス用の支柱は `\strutbox` で、高さ と 深さが 7 対 3 となっていました。これは p \LaTeX 単体では問題になりませんでしたが、海外製の \LaTeX パッケージを縦組で使用した場合に、意図しない幅や高さが取得されることがありました。この不都合を回避するため、コミュニティ版 p \LaTeX では次の方法をとります。

- `\ystrutbox` (新設) : 高さ と 深さが 7 対 3 の横組ボックス用の支柱
- `\tstrutbox` : 高さ と 深さが 5 対 5 の縦組ボックス用の支柱
- `\zstrutbox` : 高さ と 深さが 7 対 3 の縦組ボックス用の支柱
- `\strutbox` (仕様変更) : 縦横のディレクションに応じて `\tstrutbox` または `\ystrutbox` に展開されるマクロ

すなわち、従来の p \LaTeX における `\strutbox` と同じ挙動を示すのが、新設された `\ystrutbox` ということになります。

<code>\tstrutbox</code>	<code>\tstrutbox</code> は高さ と 深さが 5 対 5、 <code>\zstrutbox</code> は高さ と 深さが 7 対 3 の支柱ボックスとなります。これらは縦組ボックスの行間の調整などに使います。
<code>\zstrutbox</code>	

```

45 \newbox\tstrutbox
46 \newbox\zstrutbox

```

`\ystrutbox` `\ystrutbox` は高さ と 深さが 7 対 3 の横組ボックス用の支柱です。

```

47 </plcore>
48 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\ystrutbox}
49 <latexrelease>          {Add \ystrutbox}%
50 <*plcore | latexrelease>
51 \newbox\ystrutbox
52 </plcore | latexrelease>
53 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
54 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\ystrutbox}
55 <latexrelease>          {Add \ystrutbox}%
56 <latexrelease>\let\ystrutbox\@undefined
57 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\strutbox` `\strutbox` は縦横両対応です。

```

58 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\strutbox}
59 <latexrelease>          {Add \strutbox}%
60 <*plcore | latexrelease>
61 \def\strutbox{\iftdir\tstrutbox\else\ystrutbox\fi}
62 </plcore | latexrelease>
63 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
64 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\strutbox}
65 <latexrelease>          {Add \strutbox}%
66 <latexrelease>\newbox\strutbox % emulation purpose only
67 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\strut` ディレクションに応じて `\ystrutbox` と `\tstrutbox` を使い分けます。元々このマクロは `ltpplain.dtx` で定義されています。

```

68 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\strut}
69 <latexrelease>          {Use \ystrutbox}%
70 <*plcore | latexrelease>
71 \def\strut{\relax
72   \ifdir
73     \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi
74   \else
75     \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
76   \fi}
77 </plcore | latexrelease>
78 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
79 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\strut}
80 <latexrelease>          {Use \ystrutbox}%
81 <latexrelease>\def\strut{\relax
82   \ifdir
83     \ifmmode\copy\strutbox\else\unhcopy\strutbox\fi
84   \else
85     \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi

```



```

86 <latexrelease> \fi}
87 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
88 <*plcore>

\tsstrut
\zstrut 89 \def\tsstrut{\relax\hbox{\tate
90 \ifmmode\copy\tsstrutbox\else\unhcopy\tsstrutbox\fi}}
91 \def\zstrut{\relax\hbox{\tate
92 \ifmmode\copy\zstrutbox\else\unhcopy\zstrutbox\fi}}

\ysstrut
93 </plcore>
94 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\ysstrut}
95 <latexrelease> {Add \ysstrut}%
96 <*plcore | latexrelease>
97 \def\ysstrut{\relax\hbox{\yoko
98 \ifmmode\copy\ysstrutbox\else\unhcopy\ysstrutbox\fi}}
99 </plcore | latexrelease>
100 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
101 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\ysstrut}
102 <latexrelease> {Add \ysstrut}%
103 <latexrelease>\let\ysstrut\@undefined
104 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
105 <*plcore>

```

3.2 コマンド

次のコマンドの定義をしています。

コマンド	意味
<code>\Declare{Font YokoKanji TateKanji}Encoding</code>	エンコードの宣言
<code>\Declare{Yoko Tate}KanjiEncodingDefaults</code>	デフォルトの和文エンコードの宣言
<code>\Declare{Font Kanji}Family</code>	ファミリの宣言
<code>\DeclareKanjiSubstitution</code>	和文の代用フォントの宣言
<code>\DeclareErrorKanjiFont</code>	和文のエラーフォントの宣言
<code>\DeclareFixedFont</code>	フォントの名前の宣言
<code>\reDeclareMathAlphabet</code>	和欧文を同時に切り替えるコマンド宣言
<code>\{Declare Set}RelationFont</code>	従属書体の宣言
<code>\userelfont</code>	欧文書体を従属書体にする
<code>\selectfont</code>	フォントを切り替える
<code>\set@fontsize</code>	フォントサイズの変更
<code>\adjustbaseline</code>	ベースラインシフト量の設定
<code>\{font roman kanji}encoding</code>	エンコードの指定
<code>\{font roman kanji}family</code>	ファミリの指定
<code>\{font roman kanji}series</code>	シリーズの指定
<code>\{font roman kanji}shape</code>	シェイプの指定
<code>\use{font roman kanji}</code>	書体の切り替え
<code>\normalfont</code>	デフォルト値の設定に切り替える
<code>\mcfamily,\gtfamily</code>	和文書体を明朝体、ゴシック体にする
<code>\textunderscore</code>	テキストモードでの下線マクロ

`\DeclareFontEncoding` 欧文エンコードを宣言するためのコマンドです。l^{tf}ssbas.dtx で定義されている
`\DeclareFontEncoding@` ものを、`\fenc@list` を作るように再定義をしています。

```

106 \def\DeclareFontEncoding{%
107   \begingroup
108   \nfss@catcodes
109   \expandafter\endgroup
110   \DeclareFontEncoding@}
111 %
112 \def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{%
113   \expandafter
114   \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
115     \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
116     \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
117                   {\default@family}{\default@series}%
118                   {\default@shape}}%
119     \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd
120     \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
121     \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
122   \else

```

```

123     \@font@info{Redeclaring font encoding #1}%
124 \fi
125 \global\@namedef{T@#1}{#2}%
126 \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}%
127 \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
128 }

```

```

\DeclareKanjiEncoding 和文エンコードの宣言をするコマンドです。
\DeclareYokoKanjiEncoding 129 \def\DeclareKanjiEncoding#1{%
\DeclareYokoKanjiEncoding@ 130 \@latex@warning{%
\DeclareYokoKanjiEncoding@ 131 The \string\DeclareKanjiEncoding\space is obsoleted command. Please use
\DeclareTateKanjiEncoding 132 \MessageBreak
\DeclareTateKanjiEncoding 133 the \string\DeclareTateKanjiEncoding\space for ‘Tate-kumi’ encoding, and
\DeclareTateKanjiEncoding@ 134 \MessageBreak
\DeclareTateKanjiEncoding@ 135 the \string\DeclareYokoKanjiEncoding\space for ‘Yoko-kumi’ encoding.
136 \MessageBreak
137 I treat the ‘#1’ encoding as ‘Yoko-kumi’..}
138 \DeclareYokoKanjiEncoding{#1}%
139 }
140 \def\DeclareYokoKanjiEncoding{%
141 \begingroup
142 \nfss@catcodes
143 \expandafter\endgroup
144 \DeclareYokoKanjiEncoding@}
145 %
146 \def\DeclareYokoKanjiEncoding@#1#2#3{%
147 \expandafter
148 \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
149 \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
150 \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
151 {\default@k@family}{\default@k@series}%
152 {\default@k@shape}}%
153 \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
154 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
155 \xdef\kyenc@list{\kyenc@list\enc@elt<#1>}%
156 \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}%
157 \else
158 \@font@info{Redeclaring KANJI (yoko) font encoding #1}%
159 \fi
160 \global\@namedef{T@#1}{#2}%
161 \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
162 }
163 %
164 \def\DeclareTateKanjiEncoding{%
165 \begingroup
166 \nfss@catcodes
167 \expandafter\endgroup
168 \DeclareTateKanjiEncoding@}
169 %
170 \def\DeclareTateKanjiEncoding@#1#2#3{%

```

```

171 \expandafter
172 \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
173 \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
174 \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
175             {\default@k@family}{\default@k@series}%
176             {\default@k@shape}}%
177 \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
178 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
179 \xdef\ktenc@list{\ktenc@list\enc@elt<#1>}%
180 \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}%
181 \else
182 \font@info{Redeclaring KANJI (tate) font encoding #1}%
183 \fi
184 \global\@namedef{T@#1}{#2}%
185 \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
186 }
187 %
188 \onlypreamble\DeclareKanjiEncoding
189 \onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding
190 \onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding@
191 \onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding
192 \onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding@

```

`\DeclareKanjiEncodingDefaults` 和文エンコードのデフォルト値を宣言するコマンドです。

```

193 \def\DeclareKanjiEncodingDefaults#1#2{%
194 \ifx\relax#1\else
195 \ifx\default@KT\@empty\else
196 \font@info{Overwriting KANJI encoding scheme text defaults}%
197 \fi
198 \gdef\default@KT{#1}%
199 \fi
200 \ifx\relax#2\else
201 \ifx\default@KM\@empty\else
202 \font@info{Overwriting KANJI encoding scheme math defaults}%
203 \fi
204 \gdef\default@KM{#2}%
205 \fi}
206 \let\default@KT\@empty
207 \let\default@KM\@empty
208 \onlypreamble\DeclareKanjiEncodingDefaults

```

`\DeclareFontFamily` 欧文ファミリを宣言するためのコマンドです。`\ffam@list` を作るように再定義をします。

```

209 \def\DeclareFontFamily#1#2#3{%
210 \ifundefined{T@#1}%
211 {\@latex@error{Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha}%
212 {\edef\tmp@item{#2}}%
213 \expandafter\expandafter\expandafter
214 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%

```

```

215 \ifin@ \else
216 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
217 \xdef\ffam@list{\ffam@list\fam@elt<#2>}%
218 \fi
219 \def\reserved@a{#3}%
220 \global
221 \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
222 \ifx \reserved@a\@empty
223 \@empty
224 \else \reserved@a
225 \fi
226 }%
227 }

```

`\DeclareKanjiFamily` 和文ファミリを宣言するためのコマンドです。

```

228 \def\DeclareKanjiFamily#1#2#3{%
229 \@ifundefined{T@#1}%
230 {\@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha}%
231 {\edef\tmp@item{#2}%
232 \expandafter\expandafter\expandafter
233 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%
234 \ifin@ \else
235 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
236 \xdef\kfam@list{\kfam@list\fam@elt<#2>}%
237 \fi
238 \def\reserved@a{#3}%
239 \global
240 \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
241 \ifx \reserved@a\@empty
242 \@empty
243 \else \reserved@a
244 \fi
245 }%
246 }

```

`\DeclareKanjiSubstitution` 目的の和文フォントが見つからなかったときに使うフォントの宣言をするコマンドです。それぞれ、`\DeclareFontSubstitution` と `\DeclareErrorFont` に対応します。

`\DeclareErrorKanjiFont`

```

247 \def\DeclareKanjiSubstitution#1#2#3#4{%
248 \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
249 \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha
250 \else
251 \begingroup
252 \def\reserved@a{#1}%
253 \toks@{}%
254 \def\cdp@elt##1##2##3##4{%
255 \def\reserved@b{##1}%
256 \ifx\reserved@a\reserved@b

```

```

257         \addto@hook\toks@{\cdp@elt{#1}{#2}{#3}{#4}}%
258     \else
259         \addto@hook\toks@{\cdp@elt{##1}{##2}{##3}{##4}}%
260     \fi}%
261 \cdp@list
262 \xdef\cdp@list{\the\toks@}%
263 \endgroup
264 \global\@namedef{D@#1}{\def\default@family{#2}%
265                     \def\default@series{#3}%
266                     \def\default@shape{#4}}%
267 \fi}
268 %
269 \def\DeclareErrorKanjiFont#1#2#3#4#5{%
270     \xdef\error@kfontshape{%
271         \noexpand\expandafter\noexpand\split@name\noexpand\string
272         \expandafter\noexpand\csname#1/#2/#3/#4/#5\endcsname
273         \noexpand\@nil}%
274     \gdef\default@k@family{#2}%
275     \gdef\default@k@series{#3}%
276     \gdef\default@k@shape{#4}%
277     \global\let\k@family\default@k@family
278     \global\let\k@series\default@k@series
279     \global\let\k@shape\default@k@shape
280     \gdef\font@size{#5}%
281     \gdef\font@baselineskip{#5pt}}
282 %
283 \@onlypreamble\DeclareKanjiSubstitution
284 \@onlypreamble\DeclareErrorKanjiFont

```

\DeclareFixedFont フォント名を宣言するコマンドです。

```

285 \def\DeclareFixedFont#1#2#3#4#5#6{%
286     \begingroup
287         \let\afont\font
288         \math@fontsfalse
289         \every@math@size{}%
290         \fontsize{#6}\z@
291         \edef\tmp@item{{#2}}%
292         \expandafter\expandafter\expandafter
293         \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
294         \ifin@
295             \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
296             \let\font\jfont
297         \else
298             \expandafter\expandafter\expandafter
299             \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
300             \ifin@
301                 \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
302                 \let\font\tfont
303             \else

```

```

304         \useroman{#2}{#3}{#4}{#5}%
305         \let\font\afont
306         \fi
307     \fi
308     \global\expandafter\let\expandafter#1\the\font
309     \let\font\afont
310 \endgroup
311 }

```

`\reDeclareMathAlphabet` 数式モード内で、数式文字用の和欧文フォントを同時に切り替えるコマンドです。

p_{La}T_EX 2_ε には、本来の動作モードと 2.09 互換モードの二つがあり、両モードで数式文字を変更するコマンドや動作が異なります。本来の動作モードでは、`\mathrm{...}` のように `\math??` に引数を指定して使います。このときは引数にだけ影響します。2.09 互換モードでは、`\rm` のような二文字コマンドを使います。このコマンドには引数を取らず、書体はグルーピングの範囲で反映されます。二文字コマンドは、ネイティブモードでも使えるようになっていて、動作も 2.09 互換モードのコマンドと同じです。

しかし、内部的には `\math??` という一つのコマンドがすべての動作を受け持ち、`\math??` コマンドや `\??` コマンドから呼び出された状態に応じて、動作を変えています。したがって、欧文フォントと和文フォントの両方を一度に変更する、数式文字変更コマンドを作るとき、それぞれの状態に合った動作で動くようにフォント切り替えコマンドを実行させる必要があります。

使い方

usage: `\reDeclareMathAlphabet{\mathAA}{\mathBB}{\mathCC}`

欧文・和文両用の数式文字変更コマンド `\mathAA` を (再) 定義します。欧文用のコマンド `\mathBB` と、和文用の `\mathCC` を (p)_{La}T_EX 標準の方法で定義しておいた後、上のように記述します。なお、`{\mathBB}{\mathCC}` の部分については `{\@mathBB}{\@mathCC}` のように `@` をつけた記述をしてもかまいません (互換性のため)。上のような命令を発行すると、`\mathAA` が、欧文に対しては `\mathBB`、和文に対しては `\mathCC` の意味を持つようになります。通常は、`\reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}` のように `AA=BB` として用います。また、`\mathrm` は _{La}T_EX kernel において標準のコマンドとして既に定義されているので、この場合は `\mathrm` の再定義となります。native mode での `\rm` のような two letter command (old font command) に対しても同様なことが引き起こります。つまり、数式モードにおいて、新たな `\rm` は、_{La}T_EX original の `\rm` と `\mc` (正確に言えば `\mathrm` と `\mathmc` であるが) の意味を合わせ持つようになります。

補足

- `\mathAA` を再定義する他の命令 (`\DeclareSymbolFontAlphabet` を用いるパッケージの使用等) との衝突を避けるためには、`\AtBeginDocument` を併用するなどして展開位置の制御を行ってください。
- テキストモード時のエラー表示用に `\mathBB` のみを用いることを除いて、`\mathBB` と `\mathCC` の順は実際には意味を持ちません。和文、欧文の順に定義しても問題はありません。
- 第 2,3 引き数には `{\@mathBB}{\@mathCC}` のように `@` をつけた記述も行えます。ただし、形式は統一してください。判断は第 2 引き数で行っているため、`{\@mathBB}{\mathCC}` のような記述ではうまく動作しません。また、`\makeatletter` な状態で `{\@mathBB }{\@mathCC }` のような `@` と余分なスペースをつけた場合には無限ループを引き起こすことがあります。このような記述は避けるようにして下さい。
- `\reDeclareMathAlphabet` を実行する際には、`\mathBB`, `\mathCC` が定義されている必要はありません。実際に `\mathAA` を用いる際にはこれらの `\mathBB`, `\mathCC` が (p)LaTeX 標準の方法で定義されている必要があります。
- 他の部分で `\mathAA` を全く定義しない場合を除き、`\mathAA` は `\reDeclareMathAlphabet` を実行する以前で (p)LaTeX 標準の方法で定義されている必要があります (`\mathrm` や `\mathbf` の標準的なコマンドは、LaTeX kernel で既に定義されています)。 `\DeclareMathAlphabet` の場合には、`\reDeclareMathAlphabet` よりも前で 1 度 `\mathAA` を定義してあれば、`\reDeclareMathAlphabet` の後ろで再度 `\DeclareMathAlphabet` を用いて `\mathAA` の内部の定義内容を変更することには問題ありません。 `\DeclareSymbolFontAlphabet` の場合、再定義においても `\mathAA` が直接定義されるので、`\mathAA` に対する最後の `\DeclareSymbolFontAlphabet` のさらに後で `\reDeclareMathAlphabet` を実行しなければ有効とはなりません。
- `\documentstyle` の互換モードの場合、`\rm` 等の two letter command (old font command) は、`\reDeclareMathAlphabet` とは関連することのない別個のコマンドとして定義されます。従って、この場合には `\reDeclareMathAlphabet` を用いても `\rm` 等は数式モードにおいて欧文・和文両用のものとはなりません。

```

312 \def\reDeclareMathAlphabet#1#2#3{%
313   \edef#1{\noexpand\protect\expandafter\noexpand\csname%
314     \expandafter@gobble\string#1\space\space\endcsname}%
315   \edef\@tempa{\expandafter@gobble\string#2}%
316   \edef\@tempb{\expandafter@gobble\string#3}%
317   \edef\@tempc{\string @\expandafter@gobbletwo\string#2}%

```



```

318 \ifx\@tempc\@tempa%
319 \edef\@tempa{\expandafter\@gobbletwo\string#2}%
320 \edef\@tempb{\expandafter\@gobbletwo\string#3}%
321 \fi
322 \expandafter\edef\csname\expandafter\@gobble\string#1\space\space\endcsname%
323 {\noexpand\DualLang@mathalph@bet%
324 {\expandafter\noexpand\csname\@tempa\space\endcsname}%
325 {\expandafter\noexpand\csname\@tempb\space\endcsname}%
326 }%
327 }
328 \@onlypreamble\reDeclareMathAlphabet
329 \def\DualLang@mathalph@bet#1#2{%
330 \relax\ifmmode
331 \ifx\math@bgroup\bgroup% 2e normal style (\mathrm{...})
332 \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
333 \else
334 \ifx\math@bgroup\relax% 2e two letter style (\rm->\mathrm)
335 \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldstyle
336 \else
337 \ifx\math@bgroup\@empty% 2.09 oldfont style ({\mathrm ...})
338 \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldfont
339 \else% panic! assume 2e normal style
340 \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
341 \fi
342 \fi
343 \fi
344 \else
345 \let\DualLang@Mfontsw\@firstoftwo
346 \fi
347 \DualLang@Mfontsw{#1}{#2}%
348 }
349 \def\DLMfontsw@standard#1#2#3{#1{#2{#3}}\egroup}
350 \def\DLMfontsw@oldstyle#1#2{#1\relax\@fontswitch\relax{#2}}
351 \def\DLMfontsw@oldfont#1#2{#1\relax#2\relax}

```

`\DeclareRelationFont` 和文書体に対する従属書体を宣言するコマンドです。従属書体とは、ある和文書体とペアになる欧文書体のことです。主に多書体パッケージ `skfonts` を用いるための仕組みです。

`\DeclareRelationFont` コマンドの最初の 4 つの引数の組が和文書体の属性、その後の 4 つの引数の組が従属書体の属性です。

```

\DeclareRelationFont{JY2}{mc}{m}{n}{T1}{cmr}{m}{n}
\DeclareRelationFont{JY2}{gt}{m}{n}{T1}{cmr}{bx}{n}

```

上記の例は、明朝体の従属書体としてコンピュータモダンローマン、ゴシック体の従属書体としてコンピュータモダンボールドを宣言しています。カレント和文書体が `\JY2/mc/m/n` となると、自動的に欧文書体が `\T1/cmr/m/n` になります。また、和文書体が `\JY2/gt/m/n` になったときは、欧文書体が `\T1/cmr/bx/n` になります。

和文書体のシェイプ指定を省略するとエンコード／ファミリ／シリーズの組合せで従属書体が使われます。このときは、`\selectfont` が呼び出された時点でのシェイプ (`\f@shape`) の値が使われます。

`\DeclareRelationFont` の設定値はグローバルに有効です。`\SetRelationFont` の設定値はローカルに有効です。フォント定義ファイルで宣言をする場合は、`\DeclareRelationFont` を使ってください。

```

352 \def\all@shape{all}%
353 \def\DeclareRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
354   \def\rel@shape{#4}%
355   \ifx\rel@shape\@empty
356     \global
357     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
358       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
359       \romanseries{#7}}%
360   \else
361     \global
362     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
363       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
364       \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
365   \fi
366 }
367 \def\SetRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
368   \def\rel@shape{#4}%
369   \ifx\rel@shape\@empty
370     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
371       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
372       \romanseries{#7}}%
373   \else
374     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
375       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
376       \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
377   \fi
378 }

```

`\if@knjcmd` `\if@knjcmd` は欧文書体を従属書体にするかどうかのフラグです。このフラグが真になると、欧文書体に従属書体が使われます。このフラグは `\userelfont` コマンドによって、真となります。そして `\selectfont` 実行後には偽に初期化されます。

```

379 \newif\if@knjcmd
380 \def\userelfont{\@knjcmdtrue}

```

`\selectfont` `\selectfont` のオリジナルからの変更部分は、次の3点です。

- 和文書体を変更する部分
- 従属書体に変更する部分
- 和欧文のベースラインを調整する部分

\selectfont コマンドは、まず、和文フォントを切り替えます。

```
381 </plcore>
382 <*plcore | trace>
383 \DeclareRobustCommand\selectfont{%
384   \let\tmp@error@fontshape\error@fontshape
385   \let\error@fontshape\error@kfontshape
386   \edef\tmp@item{\k@encoding}%
387   \expandafter\expandafter\expandafter
388   \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
389   \ifin@
390     \let\cy@encoding\k@encoding
391     \edef\ct@encoding{\csname t@enc@\k@encoding\endcsname}%
392   \else
393     \expandafter\expandafter\expandafter
394     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
395     \ifin@
396       \let\ct@encoding\k@encoding
397       \edef\cy@encoding{\csname y@enc@\k@encoding\endcsname}%
398     \else
399       \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘\k@encoding’ unknown}\@eha
400     \fi
401   \fi
402   \let\font\tfont
403   \let\k@encoding\ct@encoding
404   \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
405   \pickup@font
406   \font@name
407   \let\font\jfont
408   \let\k@encoding\cy@encoding
409   \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
410   \pickup@font
411   \font@name
412   \expandafter\def\expandafter\k@encoding\tmp@item
413   \kenc@update
414   \let\error@fontshape\tmp@error@fontshape
```

次に、\if@knjcmd が真の場合、欧文書体を現在の和文書体に関連付けされたフォントに変えます。このフラグは \userelfont コマンドによって真となります。このフラグはここで再び、偽に設定されます。

```
415 \if@knjcmd \@knjcmdfalse
416   \expandafter\ifx
417   \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname\relax
418   \expandafter\ifx
419   \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname\relax
420   \else
421     \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname
422   \fi
423 \else
424   \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname
```

```
425 \fi
426 \fi
```

そして、欧文フォントを切り替えます。

```
427 \let\font\afont
428 \xdef\font@name{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
429 \pickup@font
430 \font@name
431 <trace> \ifnum \tracingfonts>\tw@
432 <trace> \font@info{Roman:Switching to \font@name}\fi
433 \enc@update
```

最後に、サイズが変更されていれば、ベースラインの調整などを行ないます。英語版の `\selectfont` では最初に行なっていますが、 $\mathrm{pL\TeX}$ 2_ε ではベースラインシフトの調整をするために、書体を確定しなければならないため、一番最後に行ないます

```
434 \ifx\f@linespread\baselinestretch \else
435 \set@fontsize\baselinestretch\f@size\f@baselineskip
436 \fi
437 \size@update}
```

`\KanjiEncodingPair` 和文の縦横のエンコーディングはそれぞれ対にして扱うため、セット化します

```
438 \def\KanjiEncodingPair#1#2{\@namedef{t@enc@#1}{#2}\@namedef{y@enc@#2}{#1}}
439 \KanjiEncodingPair{JY2}{JT2}
```

`\set@fontsize` `\fontsize` コマンドの内部形式です。ベースラインの設定と、支柱の設定を行ないます。

```
440 </plcore | trace>
441 <ptexrelease | trace>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\set@fontsize}
442 <ptexrelease | trace> {Construct \ystrutbox}%
443 <*plcore | ptexrelease | trace>
444 \def\set@fontsize#1#2#3{%
445 \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
446 \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
447 \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
448 \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
449 \edef\f@linespread{#1}%
450 \let\baselinestretch\f@linespread
451 \def\size@update{%
452 \baselineskip\f@baselineskip\relax
453 \baselineskip\f@linespread\baselineskip
454 \normalbaselineskip\baselineskip
```

ここで、ベースラインシフトの調整と支柱を組み立てます。

```
455 \adjustbaseline
456 \setbox\ystrutbox\hbox{\yoko
457 \vrule\@width\z@
458 \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
459 \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
```

```

460         \vrule\@width\z@
461         \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
462     \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
463         \vrule\@width\z@
464         \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%

```

フォントサイズとベースラインに関する診断情報を出力します。

```

465 <*trace>
466     \ifnum \tracingfonts>\tw@
467     \ifx\f@linespread\@empty
468     \let\reserved@a\@empty
469     \else
470     \def\reserved@a{\f@linespread x}%
471     \fi
472     \@font@info{Changing size to\space
473         \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
474     \aftergroup\type@restoreinfo
475     \fi
476 </trace>
477     \let\size@update\relax}}
478 </plcore | platexrelease | trace>
479 <platexrelease | trace>\plEndIncludeInRelease
480 <platexrelease | trace>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\set@fontsize}
481 <platexrelease | trace>                {Construct \ystrutbox}%
482 <platexrelease | trace>\def\set@fontsize#1#2#3{%
483 <platexrelease | trace>    \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
484 <platexrelease | trace>    \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
485 <platexrelease | trace>    \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
486 <platexrelease | trace>    \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
487 <platexrelease | trace>    \edef\f@linespread{#1}%
488 <platexrelease | trace>    \let\baselinestretch\f@linespread
489 <platexrelease | trace>    \def\size@update{%
490 <platexrelease | trace>        \baselineskip\f@baselineskip\relax
491 <platexrelease | trace>        \baselineskip\f@linespread\baselineskip
492 <platexrelease | trace>        \normalbaselineskip\baselineskip
493 <platexrelease | trace>        \adjustbaseline
494 <platexrelease | trace>        \setbox\strutbox\hbox{\yoko
495 <platexrelease | trace>            \vrule\@width\z@
496 <platexrelease | trace>            \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
497 <platexrelease | trace>        \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
498 <platexrelease | trace>            \vrule\@width\z@
499 <platexrelease | trace>            \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
500 <platexrelease | trace>        \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
501 <platexrelease | trace>            \vrule\@width\z@
502 <platexrelease | trace>            \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
503 <*trace>
504 <platexrelease | trace>    \ifnum \tracingfonts>\tw@
505 <platexrelease | trace>    \ifx\f@linespread\@empty
506 <platexrelease | trace>    \let\reserved@a\@empty
507 <platexrelease | trace>    \else

```

```

508 <platexrelease | trace>          \def\reserved@a{\f@linespread x}%
509 <platexrelease | trace>          \fi
510 <platexrelease | trace>          \font@info{Changing size to\space
511 <platexrelease | trace>          \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
512 <platexrelease | trace>          \aftergroup\type@restoreinfo
513 <platexrelease | trace>          \fi
514 </trace>
515 <platexrelease | trace>          \let\size@update\relax}}
516 <platexrelease | trace>\plEndIncludeInRelease
517 <*plcore | trace>

```

`\adjustbaseline` 現在の和文フォントの空白（EUC コード 0xA1A1）の中央に現在の欧文フォントの“/”の中央がくるようにベースラインシフトを設定します。

当初はまずベースラインシフト量をゼロにしていたましたが、`\tbaselineshift`を連続して変更した後に鉤括弧類を使うと余計なアキがでる問題が起こるため、`\tbaselineshift`をゼロクリアする処理を削除しました。

しかし、それではベースラインシフトを調整済みの欧文ボックスと比較してしまうため、計算した値が大きくなってしまいます。そこで、このボックスの中でゼロにするようにしました。また、“/”と比較していたのを“M”にしました。

```

518 \newbox\adjust@box
519 \newdimen\adjust@dimen
520 \def\adjustbaseline{%

```

和文フォントの基準値を設定します。

```

521   \setbox\adjust@box\hbox{\char\eut"A1A1}%
522   \ht\ht\adjust@box
523   \cdp\dp\adjust@box
524   \cww\wd\adjust@box
525   \cvs\normalbaselineskip
526   \chs\cww
527   \cHT\cht \advance\cHT\cdp

```

基準となる欧文フォントの文字を含んだボックスを作成し、ベースラインシフト量の計算を行ないます。計算式は次のとおりです。

$$\text{ベースラインシフト量} = \frac{\{(全角空白の深さ) - (Mの深さ)\} - \{(全角空白の高さ + 深さ) - (Mの高さ + 深さ)\}}{2}$$

```

528   \iftkdir
529   \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
530   \adjust@dimen\ht\adjust@box
531   \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
532   \advance\adjust@dimen-\cHT
533   \divide\adjust@dimen\tw@

```

```

534 \advance\adjust@dimen\cddp
535 \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
536 \tbaselineshift\adjust@dimen
537 <trace> \ifnum \tracingfonts>\tw@
538 <trace> \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}
539 <trace> \fi
540 \fi}
541 </plcore|trace>
542 <*plcore>

```

`\romanencoding` 書体のエンコードを指定するコマンドです。`\fontencoding` コマンドは和欧文のどちらかに影響します。`\DeclareKanjiEncoding` で指定されたエンコードは和文エンコードとして、`\DeclareFontEncoding` で指定されたエンコードは欧文エンコードとして認識されます。

`\kanjiencoding` と `\romanencoding` は与えられた引数が、エンコードとして登録されているかどうかだけを確認し、それが和文か欧文かのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、`\kanjiencoding` に欧文エンコードを指定したり、逆に `\romanencoding` に和文エンコードを指定した場合はエラーとなります。

```

543 \DeclareRobustCommand\romanencoding[1]{%
544   \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
545   \@latex@error{Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha
546   \else
547     \edef\f@encoding{#1}%
548     \ifx\cf@encoding\f@encoding
549       \let\enc@update\relax
550     \else
551       \let\enc@update\@enc@update
552     \fi
553   \fi
554 }
555 \DeclareRobustCommand\kanjiencoding[1]{%
556   \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
557   \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha
558   \else
559     \edef\k@encoding{#1}%
560     \ifx\ck@encoding\k@encoding
561       \let\kenc@update\relax
562     \else
563       \let\kenc@update\@kenc@update
564     \fi
565   \fi
566 }
567 \DeclareRobustCommand\fontencoding[1]{%
568   \edef\tmp@item{#1}%
569   \expandafter\expandafter\expandafter
570   \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%

```

```
571 \ifin@ \kanjiencoding{#1}\else\romanencoding{#1}\fi}
```

\@@kenc@update \kanjiencoding コマンドのコードからもわかるように、\ck@encoding と \k@encoding が異なる場合、\kenc@update コマンドは \@@kenc@update コマンドと等しくなります。

\@@kenc@update コマンドは、そのエンコードでのデフォルト値を設定するためのコマンドです。欧文用の \@@enc@update コマンドでは、573 行目と 574 行目のような代入もしていますが、和文用にはコメントにしてあります。これらは \DeclareTextCommand や \ProvideTextCommand などエンコードごとに設定されるコマンドを使うための仕組みです。しかし、和文エンコードに依存するようなコマンドやマクロを作成することは、現時点では、ないと思います。

```
572 \def\@@kenc@update{%
573 % \expandafter\let\csname\ck@encoding -cmd\endcsname\@changed@kcmd
574 % \expandafter\let\csname\k@encoding-cmd\endcsname\@current@cmd
575 \default@KT
576 \csname T@\k@encoding\endcsname
577 \csname D@\k@encoding\endcsname
578 \let\kenc@update\relax
579 \let\ck@encoding\k@encoding
580 \edef\tmp@item{\k@encoding}%
581 \expandafter\expandafter\expandafter
582 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
583 \ifin@ \let\cy@encoding\k@encoding
584 \else
585 \expandafter\expandafter\expandafter
586 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
587 \ifin@ \let\ct@encoding\k@encoding
588 \else
589 \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘\k@encoding’ unknown}\@eha
590 \fi
591 \fi
592 }
593 \let\kenc@update\relax
```

\@changed@cmd の和文エンコーディングバージョン。

```
594 \def\@changed@kcmd#1#2{%
595 \ifx\protect\@typeset@protect
596 \inmathwarn#1%
597 \expandafter\ifx\csname\ck@encoding\string#1\endcsname\relax
598 \expandafter\ifx\csname ?\string#1\endcsname\relax
599 \expandafter\def\csname ?\string#1\endcsname{%
600 \TextSymbolUnavailable#1%
601 }%
602 \fi
603 \global\expandafter\let
604 \csname\cf@encoding \string#1\expandafter\endcsname
```



```

605             \csname ?\string#1\endcsname
606         \fi
607         \csname\ck@encoding\string#1%
608             \expandafter\endcsname
609     \else
610         \noexpand#1%
611     \fi}

```

`\@notkfam` `\fontfamily` コマンド内で使用するフラグです。`@notkfam` フラグは和文ファミリ
`\@notffam` でなかったことを、`@notffam` フラグは欧文ファミリでなかったことを示します。

```

612 \newif\if@notkfam
613 \newif\if@notffam

614 \newif\if@tempwz

```

`\romanfamily` 書体のファミリを指定するコマンドです。

`\kanjifamily` `\kanjifamily` と `\romanfamily` は与えられた引数が、和文あるいは欧文のファミリとして正しいかのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、`\kanjifamily` に欧文ファミリを指定したり、逆に `\romanfamily` に和文ファミリを指定した場合は、エラーとなり、代用フォントかエラーフォントが使われます。

```

615 \DeclareRobustCommand\romanfamily[1]{\edef\f@family{#1}}
616 \DeclareRobustCommand\kanjifamily[1]{\edef\k@family{#1}}

```

`\fontfamily` は、指定された値によって、和文ファミリか欧文ファミリ、あるいは両方のファミリを切り替えます。和欧文ともに無効なファミリ名が指定された場合は、和欧文ともに代替書体が使用されます。

引数が `\rmfamily` のような名前与えられる可能性があるため、まず、これを展開したものを作ります。

また、和文ファミリと欧文ファミリのそれぞれになかったことを示すフラグを偽にセットします。

```

617 \DeclareRobustCommand\fontfamily[1]{%
618     \edef\tmp@item{#1}%
619     \@notkfamfalse
620     \@notffamfalse

```

次に、この引数が `\kfam@list` に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、`\k@family` にその値を入れます。

```

621     \expandafter\expandafter\expandafter
622     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%
623     \ifin@ \edef\k@family{#1}%

```

そうでないときは、`\notkfam@list` に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、この引数は和文ファミリではありませんので、`\@notkfam` フラグを真にして、欧文ファミリのルーチンに移ります。

このとき、`\efam@list`を調べるのではないことに注意をしてください。`\efam@list`を調べ、これにないファミリを和文ファミリであるとする、たとえば、欧文ナールファミリが定義されているけれども、和文ナールファミリが未定義の場合、`\fontfamily{nar}`という指定は、`nar`が`\efam@list`にだけ、登録されているため、和文書体をナールにすることができません。

逆に、`\kfam@list`に登録されていないからといって、`\k@family`に`nar`を設定すると、`cmr`のようなファミリも`\k@family`に設定される可能性があります。したがって、「欧文でない」を明示的に示す`\notkfam@list`を見る必要があります。

```
624 \else
625   \expandafter\expandafter\expandafter
626   \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notkfam@list}%
627   \ifin@ \notkfamtrue
```

`\notkfam@list`に登録されていない場合は、フォント定義ファイルが存在するかどうかを調べます。ファイルが存在する場合は、`\k@family`を変更します。ファイルが存在しない場合は、`\notkfam@list`に登録します。

`\kenc@list`に登録されているエンコードと、指定された和文ファミリの組合せのフォント定義ファイルが存在する場合は、`\k@family`に指定された値を入れます。

```
628 \else
629   \@tempzwzfalse
630   \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
631   \message{(I search kanjifont definition file:)}%
632   \def\enc@elt<#1>{\message{.}}%
633   \edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
634   \reserved@a{\@tempzwztrue}{\relax}%
635   \kenc@list
636   \message{)}%
637   \if@tempzwz
638     \edef\k@family{#1}%
```

つぎの部分が実行されるのは、和文ファミリとして認識できなかった場合です。この場合は、`\notkfam`フラグを真にして、`\notkfam@list`に登録します。

```
639 \else
640   \notkfamtrue
641   \xdef\notkfam@list{\notkfam@list\fam@elt<#1>}%
642   \fi
```

`\kfam@list`と`\notkfam@list`に登録されているかどうかを調べた`\ifin@`を閉じます。

```
643 \fi\fi
```

欧文ファミリの場合も、和文ファミリと同様の方法で確認をします。

```
644 \expandafter\expandafter\expandafter
645 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%
646 \ifin@ \edef\f@family{#1}\else
```

```

647 \expandafter\expandafter\expandafter
648 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notffam@list}%
649 \ifin@ \@notffamtrue \else
650 \@tempzwfalse
651 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
652 \message{(I search font definition file:)}%
653 \def\enc@elt<##1>{\message{.}}%
654 \edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
655 \reserved@a{\@tempzwtrue}{\relax}%
656 \fenc@list
657 \message{)}%
658 \if@tempzw
659 \edef\f@family{#1}%
660 \else
661 \@notffamtrue
662 \xdef\notffam@list{\notffam@list\fam@elt<#1>}%
663 \fi
664 \fi\fi

```

最後に、指定された文字列が、和文ファミリと欧文ファミリのいずれか、あるいは両方として認識されたかどうかを確認します。

どちらとも認識されていない場合は、ファミリの指定ミスですので、代用フォントを使うために、故意に指定された文字列をファミリに入れます。

```

665 \if@notkfam\if@notffam
666 \edef\k@family{#1}\edef\f@family{#1}%
667 \fi\fi

```

\romanseries 書体のシリーズを指定するコマンドです。**\fontseries** コマンドは和欧文の両方に影響します。

```

\fontseries 668 \DeclareRobustCommand\romanseries[1]{\edef\f@series{#1}}
669 \DeclareRobustCommand\kanjiseriess[1]{\edef\k@series{#1}}
670 \DeclareRobustCommand\fontseries[1]{\kanjiseriess{#1}\romanseriess{#1}}

```

\romanshape 書体のシェイプを指定するコマンドです。**\fontshape** コマンドは和欧文の両方に影響します。

```

\fontshape 671 \DeclareRobustCommand\romanshape[1]{\edef\f@shape{#1}}
672 \DeclareRobustCommand\kanjishape[1]{\edef\k@shape{#1}}
673 \DeclareRobustCommand\fontshape[1]{\kanjishape{#1}\romanshape{#1}}

```

\usekanji 書体属性を一度に指定するコマンドです。和文書体には **\usekanji** を、欧文書体には **\useroman** を指定してください。

\usefont **\usefont** コマンドは、第一引数で指定されるエンコードによって、和文または欧文フォントを切り替えます。

```

674 \def\usekanji#1#2#3#4{%
675 \kanjiencoding{#1}\kanjifamily{#2}\kanjiseriess{#3}\kanjishape{#4}%
676 \selectfont\ignorespaces}

```

```

677 \def\useroman#1#2#3#4{%
678     \romanencoding{#1}\romanfamily{#2}\romanseries{#3}\romanshape{#4}%
679     \selectfont\ignorespaces}
680 \def\usefont#1#2#3#4{%
681     \edef\tmp@item{{#1}}%
682     \expandafter\expandafter\expandafter
683     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
684     \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
685     \else\useroman{#1}{#2}{#3}{#4}%
686     \fi}

```

`\normalfont` 書体をデフォルト値にするコマンドです。和文書体もデフォルト値になるように再定義しています。ただし高速化のため、`\usekanji` と `\useroman` を展開し、`\selectfont` を一度しか呼び出さないようにしています。

```

687 \DeclareRobustCommand\normalfont{%
688     \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
689     \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
690     \kanjiserries{\kanjiserriesdefault}%
691     \kanjishape{\kanjishapedefault}%
692     \romanencoding{\encodingdefault}%
693     \romanfamily{\familydefault}%
694     \romanseries{\seriesdefault}%
695     \romanshape{\shapedefault}%
696     \selectfont\ignorespaces}
697 \adjustbaseline
698 \let\reset@font\normalfont

```

`\mcfamily` 和文書体を明朝体にする `\mcfamily` とゴシック体にする `\gtfamily` を定義します。
`\gtfamily` これらは、`\rmfamily` などに対応します。`\mathmc` と `\mathgt` は数式内で用いるときのコマンド名です。

```

699 \DeclareRobustCommand\mcfamily
700     {\not@math@alphabet\mcfamily\mathmc
701     \kanjifamily\mcdefault\selectfont}
702 \DeclareRobustCommand\gtfamily
703     {\not@math@alphabet\gtfamily\mathgt
704     \kanjifamily\gtdefault\selectfont}

```

`\romanprocess@table` 文書の先頭で、和文デフォルトフォントの変更が反映されないのを修正します。

```

\kanjiprocess@table 705 \let\romanprocess@table\process@table
\process@table      706 \def\kanjiprocess@table{%
707     \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
708     \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
709     \kanjiserries{\kanjiserriesdefault}%
710     \kanjishape{\kanjishapedefault}%
711 }
712 \def\process@table{%
713     \romanprocess@table

```

```

714 \kanjiprocess@table
715 }
716 \@onlypreamble\romanprocess@table
717 \@onlypreamble\kanjiprocess@table

```

`\textunderscore` このコマンドはテキストモードで指定された `_` の内部コマンドです。縦組での位置を調整するように再定義をします。もとは `ltoutenc.dtx` で定義されています。

なお、`_` を数式モードで使うと `\mathunderscore` が実行されます。

コミュニティ版では縦数式ディレクションでベースライン補正量が変わったのを直しました。あわせて横ディレクションでもベースライン補正に追随するようにしています。

```

718 </plcore>
719 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\textunderscore}
720 <latexrelease> {Baseline shift for \textunderscore}%
721 <*plcore|latexrelease>
722 \DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
723 \leavevmode\kern.06em
724 \raise-\iftdir\ifmdir\ybaselineshift
725 \else\tbaselineshift\fi
726 \else\ybaselineshift\fi
727 \vbox{\hrule\@width.3em}}
728 </plcore|latexrelease>
729 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
730 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\textunderscore}
731 <latexrelease> {Baseline shift for \textunderscore}%
732 <latexrelease>\DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
733 <latexrelease> \leavevmode\kern.06em
734 <latexrelease> \iftdir\raise-\tbaselineshift\fi
735 <latexrelease> \vbox{\hrule\@width.3em}}
736 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
737 <*plcore>

```

3.3 デフォルト設定ファイルの読み込み

最後に、デフォルト設定ファイルである、`upldefs.ltx` を読み込みます。このファイルについての詳細は、第4節を参照してください。T_EXの入力ファイル検索パスに設定されているディレクトリに `upldefs.cfg` ファイルがある場合は、そのファイルを使います。

```

738 \InputIfFileExists{upldefs.cfg}
739 {\typeout{*****^~J%
740 * Local config file upldefs.cfg used^~J%
741 *****}}%
742 {\input{upldefs.ltx}}
743 </plcore>

```

4 デフォルト設定ファイル

ここでは、フォーマットファイルに読み込まれるデフォルト値を設定しています。この節での内容は `pldefs.ltx` に出力されます。このファイルの内容を `plcore.ltx` に含めてもよいのですが、デフォルトの設定を参照しやすいように、別ファイルにしています。 `pldefs.ltx` は `plcore.ltx` から読み込まれます。

プリロードサイズは、DOCSTRIP プログラムのオプションで変更することができます。これ以外の設定を変更したい場合は、`pldefs.ltx` を直接、修正するのではなく、このファイルを `pldefs.cfg` という名前でコピーをして、そのファイルに対して修正を加えるようにしてください。

```
744 <*pldefs>
745 \ProvidesFile{upldefs.ltx}
746 [2016/06/29 v1.6e-u00 upLaTeX Kernel (Default settings)]
747 </pldefs>
```

4.1 合成文字

L^AT_EX 2_ε のカーネルのコードをそのまま使うと、pT_EX のベースライン補正量がゼロでないときに合成文字がおかしくなっていたため、対策します。

```
\g@tlastchart@ TEX Live 2015 で追加された \lastnodechar を利用して、「直前の文字」の符号位置を得るコードです。 \lastnodechar が未定義の場合は -1 が返ります。

748 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\g@tlastchart@}
749 <latexrelease> {Added \g@tlastchart@}%
750 <*pldefs | latexrelease>
751 \def\g@tlastchart@#1{#1\ifx\lastnodechar\undefined\m@ne\else\lastnodechar\fi}
752 </pldefs | latexrelease>
753 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
754 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\g@tlastchart@}
755 <latexrelease> {Added \g@tlastchart@}%
756 <latexrelease>\let\g@tlastchart@\@undefined
757 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

\pltx@isletter 第一引数のマクロ (#1) の置換テキストが、カテゴリコード 11 か 12 の文字トークン 1 文字であった場合に第二引数の内容に展開され、そうでない場合は第三引数の内容に展開されます。

758 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\pltx@isletter}
759 <latexrelease> {Added \pltx@isletter}%
760 <*pldefs | latexrelease>
761 \def\pltx@mark{\pltx@mark@}
762 \let\pltx@scanstop\relax
763 \long\def\pltx@cond#1\fi{%
764 #1\expandafter\@firstoftwo\else\expandafter\@secondoftwo\fi}
765 \long\def\pltx@isletter#1{%
```

```

766 \expandafter\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop}
767 \long\def\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop{%
768 \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi{\@firstoftwo}%
769 {\pltx@isletter@ii\pltx@scanstop#1\pltx@scanstop}{#1\pltx@mark}}
770 \long\def\pltx@isletter@ii#1\pltx@scanstop{%
771 \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi%
772 {\pltx@isletter@iii}{\pltx@isletter@iv}}
773 \long\def\pltx@isletter@iii#1\pltx@mark{\@secondoftwo}
774 \long\def\pltx@isletter@iv#1#2#3\pltx@mark{%
775 \pltx@cond\ifx\pltx@mark#3\pltx@mark\fi%
776 \pltx@cond{\ifnum0\ifcat A\noexpand#21\fi\ifcat=\noexpand#21\fi>\z@}\fi
777 {\@firstoftwo}{\@secondoftwo}}%
778 }{\@secondoftwo}}
779 </pldefs | platexrelease>
780 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
781 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@isletter}
782 <platexrelease> {Added \pltx@isletter}%
783 <platexrelease>\let\pltx@isletter\@undefined
784 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@text@composite` 合成文字の内部命令です。v1.6a で誤って L^AT_EX の定義を上書きしてしまいましたが、v1.6c で外しました。

```

785 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\@text@composite}
786 <platexrelease> {Wrong fix for non-zero baselineshift}%
787 <platexrelease>\def\@text@composite#1#2#3\@text@composite{%
788 <platexrelease> \expandafter\@text@composite@x
789 <platexrelease> \csname\string#1-\string#2\endcsname}
790 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
791 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@text@composite}
792 <platexrelease> {Wrong fix for non-zero baselineshift}%
793 <platexrelease>\def\@text@composite#1#2#3{%
794 <platexrelease> \begingroup
795 <platexrelease> \setbox\z@=\hbox\bgroup%
796 <platexrelease> \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
797 <platexrelease> \expandafter\@text@composite@x
798 <platexrelease> \csname\string#1-\string#2\endcsname}
799 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
800 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@text@composite}
801 <platexrelease> {Wrong fix for non-zero baselineshift}%
802 <platexrelease>\def\@text@composite#1#2#3\@text@composite{%
803 <platexrelease> \expandafter\@text@composite@x
804 <platexrelease> \csname\string#1-\string#2\endcsname}
805 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@text@composite@x` 合成文字の内部命令です。`\g@tlastchart@`と`\pltx@isletter`を使います。

```

806 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/07/01}{\@text@composite@x}
807 <platexrelease> {Fix for non-zero baselineshift}%
808 <platexrelease>\def\@text@composite@x#1{%
809 <platexrelease> \ifx#1\relax

```

```

810 <latexrelease> \expandafter\@secondoftwo
811 <latexrelease> \else
812 <latexrelease> \expandafter\@firstoftwo
813 <latexrelease> \fi
814 <latexrelease> #1}
815 <latexrelease> \plEndIncludeInRelease
816 <latexrelease> \plIncludeInRelease{2016/06/10}{\@text@composite@x}
817 <latexrelease> {Fix for non-zero baselineshift}%
818 <latexrelease> \def\@text@composite@x#1#2{%
819 <latexrelease> \ifx#1\relax
820 <latexrelease> #2%
821 <latexrelease> \else\pltx@isletter{#1}{#1}{%
822 <latexrelease> \begingroup
823 <latexrelease> \setbox\z@\hbox\bgroup%
824 <latexrelease> \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
825 <latexrelease> #1%
826 <latexrelease> \g@tlastchart@\@tempcntb
827 <latexrelease> \xdef\pltx@composite@temp{\noexpand\@tempcntb=\the\@tempcntb\relax}%
828 <latexrelease> \aftergroup\pltx@composite@temp
829 <latexrelease> \egroup
830 <latexrelease> \ifnum\@tempcntb<\z@
831 <latexrelease> \@tempdima=\iftdir
832 <latexrelease> \ifmdir
833 <latexrelease> \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
834 <latexrelease> \else
835 <latexrelease> \tbaselineshift
836 <latexrelease> \fi
837 <latexrelease> \else
838 <latexrelease> \ybaselineshift
839 <latexrelease> \fi
840 <latexrelease> \@tempcntb=\@cclvi
841 <latexrelease> \else\@tempdima=\z@
842 <latexrelease> \fi
843 <latexrelease> \ifnum\@tempcntb<\@cclvi
844 <latexrelease> \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
845 <latexrelease> \ifodd\xspcode\@tempcntb\else\leavevmode\hbox{}\fi
846 <latexrelease> \fi\fi
847 <latexrelease> \begingroup\mathsurround\z@${%
848 <latexrelease> \ifx\textbaselineshiftfactor\undefined\else
849 <latexrelease> \textbaselineshiftfactor\z@\fi
850 <latexrelease> \box\z@
851 <latexrelease> $endgroup%
852 <latexrelease> \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
853 <latexrelease> \ifnum\xspcode\@tempcntb<2\hbox{}\fi
854 <latexrelease> \fi\fi
855 <latexrelease> \else
856 <latexrelease> \ifdim\@tempdima=\z@{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@#1}%
857 <latexrelease> \else\lower\@tempdima\box\z@\fi
858 <latexrelease> \fi
859 <latexrelease> \endgroup}%

```



```

860 <latexrelease> \fi
861 <latexrelease>}
862 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
863 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@text@composite@x}
864 <latexrelease> {Fix for non-zero baselineshift}%
865 <latexrelease>\def\@text@composite@x#1#2{%
866 <latexrelease> \ifx#1\relax
867 <latexrelease> \expandafter\@secondoftwo
868 <latexrelease> \else
869 <latexrelease> \expandafter\@firstoftwo
870 <latexrelease> \fi
871 <latexrelease> #1#2\egroup
872 <latexrelease> \leavevmode
873 <latexrelease> \expandafter\lower
874 <latexrelease> \iftdir
875 <latexrelease> \ifmdir
876 <latexrelease> \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
877 <latexrelease> \else
878 <latexrelease> \tbaselineshift
879 <latexrelease> \fi
880 <latexrelease> \else
881 <latexrelease> \ybaselineshift
882 <latexrelease> \fi
883 <latexrelease> \box\z@
884 <latexrelease> \endgroup}
885 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
886 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@text@composite@x}
887 <latexrelease> {Fix for non-zero baselineshift}%
888 <latexrelease>\def\@text@composite@x#1{%
889 <latexrelease> \ifx#1\relax
890 <latexrelease> \expandafter\@secondoftwo
891 <latexrelease> \else
892 <latexrelease> \expandafter\@firstoftwo
893 <latexrelease> \fi
894 <latexrelease> #1}
895 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
896 <*pdefs>

```

4.2 イタリック補正

\check@nocorr@ 「あ\texttt{abc}い」としたとき、書体の変更を指定された欧文の左側に和欧文間スペースが入らないのを修正します。

```

897 \def \check@nocorr@ #1#2\nocorr#3\@nil {%
898 \let \check@icl \relax% \maybe@ic から変更
899 \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
900 \def \reserved@a {\nocorr}%
901 \def \reserved@b {#1}%
902 \def \reserved@c {#3}%
903 \ifx \reserved@a \reserved@b

```

```

904 \ifx \reserved@c \@empty
905 \let \check@ic1 \@empty
906 \else
907 \let \check@ic1 \@empty
908 \let \check@icr \@empty
909 \fi
910 \else
911 \ifx \reserved@c \@empty
912 \else
913 \let \check@icr \@empty
914 \fi
915 \fi
916 }

```

4.3 テキストフォント

テキストフォントのための属性やエラー書体などの宣言です。

縦横エンコード共通：

```

917 \DeclareKanjiEncodingDefaults{}{}
918 \DeclareErrorKanjiFont{JY2}{mc}{m}{n}{10}

```

横組エンコード：

```

919 \DeclareYokoKanjiEncoding{JY2}{}{}
920 \DeclareKanjiSubstitution{JY2}{mc}{m}{n}

```

縦組エンコード：

```

921 \DeclareTateKanjiEncoding{JT2}{}{}
922 \DeclareKanjiSubstitution{JT2}{mc}{m}{n}

```

フォント属性のデフォルト値：

```

923 \newcommand\mcdefault{mc}
924 \newcommand\gtdefault{gt}
925 \newcommand\kanjiencodingdefault{JY2}
926 \newcommand\kanjifamilydefault{\mcdefault}
927 \newcommand\kanjiseriessdefault{\mddefault}
928 \newcommand\kanjishapedefault{\updefault}

```

和文エンコードの指定：

```

929 \kanjiencoding{JY2}

```

フォント定義：これらの具体的な内容は第 5 節を参照してください。

```

930 \input{jy2mc.fd}
931 \input{jy2gt.fd}
932 \input{jt2mc.fd}
933 \input{jt2gt.fd}

```

フォントを有効にする

```

934 \fontencoding{JT2}\selectfont
935 \fontencoding{JY2}\selectfont

```

`\textmc` テキストファミリを切り替えるためのコマンドです。ltfntcmd.dtx で定義されて

`\textgt` いる `\textrm` などに対応します。

```

936 \DeclareTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
937 \DeclareTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}

\em 従来は \em, \emph で和文フォントの切り替えは行っていませんでしたが、和文フォ
\emph ントも \gtfamily に切り替えるようにしました。LATEX <2015/01/01>で追加され
\emminnershape た \emminnershape も取り入れ、強調コマンドを入れ子にする場合の書体を自由に
再定義できるようになりました。
938 </pldefs>
939 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\emminnershape}{\emminnershape}%
940 <*pldefs | latexrelease>
941 \DeclareRobustCommand\em
942     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
943         \emminnershape \else \gtfamily \itshape \fi}%
944 \def\emminnershape{\mcfamily \upshape}%
945 </pldefs | latexrelease>
946 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
947 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2015/01/01}{\emminnershape}{\emminnershape}%
948 <latexrelease>\DeclareRobustCommand\em
949 <latexrelease>     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
950 <latexrelease>         \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
951 <latexrelease>\def\emminnershape{\upshape}% defined by LaTeX, but not used by pLaTeX
952 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
953 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\emminnershape}{\emminnershape}%
954 <latexrelease>\DeclareRobustCommand\em
955 <latexrelease>     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
956 <latexrelease>         \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
957 <latexrelease>\let\emminnershape\@undefined
958 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
959 <*pldefs>

```

4.4 プリロードフォント

あらかじめフォーマットファイルにロードされるフォントの宣言です。DOCSTRIP プログラムのオプションでロードされるフォントのサイズを変更することができます。uplatex.ins では xpt を指定しています。

```

960 <*xpt>
961 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
962 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
963 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
964 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
965 </xpt>
966 <*xipt>
967 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}

```

```

968 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
969 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}
970 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
971 \</xipt>
972 \<*xipt>
973 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
974 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
975 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
976 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
977 \</xipt>
978 \<*ori>
979 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}
980         {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
981 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}
982         {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
983 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}
984         {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
985 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}
986         {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
987 \</ori>

```

4.5 組版パラメータ

禁則パラメータや文字間へ挿入するスペースの設定などです。実際の各文字への禁則パラメータおよびスペースの挿入の許可設定などは、`kinsoku.tex`で行なっています。具体的な設定については、`kinsoku.dtx`を参照してください。

```

988 \InputIfFileExists{ukinsoku.tex}%
989   {\message{Loading kinsoku patterns for japanese.}}
990   {\errhelp{The configuration for kinsoku is incorrectly installed.^^J%
991             If you don't understand this error message you need
992             to seek^^Jexpert advice.}%
993   \errmessage{OOPS! I can't find any kinsoku patterns for japanese^^J%
994             \space Think of getting some or the
995             uplatex2e setup will never succeed}\@@end}

```

組版パラメータの設定をします。`\kanjiskip`は、漢字と漢字の間に挿入されるグルーです。`\noautospaceing`で、挿入を中止することができます。デフォルトは`\autospaceing`です。

```

996 \kanjiskip=0pt plus .4pt minus .5pt
997 \autospaceing

```

`\xkanjiskip`は、和欧文間に自動的に挿入されるグルーです。`\noautoxspaceing`で、挿入を中止することができます。デフォルトは`\autoxspaceing`です。

```

998 \xkanjiskip=.25zw plus1pt minus1pt
999 \autoxspaceing

```

`\jcharwidowpenalty`は、パラグラフに対する禁則です。パラグラフの最後の行が1文字だけにならないように調整するために使われます。

```
1000 \jcharwidowpenalty=500
```

最後に、`\inhibitglue` の簡略形を定義します。このコマンドは、和文フォントのメトリック情報から、自動的に挿入されるグルーの挿入を禁止します。

```
1001 \def\<\inhibitglue
```

ここまでが、`pldefs.ltx` の内容です。

```
1002 \>/pldefs
```

5 フォント定義ファイル

ここでは、フォント定義ファイルの設定をしています。フォント定義ファイルは、 $\mathrm{\LaTeX}$ のフォント属性を $\mathrm{\TeX}$ フォントに置き換えるためのファイルです。記述方法についての詳細は、`fntguide.tex` を参照してください。

欧文書体の設定については、`cmfonts.fdd` や `slides.fdd` など参照してください。`skfonts.fdd` には、写研代用書体を使うためのパッケージとフォント定義が記述されています。

```
1003 \<JY2mc>\ProvidesFile{jy2mc.fd}
```

```
1004 \<JY2gt>\ProvidesFile{jy2gt.fd}
```

```
1005 \<JT2mc>\ProvidesFile{jt2mc.fd}
```

```
1006 \<JT2gt>\ProvidesFile{jt2gt.fd}
```

```
1007 \<JY2mc,JY2gt,JT2mc,JT2gt> [1997/01/24 v1.3 KANJI font defines]
```

横組用、縦組用ともに、明朝体のシリーズ `bx` がゴシック体となるように宣言しています。

```
1008 \<*JY2mc>
```

```
1009 \DeclareKanjiFamily{JY2}{mc}{}
```

```
1010 \DeclareRelationFont{JY2}{mc}{m}{T1}{cmr}{m}{}
```

```
1011 \DeclareRelationFont{JY2}{mc}{bx}{T1}{cmr}{bx}{}
```

```
1012 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisr-h}{}
```

```
1013 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
```

```
1014 \>/JY2mc>
```

```
1015 \<*JT2mc>
```

```
1016 \DeclareKanjiFamily{JT2}{mc}{}
```

```
1017 \DeclareRelationFont{JT2}{mc}{m}{T1}{cmr}{m}{}
```

```
1018 \DeclareRelationFont{JT2}{mc}{bx}{T1}{cmr}{bx}{}
```

```
1019 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisr-v}{}
```

```
1020 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
```

```
1021 \>/JT2mc>
```

```
1022 \<*JY2gt>
```

```
1023 \DeclareKanjiFamily{JY2}{gt}{}
```

```
1024 \DeclareRelationFont{JY2}{gt}{m}{T1}{cmr}{bx}{}
```

```
1025 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisg-h}{}
```

```
1026 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
```

```
1027 \>/JY2gt>
```

```
1028 \<*JT2gt>
```

```

1029 \DeclareKanjiFamily{JT2}{gt}{}
1030 \DeclareRelationFont{JT2}{gt}{m}{}{T1}{cmr}{bx}{}
1031 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisg-v}{}
1032 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
1033 </JT2gt>

```

File c

ukinsoku.dtx

このファイルは、禁則と文字間スペースの設定について説明をしています。日本語 T_EX の機能についての詳細は、『日本語 T_EX テクニカルブック I』を参照してください。

なお、このファイルのコード部分は、以前のバージョンで配布された `ukinsoku.tex` と同一です。

```
1 <*plcore>
```

6 禁則

ある文字を行頭禁則の対象にするには、`\prebreakpenalty` に正の値を指定します。ある文字を行末禁則の対象にするには、`\postbreakpenalty` に正の値を指定します。数値が大きいほど、行頭、あるいは行末で改行されにくくなります。

6.1 半角文字に対する禁則

ここでは、半角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
2 %%
3 %% 行頭、行末禁則パラメータ
4 %%
5 %% 1byte characters
6 \prebreakpenalty'!=10000
7 \prebreakpenalty'"=10000
8 \postbreakpenalty'\#=500
9 \postbreakpenalty'\$=500
10 \postbreakpenalty'\%=500
11 \postbreakpenalty'\&=500
12 \postbreakpenalty'\ '=10000
13 \prebreakpenalty' '=10000
14 \prebreakpenalty')=10000
15 \postbreakpenalty' (=10000
16 \prebreakpenalty'*=500
17 \prebreakpenalty'+=500
18 \prebreakpenalty'-=10000
19 \prebreakpenalty'.=10000
20 \prebreakpenalty',=10000
21 \prebreakpenalty'/=500
22 \prebreakpenalty';=10000
23 \prebreakpenalty'?=10000
24 \prebreakpenalty':=10000
25 \prebreakpenalty']=10000
```

```
26 \postbreakpenalty' [=10000
```

6.2 全角文字に対する禁則

ここでは、全角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
27 %%全角文字
28 \prebreakpenalty' \ =10000
29 \prebreakpenalty' 。 =10000
30 \prebreakpenalty' , =10000
31 \prebreakpenalty' . =10000
32 \prebreakpenalty' ' =10000
33 \prebreakpenalty' : =10000
34 \prebreakpenalty' ; =10000
35 \prebreakpenalty' ? =10000
36 \prebreakpenalty' ! =10000
37 \prebreakpenalty' ^ =10000%\jis"212B
38 \prebreakpenalty' ^ =10000%\jis"212C
39 \prebreakpenalty' ^ =10000%\jis"212D
40 \postbreakpenalty' ^ =10000%\jis"212E
41 \prebreakpenalty' 々 =10000%\jis"2139
42 \prebreakpenalty' … =250%\jis"2144
43 \prebreakpenalty' … =250%\jis"2145
44 \postbreakpenalty' ‘ =10000%\jis"2146
45 \prebreakpenalty' ’ =10000%\jis"2147
46 \postbreakpenalty' “ =10000%\jis"2148
47 \prebreakpenalty' ” =10000%\jis"2149
48 \prebreakpenalty' ) =10000
49 \postbreakpenalty' ( =10000
50 \prebreakpenalty' } =10000
51 \postbreakpenalty' { =10000
52 \prebreakpenalty' ] =10000
53 \postbreakpenalty' [ =10000
54 %%\postbreakpenalty' ‘ =10000
55 %%\prebreakpenalty' ’ =10000
56 \postbreakpenalty' [=10000%\jis"214C
57 \prebreakpenalty' ] =10000%\jis"214D
58 \postbreakpenalty' < =10000%\jis"2152
59 \prebreakpenalty' > =10000%\jis"2153
60 \postbreakpenalty' 《 =10000%\jis"2154
61 \prebreakpenalty' 》 =10000%\jis"2155
62 \postbreakpenalty' 「 =10000%\jis"2156
63 \prebreakpenalty' 」 =10000%\jis"2157
64 \postbreakpenalty' 『 =10000%\jis"2158
65 \prebreakpenalty' 』 =10000%\jis"2159
66 \postbreakpenalty' [=10000%\jis"215A
67 \prebreakpenalty' ] =10000%\jis"215B
68 \prebreakpenalty' − =10000
69 \prebreakpenalty' + =200
70 \prebreakpenalty' − =200% U+2212 MINUS SIGN
```



```

71 \prebreakpenalty'－=200% U+FF0D FULLWIDTH HYPHEN-MINUS
72 \prebreakpenalty'＝=200
73 \postbreakpenalty'＃=200
74 \postbreakpenalty'$=200
75 \postbreakpenalty'%=200
76 \postbreakpenalty'＆amp;=200
77 \prebreakpenalty'ぁ=150
78 \prebreakpenalty'ぃ=150
79 \prebreakpenalty'ぅ=150
80 \prebreakpenalty'ゑ=150
81 \prebreakpenalty'ぉ=150
82 \prebreakpenalty'っ=150
83 \prebreakpenalty'ゃ=150
84 \prebreakpenalty'っ=150
85 \prebreakpenalty'ょ=150
86 \prebreakpenalty'わ=150%\jis"246E
87 \prebreakpenalty'ア=150
88 \prebreakpenalty'イ=150
89 \prebreakpenalty'ウ=150
90 \prebreakpenalty'エ=150
91 \prebreakpenalty'オ=150
92 \prebreakpenalty'ツ=150
93 \prebreakpenalty'ヤ=150
94 \prebreakpenalty'コ=150
95 \prebreakpenalty'ヨ=150
96 \prebreakpenalty'ワ=150%\jis"256E
97 \prebreakpenalty'カ=150%\jis"2575
98 \prebreakpenalty'ケ=150%\jis"2576
99 %% kinsoku JIS X 0208 additional
100 \prebreakpenalty'`=10000
101 \prebreakpenalty'`=10000
102 \prebreakpenalty'`=10000
103 \prebreakpenalty'`=10000
104 %%
105 %% kinsoku JIS X 0213
106 %%
107 \prebreakpenalty' /=10000
108 \prebreakpenalty' /=10000
109 \prebreakpenalty' \=10000
110 \prebreakpenalty' \=10000
111 \postbreakpenalty'☒=10000
112 \prebreakpenalty'☒=10000
113 \postbreakpenalty'《=10000
114 \prebreakpenalty'》=10000
115 \postbreakpenalty'『=10000
116 \prebreakpenalty'』=10000
117 \postbreakpenalty'【=10000
118 \prebreakpenalty'】=10000
119 \postbreakpenalty'«=10000
120 \prebreakpenalty'»=10000

```

```

121 \postbreakpenalty' `=10000
122 \prebreakpenalty' `=10000
123 \prebreakpenalty' `!=10000
124 \prebreakpenalty' `??=10000
125 \prebreakpenalty' `?!=10000
126 \prebreakpenalty' `!?=10000
127 \postbreakpenalty' `i=10000
128 \postbreakpenalty' `ゝ=10000
129 \prebreakpenalty' `: =10000
130 \prebreakpenalty' `^a=10000
131 \prebreakpenalty' `^o=10000
132 \prebreakpenalty' `^1=10000
133 \prebreakpenalty' `^2=10000
134 \prebreakpenalty' `^3=10000
135 \postbreakpenalty' `€=10000
136 \prebreakpenalty' `か=150
137 \prebreakpenalty' `け=150
138 \prebreakpenalty' `ク=150
139 \prebreakpenalty' `シ=150
140 \prebreakpenalty' `ス=150
141 \prebreakpenalty' `ト=150
142 \prebreakpenalty' `ヌ=150
143 \prebreakpenalty' `ハ=150
144 \prebreakpenalty' `ヒ=150
145 \prebreakpenalty' `フ=150
146 \prebreakpenalty' `へ=150
147 \prebreakpenalty' `ホ=150
148 %%\prebreakpenalty' `フ °=150
149 \prebreakpenalty' `ム=150
150 \prebreakpenalty' `ラ=150
151 \prebreakpenalty' `リ=150
152 \prebreakpenalty' `ル=150
153 \prebreakpenalty' `レ=150
154 \prebreakpenalty' `ロ=150
155 %%
156 %% kinsoku JIS X 0212
157 %%
158 %%\postbreakpenalty' `i=10000
159 %%\postbreakpenalty' `ゝ=10000
160 %%\prebreakpenalty' `^o=10000
161 %%\prebreakpenalty' `^a=10000
162 \prebreakpenalty' `☒=10000
163 %%
164 %% kinsoku 半角片仮名
165 %%
166 \prebreakpenalty' `。=10000
167 \prebreakpenalty' `、=10000
168 \prebreakpenalty' `ゝ=10000
169 \prebreakpenalty' `°=10000
170 \prebreakpenalty' `」=10000

```

```
171 \postbreakpenalty'␣=10000
```

7 文字間のスペース

ある英字の前後と、その文字に隣合う漢字に挿入されるスペースを制御するには、`\xspcode` を用います。

ある漢字の前後と、その文字に隣合う英字に挿入されるスペースを制御するには、`\inhibitxspcode` を用います。

7.1 ある英字と前後の漢字の間の制御

ここでは、英字に対する設定を行なっています。

指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の漢字の間での処理を禁止する。
- 1 直前の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 2 直後の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 3 前後の漢字との間でのスペースの挿入を許可する。

```
172 %%
173 %% xspcode
174 \xspcode' (=1
175 \xspcode')=2
176 \xspcode'[=1
177 \xspcode']=2
178 \xspcode' '=1
179 \xspcode' '=2
180 \xspcode';=2
181 \xspcode',=2
182 \xspcode' .=2
183 %% for 8bit Latin
184 \xspcode"80=3
185 \xspcode"81=3
186 \xspcode"82=3
187 \xspcode"83=3
188 \xspcode"84=3
189 \xspcode"85=3
190 \xspcode"86=3
191 \xspcode"87=3
192 \xspcode"88=3
193 \xspcode"89=3
194 \xspcode"8A=3
195 \xspcode"8B=3
196 \xspcode"8C=3
197 \xspcode"8D=3
198 \xspcode"8E=3
```

199 \xspcode"8F=3
200 \xspcode"90=3
201 \xspcode"91=3
202 \xspcode"92=3
203 \xspcode"93=3
204 \xspcode"94=3
205 \xspcode"95=3
206 \xspcode"96=3
207 \xspcode"97=3
208 \xspcode"98=3
209 \xspcode"99=3
210 \xspcode"9A=3
211 \xspcode"9B=3
212 \xspcode"9C=3
213 \xspcode"9D=3
214 \xspcode"9E=3
215 \xspcode"9F=3
216 \xspcode"A0=3
217 \xspcode"A1=3
218 \xspcode"A2=3
219 \xspcode"A3=3
220 \xspcode"A4=3
221 \xspcode"A5=3
222 \xspcode"A6=3
223 \xspcode"A7=3
224 \xspcode"A8=3
225 \xspcode"A9=3
226 \xspcode"AA=3
227 \xspcode"AB=3
228 \xspcode"AC=3
229 \xspcode"AD=3
230 \xspcode"AE=3
231 \xspcode"AF=3
232 \xspcode"B0=3
233 \xspcode"B1=3
234 \xspcode"B2=3
235 \xspcode"B3=3
236 \xspcode"B4=3
237 \xspcode"B5=3
238 \xspcode"B6=3
239 \xspcode"B7=3
240 \xspcode"B8=3
241 \xspcode"B9=3
242 \xspcode"BA=3
243 \xspcode"BB=3
244 \xspcode"BC=3
245 \xspcode"BD=3
246 \xspcode"BE=3
247 \xspcode"BF=3
248 \xspcode"C0=3

249 \xspcode"C1=3
250 \xspcode"C2=3
251 \xspcode"C3=3
252 \xspcode"C4=3
253 \xspcode"C5=3
254 \xspcode"C6=3
255 \xspcode"C7=3
256 \xspcode"C8=3
257 \xspcode"C9=3
258 \xspcode"CA=3
259 \xspcode"CB=3
260 \xspcode"CC=3
261 \xspcode"CD=3
262 \xspcode"CE=3
263 \xspcode"CF=3
264 \xspcode"D0=3
265 \xspcode"D1=3
266 \xspcode"D2=3
267 \xspcode"D3=3
268 \xspcode"D4=3
269 \xspcode"D5=3
270 \xspcode"D6=3
271 \xspcode"D7=3
272 \xspcode"D8=3
273 \xspcode"D9=3
274 \xspcode"DA=3
275 \xspcode"DB=3
276 \xspcode"DC=3
277 \xspcode"DD=3
278 \xspcode"DE=3
279 \xspcode"DF=3
280 \xspcode"E0=3
281 \xspcode"E1=3
282 \xspcode"E2=3
283 \xspcode"E3=3
284 \xspcode"E4=3
285 \xspcode"E5=3
286 \xspcode"E6=3
287 \xspcode"E7=3
288 \xspcode"E8=3
289 \xspcode"E9=3
290 \xspcode"EA=3
291 \xspcode"EB=3
292 \xspcode"EC=3
293 \xspcode"ED=3
294 \xspcode"EE=3
295 \xspcode"EF=3
296 \xspcode"F0=3
297 \xspcode"F1=3
298 \xspcode"F2=3

```

299 \xspcode"F3=3
300 \xspcode"F4=3
301 \xspcode"F5=3
302 \xspcode"F6=3
303 \xspcode"F7=3
304 \xspcode"F8=3
305 \xspcode"F9=3
306 \xspcode"FA=3
307 \xspcode"FB=3
308 \xspcode"FC=3
309 \xspcode"FD=3
310 \xspcode"FE=3
311 \xspcode"FF=3

```

7.2 ある漢字と前後の英字の間の制御

ここでは、漢字に対する設定を行なっています。

指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 1 直前の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 2 直後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 3 前後の英字との間でのスペースの挿入を許可する。

```

312 %%
313 %% inhibitxspcode
314 \inhibitxspcode‘ =1
315 \inhibitxspcode。 =1
316 \inhibitxspcode‘, =1
317 \inhibitxspcode‘. =1
318 \inhibitxspcode‘ ; =1
319 \inhibitxspcode‘ ? =1
320 \inhibitxspcode‘ ) =1
321 \inhibitxspcode‘ ( =2
322 \inhibitxspcode‘ ] =1
323 \inhibitxspcode‘ [=2
324 \inhibitxspcode‘ } =1
325 \inhibitxspcode‘ { =2
326 \inhibitxspcode‘ ‘ =2
327 \inhibitxspcode‘ ’ =1
328 \inhibitxspcode‘ “ =2
329 \inhibitxspcode‘ ” =1
330 \inhibitxspcode‘ [=2
331 \inhibitxspcode‘ ’ =1
332 \inhibitxspcode‘ < =2
333 \inhibitxspcode‘ > =1
334 \inhibitxspcode‘ 《 =2
335 \inhibitxspcode‘ 》 =1

```

```

336 \inhibitxspcode'「=2
337 \inhibitxspcode'」=1
338 \inhibitxspcode'『=2
339 \inhibitxspcode'』=1
340 \inhibitxspcode'〔=2
341 \inhibitxspcode'〕=1
342 \inhibitxspcode'—=0% U+2014 EM DASH
343 \inhibitxspcode'—=0% U+2015 HORIZONTAL BAR
344 \inhibitxspcode'~=0% U+301C WAVE DASH
345 \inhibitxspcode'~=0% U+FF5E FULLWIDTH TILDE
346 \inhibitxspcode'…=0
347 \inhibitxspcode'¥=0% U+00A5 YEN SIGN
348 \inhibitxspcode'¥=0% U+FFE5 FULLWIDTH YEN SIGN
349 \inhibitxspcode'°=1
350 \inhibitxspcode'′=1
351 \inhibitxspcode'″=1
352 %%
353 %% inhibitxspcode JIS X 0213
354 %%
355 \inhibitxspcode'☒=2
356 \inhibitxspcode'☒=1
357 \inhibitxspcode'《=2
358 \inhibitxspcode'》=1
359 \inhibitxspcode'《=2
360 \inhibitxspcode'》=1
361 \inhibitxspcode'〔=2
362 \inhibitxspcode'〕=1
363 \inhibitxspcode'«=2
364 \inhibitxspcode'»=1
365 \inhibitxspcode'≈=2
366 \inhibitxspcode'≈=1
367 \inhibitxspcode'!!=1
368 \inhibitxspcode'??=1
369 \inhibitxspcode'?!=1
370 \inhibitxspcode'!?=1
371 \inhibitxspcode'¡=2
372 \inhibitxspcode'¿=2
373 \inhibitxspcode'ª=1
374 \inhibitxspcode'º=1
375 \inhibitxspcode'¹=1
376 \inhibitxspcode'²=1
377 \inhibitxspcode'³=1
378 \inhibitxspcode'€=2
379 %%
380 %% inhibitxspcode JIS X 0212
381 %%
382 %%\inhibitxspcode'¡=1
383 %%\inhibitxspcode'¿=1
384 %%\inhibitxspcode'º=1
385 %%\inhibitxspcode'ª=1

```

```

386 \inhibitxspcode'☒=1
387 %%
388 %% inhibitxspcode 半角片仮名
389 %%
390 \inhibitxspcode'。=1
391 \inhibitxspcode',=1
392 \inhibitxspcode'「=2
393 \inhibitxspcode'」=1
394 </plcore>

```


File d ujclasses.dtx

このファイルは、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ の標準クラスファイルです。 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ の標準クラスファイルを $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ 用に修正したものです。DOCSTRIP プログラムによって、横組用のクラスファイルと縦組用のクラスファイルを作成することができます。

次に DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示します。

オプション	意味
article	article クラスを生成
report	report クラスを生成
book	book クラスを生成
10pt	10pt サイズの設定を生成
11pt	11pt サイズの設定を生成
12pt	12pt サイズの設定を生成
bk	book クラス用のサイズの設定を生成
tate	縦組用の設定を生成
yoko	横組用の設定を生成

8 オプションスイッチ

ここでは、後ほど使用するいくつかのコマンドやスイッチを定義しています。

- `\c@paper` 用紙サイズを示すために使います。A4, A5, B4, B5 用紙はそれぞれ、1, 2, 3, 4 として表されます。
- ```
1 <{*article | report | book}>
2 \newcounter{@paper}
```
- `\if@landscape` 用紙を横向きにするかどうかのスイッチです。デフォルトは、縦向きです。
- ```
3 \newif\if@landscape \@landscapefalse
```
- `\@ptsize` 組版をするポイント数の一の位を保存するために使います。0, 1, 2 のいずれかです。
- ```
4 \newcommand{\@ptsize}{{}}
```
- `\if@restonecol` 二段組時に用いるテンポラリスイッチです。
- ```
5 \newif\if@restonecol
```
- `\if@titlepage` タイトルページやアブストラクト（概要）を独立したページにするかどうかのスイッチです。report と book スタイルのデフォルトでは、独立したページになります。

```

6 \newif\if@titlepage
7 \article\@titlepagefalse
8 \report\book\@titlepagetrue

\if@openright chapter レベルを右ページからはじめるかどうかのスイッチです。横組では奇数ページ、縦組では偶数ページから始まることになります。report クラスのデフォルトは、“no” です。book クラスのデフォルトは、“yes” です。
9 \article\newif\if@openright

\if@openleft chapter レベルを左ページからはじめるかどうかのスイッチです。日本語  $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  開発コミュニティ版で新たに追加されました。横組では偶数ページ、縦組では奇数ページから始まることになります。report クラスと book クラスの両方で、デフォルトは “no” です。
10 \article\newif\if@openleft

\if@mainmatter スイッチ \@mainmatter が真の場合、本文を処理しています。このスイッチが偽の場合は、\chapter コマンドは見出し番号を出力しません。
11 \book\newif\if@mainmatter \@mainmattertrue

\hour
\minute 12 \hour\time \divide\hour by 60\relax
13 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
14 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta

\if@stysize p $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  2 $\epsilon$  2.09 互換モードで、スタイルオプションに a4j,a5p などが指定されたときの動作をエミュレートするためのフラグです。
15 \newif\if@stysize \@stysizefalse

\if@enablejfam 日本語ファミリを宣言するために用いるフラグです。
16 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

和欧文両対応の数式文字コマンドを有効にするときに用いるフラグです。マクロの展開順序が複雑になるのを避けるため、デフォルトでは false としてあります。
17 \newif\if@mathrmmc \@mathrmmcfalse

```

9 オプションの宣言

ここでは、クラスオプションの宣言を行なっています。

9.1 用紙オプション

用紙サイズを指定するオプションです。

```
18 \DeclareOption{a4paper}{\setcounter{@paper}{1}%
19 \setlength\paperheight {297mm}%
20 \setlength\paperwidth {210mm}}
21 \DeclareOption{a5paper}{\setcounter{@paper}{2}%
22 \setlength\paperheight {210mm}
23 \setlength\paperwidth {148mm}}
24 \DeclareOption{b4paper}{\setcounter{@paper}{3}%
25 \setlength\paperheight {364mm}
26 \setlength\paperwidth {257mm}}
27 \DeclareOption{b5paper}{\setcounter{@paper}{4}%
28 \setlength\paperheight {257mm}
29 \setlength\paperwidth {182mm}}
```

ドキュメントクラスに、以下のオプションを指定すると、通常よりもテキストを組み立てる領域の広いスタイルとすることができます。

```
30 %
31 \DeclareOption{a4j}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue
32 \setlength\paperheight {297mm}%
33 \setlength\paperwidth {210mm}}
34 \DeclareOption{a5j}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
35 \setlength\paperheight {210mm}
36 \setlength\paperwidth {148mm}}
37 \DeclareOption{b4j}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
38 \setlength\paperheight {364mm}
39 \setlength\paperwidth {257mm}}
40 \DeclareOption{b5j}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
41 \setlength\paperheight {257mm}
42 \setlength\paperwidth {182mm}}
43 %
44 \DeclareOption{a4p}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue
45 \setlength\paperheight {297mm}%
46 \setlength\paperwidth {210mm}}
47 \DeclareOption{a5p}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
48 \setlength\paperheight {210mm}
49 \setlength\paperwidth {148mm}}
50 \DeclareOption{b4p}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
51 \setlength\paperheight {364mm}
52 \setlength\paperwidth {257mm}}
53 \DeclareOption{b5p}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
54 \setlength\paperheight {257mm}
55 \setlength\paperwidth {182mm}}
```

9.2 サイズオプション

基準となるフォントの大きさを指定するオプションです。

```
56 \if@compatibility
```

```

57 \renewcommand{\@ptsize}{0}
58 \else
59 \DeclareOption{10pt}{\renewcommand{\@ptsize}{0}}
60 \fi
61 \DeclareOption{11pt}{\renewcommand{\@ptsize}{1}}
62 \DeclareOption{12pt}{\renewcommand{\@ptsize}{2}}

```

9.3 横置きオプション

このオプションが指定されると、用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```

63 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue
64 \setlength\@tempdima{\paperheight}%
65 \setlength\paperheight{\paperwidth}%
66 \setlength\paperwidth{\@tempdima}}

```

9.4 トンボオプション

tombow オプションが指定されると、用紙サイズに合わせてトンボを出力します。このとき、トンボの脇に DVI を作成した日付が出力されます。作成日付の出力を抑制するには、tombow ではなく、tombo と指定をします。

ジョブ情報の書式は元々 filename : 2017/3/5(13:3) のような書式でしたが、jsclasses にあわせて桁数固定の filename (2017-03-05 13:03) に直しました。

```

67 \DeclareOption{tombow}{%
68 \tombowtrue \tombowdatetrue
69 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
70 \@bannertoken{%
71 \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
72 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
73 \maketombowbox}
74 \DeclareOption{tombo}{%
75 \tombowtrue \tombowdatefalse
76 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
77 \maketombowbox}

```

9.5 面付けオプション

このオプションが指定されると、トンボオプションを指定したときと同じ位置に文章を出力します。作成した DVI をフィルムに面付け出力する場合などに指定をします。

```

78 \DeclareOption{mentuke}{%
79 \tombowtrue \tombowdatefalse
80 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
81 \maketombowbox}

```

9.6 組方向オプション

このオプションが指定されると、縦組で組版をします。

```
82 \DeclareOption{tate}{%
83   \AtBeginDocument{\tate\message{《縦組モード》}%
84                     \adjustbaseline}%
85 }
```

9.7 両面、片面オプション

twoside オプションが指定されると、両面印字出力に適した整形を行ないます。

```
86 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse}
87 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue}
```

9.8 二段組オプション

二段組にするかどうかのオプションです。

```
88 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
89 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
```

9.9 表題ページオプション

@titlepage が真の場合、表題を独立したページに出力します。

```
90 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
91 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
```

9.10 右左起こしオプション

chapter を右ページあるいは左ページからはじめるかどうかを指定するオプションです。openleft オプションは日本語 T_EX 開発コミュニティによって追加されました。

```
92 \ifcompatibility
93 \ifopenrighttrue
94 \else
95 \if!article\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse}
96 \if!article\DeclareOption{openleft}{\@openlefttrue\@openrightfalse}
97 \if!article\DeclareOption{openany}{\@openrightfalse\@openleftfalse}
98 \if!article\fi
```

9.11 数式のオプション

leqno を指定すると、数式番号を数式の左側に出力します。fleqn を指定するとディスプレイ数式を左揃えで出力します。

```
99 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
100 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}
```

9.12 参考文献のオプション

参考文献一覧を“オープンスタイル”の書式で出力します。これは各ブロックが改行で区切られ、`\bibindent` のインデントが付く書式です。

```
101 \DeclareOption{openbib}{%
```

参考文献環境内の最初のいくつかのフックを満たします。

```
102   \AtEndOfPackage{%
103     \renewcommand\@openbib@code{%
104       \advance\leftmargin\bibindent
105       \itemindent -\bibindent
106       \listparindent \itemindent
107       \parsep \z@
108     }%
```

そして、`\newblock` を再定義します。

```
109   \renewcommand\newblock{\par}}}
```

9.13 日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字

p \LaTeX 2 ϵ は、このあと、数式モードで直接、日本語を記述できるように数式ファミリを宣言します。しかし、 \TeX で扱える数式ファミリのが 16 個なので、その他のパッケージと組み合わせた場合、数式ファミリを宣言する領域を超えてしまう場合があるかもしれません。そのときには、残念ながら、そのパッケージか、数式内に直接、日本語を記述するのか、どちらかを断念しなければなりません。このクラスオプションは、数式内に日本語を記述するのをあきらめる場合に用います。

`disablejfam` オプションを指定しても `\textmc` や `\textgt` などを用いて、数式内に日本語を記述することは可能です。

日本語 \TeX 開発コミュニティによる補足：コミュニティ版 p \LaTeX の 2016/11/29 以降の版では、e-p \TeX の拡張機能（通称「旧 FAM256 パッチ」）が利用可能な場合に、 \LaTeX の機能で宣言できる数式ファミリ（数式アルファベット）の上限を 256 個に増やしています。したがって、新しい環境では `disablejfam` を指定しなくても上限を超えることが起きにくくなっています。

`mathrmmc` オプションは、`\mathrm` と `\mathbf` を和欧文両対応にするためのクラスオプションです。

```
110 \if@compatibility
111   \@mathrmctrue
112 \else
113   \DeclareOption{disablejfam}{\@enablejfamfalse}
114   \DeclareOption{mathrmmc}{\@mathrmctrue}
115 \fi
```

9.14 ドラフトオプション

`draft` オプションを指定すると、オーバフルボックスの起きた箇所に、5pt の罫線が引かれます。

```
116 \DeclareOption{draft}{\setlength\overfullrule{5pt}}
117 \DeclareOption{final}{\setlength\overfullrule{0pt}}
118 \</article|report|book>
```

9.15 オプションの実行

オプションの実行、およびサイズクラスのロードを行いません。

```
119 <*article|report|book>
120 <*article>
121 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,tate}
122 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final}
123 </article>
124 <*report>
125 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,openany,tate}
126 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,openany}
127 </report>
128 <*book>
129 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright,tate}
130 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright}
131 </book>
132 \ProcessOptions\relax
133 <book & tate>\input{utbk1\@ptsize.clo}
134 <!book & tate>\input{utsz1\@ptsize.clo}
135 <book & yoko>\input{ujbk1\@ptsize.clo}
136 <!book & yoko>\input{ujsz1\@ptsize.clo}
```

縦組用クラスファイルの場合は、ここで `plext.sty` も読み込みます。

```
137 <tate>\RequirePackage{plext}
138 </article|report|book>
```

10 フォント

ここでは、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のフォントサイズコマンドの定義をしています。フォントサイズコマンドの定義は、次のコマンドを用います。

```
\@setfontsize\size<font-size>\baselineskip
```

<font-size> これから使用する、フォントの実際の大きさです。

<baselineskip> 選択されるフォントサイズ用の通常の `\baselineskip` の値です (実際は、`\baselinestretch * <baselineskip>` の値です)。

数値コマンドは、次のように $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルで定義されています。

<code>\@vpt</code>	5	<code>\@vipt</code>	6	<code>\@viipt</code>	7
<code>\@viipt</code>	8	<code>\@ixpt</code>	9	<code>\@xpt</code>	10
<code>\@xipt</code>	10.95	<code>\@xiipt</code>	12	<code>\@xivpt</code>	14.4
...					

`\normalsize` 基本サイズとするユーザレベルのコマンドは `\normalsize` です。L^AT_EX の内部では `\@normalsize` `\normalsize` を使用します。

`\normalsize` マクロは、`\abovedisplayskip` と `\abovedisplayshortskip`、および `\belowdisplayshortskip` の値も設定をします。`\belowdisplayskip` は、つねに `\abovedisplayskip` と同値です。

また、リスト環境のトップレベルのパラメータは、つねに `\@listI` で与えられます。

```

139 <*10pt | 11pt | 12pt>
140 \renewcommand{\normalsize}{%
141 <10pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
142 <11pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xipt{15.5}%
143 <12pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xiipt{16.5}%
144 <10pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xpt{17}%
145 <11pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xipt{17}%
146 <12pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xiipt{18}%
147 <*10pt>
148 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
149 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
150 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
151 </10pt>
152 <*11pt>
153 \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
154 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
155 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
156 </11pt>
157 <*12pt>
158 \abovedisplayskip 12\p@ \@plus3\p@ \@minus7\p@
159 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
160 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
161 </12pt>
162 \belowdisplayskip \abovedisplayskip
163 \let\@listi\@listI}

```

ここで、ノーマルフォントを選択し、初期化をします。このとき、縦組モードならば、デフォルトのエンコードを変更します。

```

164 <tate>\def\kanjiencodingdefault{JT2}%
165 <tate>\kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
166 \normalsize

```

`\Cht` 基準となる長さの設定をします。これらのパラメータは `uplfonts.dtx` で定義され
`\Cdp`
`\Cwd` File d: ujclasses.dtx
`\Cvs`
`\Chs`

ています。

```
167 \setbox0\hbox{\char\eut"A1A1}%
168 \setlength\ht{\ht0}
169 \setlength\Cdp{\dp0}
170 \setlength\Cwd{\wd0}
171 \setlength\Cvs{\baselineskip}
172 \setlength\Chs{\wd0}
```

`\small` `\small` コマンドの定義は、`\normalsize` に似ています。

```
173 \newcommand{\small}{%
174   (*10pt)
175   \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
176   \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
177   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
178   \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
179   \def\@listif\leftmargin\leftmargini
180     \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
181     \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
182     \itemsep \parsep}%
183   (/10pt)
184   (*11pt)
185   \@setfontsize\small\@xpt\@xipt
186   \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
187   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
188   \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
189   \def\@listif\leftmargin\leftmargini
190     \topsep 6\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
191     \parsep 3\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
192     \itemsep \parsep}%
193   (/11pt)
194   (*12pt)
195   \@setfontsize\small\@xipt{13.6}%
196   \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
197   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
198   \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
199   \def\@listif\leftmargin\leftmargini
200     \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
201     \parsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
202     \itemsep \parsep}%
203   (/12pt)
204   \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
```

`\footnotesize` `\footnotesize` コマンドの定義は、`\normalsize` に似ています。

```
205 \newcommand{\footnotesize}{%
206   (*10pt)
207   \@setfontsize\footnotesize\@viipt{9.5}%
208   \abovedisplayskip 6\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
209   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
210   \belowdisplayshortskip 3\p@ \@plus\p@ \@minus2\p@
```

```

211 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
212 \topsep 3\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
213 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
214 \itemsep \parsep}%
215 \

```

\scriptsize これらは先ほどのマクロよりも簡単です。これらはフォントサイズを変更するだけで、リスト環境とディスプレイ数式のパラメータは変更しません。

```

\large 237 \*10pt>
\Large 238 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viipt}
239 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vpt\@vpt}
\large 240 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
\huge 241 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
242 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
\Huge 243 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
244 \newcommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
245 \

```

```

257 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vipt\@viipt}
258 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xivpt{21}}
259 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xviipt{25}}
260 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xxpt{28}}
261 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxvpt{33}}
262 \let\Huge=\huge
263 </12pt>
264 </10pt | 11pt | 12pt>

```

11 レイアウト

11.1 用紙サイズの決定

`\columnsep` `\columnsep` は、二段組のときの、左右（あるいは上下）の段間の幅です。このスペースの中央に `\columnseprule` の幅の罫線が引かれます。

```

265 <*article | report | book>
266 \if@stysize
267 <tate> \setlength\columnsep{3\Cwd}
268 <yoko> \setlength\columnsep{2\Cwd}
269 \else
270 \setlength\columnsep{10\p@}
271 \fi
272 \setlength\columnseprule{0\p@}

```

11.2 段落の形

`\lineskip` これらの値は、行が近付き過ぎたときの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の動作を制御します。
`\normallineskip` 273 `\setlength\lineskip{1\p@}`
274 `\setlength\normallineskip{1\p@}`

`\baselinestretch` これは、`\baselineskip` の倍率を示すために使います。デフォルトでは、何もありません。このコマンドが “empty” でない場合、`\baselineskip` の指定の plus や minus 部分は無視されることに注意してください。
275 `\renewcommand{\baselinestretch}{}`

`\parskip` `\parskip` は段落間に挿入される、縦方向の追加スペースです。`\parindent` は段落の先頭の字下げ幅です。

```

276 \setlength\parskip{0\p@ \@plus \p@}
277 \setlength\parindent{1\Cwd}

```

`\smallskipamount` これら 3 つのパラメータの値は、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルの中で設定されています。これら
`\medskipamount` はおそらく、サイズオプションの指定によって変えるべきです。しかし、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 2.09
`\bigskipamount` や $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 2 ε の以前のリリースの両方との互換性を保つために、これらはまだ同じ値としています。

```

278 <*10pt | 11pt | 12pt>
279 \setlength\smallskipamount{3\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
280 \setlength\medskipamount{6\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
281 \setlength\bigskipamount{12\p@ \@plus 4\p@ \@minus 4\p@}
282 </10pt | 11pt | 12pt>

```

`\@lowpenalty` `\nopagebreak` と `\nolinebreak` コマンドは、これらのコマンドが置かれた場所に、
`\@medpenalty` ペナルティを起いて、分割を制御します。置かれるペナルティは、コマンドの引数に
`\@highpenalty` よって、`\@lowpenalty`, `\@medpenalty`, `\@highpenalty` のいずれかが使われます。

```

283 \@lowpenalty 51
284 \@medpenalty 151
285 \@highpenalty 301
286 </article | report | book>

```

11.3 ページレイアウト

11.3.1 縦方向のスペース

`\headheight` `\headheight` は、ヘッダが入るボックスの高さです。`\headsep` は、ヘッダの下端
`\headsep` と本文領域との間の距離です。`\topskip` は、本文領域の上端と 1 行目のテキスト
`\topskip` のベースラインとの距離です。

```

287 <*10pt | 11pt | 12pt>
288 \setlength\headheight{12\p@}
289 <*tate>
290 \if@stysize
291   \ifnum\c@paper=2 % A5
292     \setlength\headsep{6mm}
293   \else % A4, B4, B5 and other
294     \setlength\headsep{8mm}
295   \fi
296 \else
297   \setlength\headsep{8mm}
298 \fi
299 </tate>
300 <*yoko>
301 <!bk>\setlength\headsep{25\p@}
302 <10pt & bk>\setlength\headsep{.25in}
303 <11pt & bk>\setlength\headsep{.275in}
304 <12pt & bk>\setlength\headsep{.275in}
305 </yoko>
306 \setlength\topskip{1\ChT}

```

`\footskip` `\footskip` は、本文領域の下端とフッタの下端との距離です。フッタのボックスの
 高さを示す、`\footheight` は削除されました。

```

307 <tate>\setlength\footskip{14mm}
308 <*yoko>

```

```

309 <|bk>\setlength\footskip{30\p@}
310 <10pt & bk>\setlength\footskip{.35in}
311 <11pt & bk>\setlength\footskip{.38in}
312 <12pt & bk>\setlength\footskip{30\p@}
313 </yoko>

```

`\maxdepth` \TeX のプリミティブレジスタ `\maxdepth` は、`\topskip` と同じような働きをします。`\@maxdepth` レジスタは、つねに `\maxdepth` のコピーでなくてはなりません。これは `\begin{document}` の内部で設定されます。 \TeX と \LaTeX 2.09 では、`\maxdepth` は 4pt に固定です。 \LaTeX 2_ε では、`\maxdepth+\topskip` を基本サイズの 1.5 倍にしたいので、`\maxdepth` を `\topskip` の半分の値で設定します。

```

314 \if@compatibility
315   \setlength\maxdepth{4\p@}
316 \else
317   \setlength\maxdepth{.5\topskip}
318 \fi

```

11.3.2 本文領域

`\textheight` と `\textwidth` は、本文領域の通常の高さと幅を示します。縦組でも横組でも、“高さ” は行数を、“幅” は字詰めを意味します。後ほど、これらの長さに `\topskip` の値が加えられます。

`\textwidth` 基本組の字詰めです。

互換モードの場合：

```
319 \if@compatibility
```

互換モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：

```

320   \if@stysize
321     \ifnum\c@@paper=2 % A5
322       \if@landscape
323 <10pt & yoko>       \setlength\textwidth{47\Cwd}
324 <11pt & yoko>       \setlength\textwidth{42\Cwd}
325 <12pt & yoko>       \setlength\textwidth{40\Cwd}
326 <10pt & tate>       \setlength\textwidth{27\Cwd}
327 <11pt & tate>       \setlength\textwidth{25\Cwd}
328 <12pt & tate>       \setlength\textwidth{23\Cwd}
329       \else
330 <10pt & yoko>       \setlength\textwidth{28\Cwd}
331 <11pt & yoko>       \setlength\textwidth{25\Cwd}
332 <12pt & yoko>       \setlength\textwidth{24\Cwd}
333 <10pt & tate>       \setlength\textwidth{46\Cwd}
334 <11pt & tate>       \setlength\textwidth{42\Cwd}
335 <12pt & tate>       \setlength\textwidth{38\Cwd}
336       \fi
337   \else\ifnum\c@@paper=3 % B4

```

```

338     \if@landscape
339 <10pt & yoko>         \setlength\textwidth{75\Cwd}
340 <11pt & yoko>         \setlength\textwidth{69\Cwd}
341 <12pt & yoko>         \setlength\textwidth{63\Cwd}
342 <10pt & tate>         \setlength\textwidth{53\Cwd}
343 <11pt & tate>         \setlength\textwidth{49\Cwd}
344 <12pt & tate>         \setlength\textwidth{44\Cwd}
345     \else
346 <10pt & yoko>         \setlength\textwidth{60\Cwd}
347 <11pt & yoko>         \setlength\textwidth{55\Cwd}
348 <12pt & yoko>         \setlength\textwidth{50\Cwd}
349 <10pt & tate>         \setlength\textwidth{85\Cwd}
350 <11pt & tate>         \setlength\textwidth{76\Cwd}
351 <12pt & tate>         \setlength\textwidth{69\Cwd}
352     \fi
353     \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
354         \if@landscape
355 <10pt & yoko>         \setlength\textwidth{60\Cwd}
356 <11pt & yoko>         \setlength\textwidth{55\Cwd}
357 <12pt & yoko>         \setlength\textwidth{50\Cwd}
358 <10pt & tate>         \setlength\textwidth{34\Cwd}
359 <11pt & tate>         \setlength\textwidth{31\Cwd}
360 <12pt & tate>         \setlength\textwidth{28\Cwd}
361         \else
362 <10pt & yoko>         \setlength\textwidth{37\Cwd}
363 <11pt & yoko>         \setlength\textwidth{34\Cwd}
364 <12pt & yoko>         \setlength\textwidth{31\Cwd}
365 <10pt & tate>         \setlength\textwidth{55\Cwd}
366 <11pt & tate>         \setlength\textwidth{51\Cwd}
367 <12pt & tate>         \setlength\textwidth{47\Cwd}
368         \fi
369     \else % A4 ant other
370         \if@landscape
371 <10pt & yoko>         \setlength\textwidth{73\Cwd}
372 <11pt & yoko>         \setlength\textwidth{68\Cwd}
373 <12pt & yoko>         \setlength\textwidth{61\Cwd}
374 <10pt & tate>         \setlength\textwidth{41\Cwd}
375 <11pt & tate>         \setlength\textwidth{38\Cwd}
376 <12pt & tate>         \setlength\textwidth{35\Cwd}
377         \else
378 <10pt & yoko>         \setlength\textwidth{47\Cwd}
379 <11pt & yoko>         \setlength\textwidth{43\Cwd}
380 <12pt & yoko>         \setlength\textwidth{40\Cwd}
381 <10pt & tate>         \setlength\textwidth{67\Cwd}
382 <11pt & tate>         \setlength\textwidth{61\Cwd}
383 <12pt & tate>         \setlength\textwidth{57\Cwd}
384         \fi
385     \fi\fi\fi
386     \else

```

互換モード：デフォルト設定

```
387 \if@twocolumn
388 \setlength\textwidth{52\Cwd}
389 \else
390 <10pt&!bk & yoko> \setlength\textwidth{327\p@}
391 <11pt&!bk & yoko> \setlength\textwidth{342\p@}
392 <12pt&!bk & yoko> \setlength\textwidth{372\p@}
393 <10pt & bk & yoko> \setlength\textwidth{4.3in}
394 <11pt & bk & yoko> \setlength\textwidth{4.8in}
395 <12pt & bk & yoko> \setlength\textwidth{4.8in}
396 <10pt & tate> \setlength\textwidth{67\Cwd}
397 <11pt & tate> \setlength\textwidth{61\Cwd}
398 <12pt & tate> \setlength\textwidth{57\Cwd}
399 \fi
400 \fi
```

2e モードの場合：

```
401 \else
```

2e モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：二段組では用紙サイズの 8 割、一段組では用紙サイズの 7 割を版面の幅として設定します。

```
402 \if@stysize
403 \if@twocolumn
404 <yoko> \setlength\textwidth{.8\paperwidth}
405 <tate> \setlength\textwidth{.8\paperheight}
406 \else
407 <yoko> \setlength\textwidth{.7\paperwidth}
408 <tate> \setlength\textwidth{.7\paperheight}
409 \fi
410 \else
```

2e モード：デフォルト設定

```
411 <tate> \setlength\@tempdima{\paperheight}
412 <yoko> \setlength\@tempdima{\paperwidth}
413 \addtolength\@tempdima{-2in}
414 <tate> \addtolength\@tempdima{-1.3in}
415 <yoko & 10pt> \setlength\@tempdimb{327\p@}
416 <yoko & 11pt> \setlength\@tempdimb{342\p@}
417 <yoko & 12pt> \setlength\@tempdimb{372\p@}
418 <tate & 10pt> \setlength\@tempdimb{67\Cwd}
419 <tate & 11pt> \setlength\@tempdimb{61\Cwd}
420 <tate & 12pt> \setlength\@tempdimb{57\Cwd}
421 \if@twocolumn
422 \ifdim\@tempdima>2\@tempdimb\relax
423 \setlength\textwidth{2\@tempdimb}
424 \else
425 \setlength\textwidth{\@tempdima}
426 \fi
427 \else
428 \ifdim\@tempdima>\@tempdimb\relax
```

```

429      \setlength\textwidth{\@tempdimb}
430    \else
431      \setlength\textwidth{\@tempdima}
432    \fi
433  \fi
434 \fi
435 \fi
436 \@settopoint\textwidth

```

`\textheight` 基本組の行数です。

互換モードの場合：

```
437 \if@compatibility
```

互換モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：

```

438   \if@stysize
439     \ifnum\c@@paper=2 % A5
440       \if@landscape
441         <10pt & yoko>      \setlength\textheight{17\Cvs}
442         <11pt & yoko>      \setlength\textheight{17\Cvs}
443         <12pt & yoko>      \setlength\textheight{16\Cvs}
444         <10pt & tate>      \setlength\textheight{26\Cvs}
445         <11pt & tate>      \setlength\textheight{26\Cvs}
446         <12pt & tate>      \setlength\textheight{25\Cvs}
447       \else
448         <10pt & yoko>      \setlength\textheight{28\Cvs}
449         <11pt & yoko>      \setlength\textheight{25\Cvs}
450         <12pt & yoko>      \setlength\textheight{24\Cvs}
451         <10pt & tate>      \setlength\textheight{16\Cvs}
452         <11pt & tate>      \setlength\textheight{16\Cvs}
453         <12pt & tate>      \setlength\textheight{15\Cvs}
454       \fi
455     \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
456       \if@landscape
457         <10pt & yoko>      \setlength\textheight{38\Cvs}
458         <11pt & yoko>      \setlength\textheight{36\Cvs}
459         <12pt & yoko>      \setlength\textheight{34\Cvs}
460         <10pt & tate>      \setlength\textheight{48\Cvs}
461         <11pt & tate>      \setlength\textheight{48\Cvs}
462         <12pt & tate>      \setlength\textheight{45\Cvs}
463       \else
464         <10pt & yoko>      \setlength\textheight{57\Cvs}
465         <11pt & yoko>      \setlength\textheight{55\Cvs}
466         <12pt & yoko>      \setlength\textheight{52\Cvs}
467         <10pt & tate>      \setlength\textheight{33\Cvs}
468         <11pt & tate>      \setlength\textheight{33\Cvs}
469         <12pt & tate>      \setlength\textheight{31\Cvs}
470       \fi
471     \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
472       \if@landscape

```



```

473 <10pt & yoko> \setlength\textheight{22\Cvs}
474 <11pt & yoko> \setlength\textheight{21\Cvs}
475 <12pt & yoko> \setlength\textheight{20\Cvs}
476 <10pt & tate> \setlength\textheight{34\Cvs}
477 <11pt & tate> \setlength\textheight{34\Cvs}
478 <12pt & tate> \setlength\textheight{32\Cvs}
479 \else
480 <10pt & yoko> \setlength\textheight{35\Cvs}
481 <11pt & yoko> \setlength\textheight{34\Cvs}
482 <12pt & yoko> \setlength\textheight{32\Cvs}
483 <10pt & tate> \setlength\textheight{21\Cvs}
484 <11pt & tate> \setlength\textheight{21\Cvs}
485 <12pt & tate> \setlength\textheight{20\Cvs}
486 \fi
487 \else % A4 and other
488 \if@landscape
489 <10pt & yoko> \setlength\textheight{27\Cvs}
490 <11pt & yoko> \setlength\textheight{26\Cvs}
491 <12pt & yoko> \setlength\textheight{25\Cvs}
492 <10pt & tate> \setlength\textheight{41\Cvs}
493 <11pt & tate> \setlength\textheight{41\Cvs}
494 <12pt & tate> \setlength\textheight{38\Cvs}
495 \else
496 <10pt & yoko> \setlength\textheight{43\Cvs}
497 <11pt & yoko> \setlength\textheight{42\Cvs}
498 <12pt & yoko> \setlength\textheight{39\Cvs}
499 <10pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
500 <11pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
501 <12pt & tate> \setlength\textheight{22\Cvs}
502 \fi
503 \fi\fi\fi
504 <yoko> \addtolength\textheight{\topskip}
505 <bk & yoko> \addtolength\textheight{\baselineskip}
506 <tate> \addtolength\textheight{\Cht}
507 <tate> \addtolength\textheight{\Cdp}

```

互換モード：デフォルト設定

```

508 \else
509 <10pt&!bk & yoko> \setlength\textheight{578\p@}
510 <10pt & bk & yoko> \setlength\textheight{554\p@}
511 <11pt & yoko> \setlength\textheight{580.4\p@}
512 <12pt & yoko> \setlength\textheight{586.5\p@}
513 <10pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
514 <11pt & tate> \setlength\textheight{25\Cvs}
515 <12pt & tate> \setlength\textheight{24\Cvs}
516 \fi

```

2e モードの場合：

```
517 \else
```

2e モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：縦組では用紙サイ

ズの 70%(book) か 78%(article,report)、横組では 70%(book) か 75%(article,report) を版面の高さに設定します。

```

518 \if@stysize
519 <tate & bk> \setlength\textheight{.75\paperwidth}
520 <tate&!bk> \setlength\textheight{.78\paperwidth}
521 <yoko & bk> \setlength\textheight{.70\paperheight}
522 <yoko&!bk> \setlength\textheight{.75\paperheight}

```

2e モード：デフォルト値

```

523 \else
524 <tate> \setlength\@tempdima{\paperwidth}
525 <yoko> \setlength\@tempdima{\paperheight}
526 \addtolength\@tempdima{-2in}
527 <yoko> \addtolength\@tempdima{-1.5in}
528 \divide\@tempdima\baselineskip
529 \@tempcnta\@tempdima
530 \setlength\textheight{\@tempcnta\baselineskip}
531 \fi
532 \fi

```

最後に、\textheight に \topskip の値を加えます。

```

533 \addtolength\textheight{\topskip}
534 \@settopoint\textheight

```

11.3.3 マージン

\topmargin \topmargin は、“印字可能領域”—用紙の上端から 1 インチ内側— の上端からヘッダ部分の上端までの距離です。

2.09 互換モードの場合：

```

535 \if@compatibility
536 <*yoko>
537 \if@stysize
538 \setlength\topmargin{-.3in}
539 \else
540 <!bk> \setlength\topmargin{27\p@}
541 <10pt & bk> \setlength\topmargin{.75in}
542 <11pt & bk> \setlength\topmargin{.73in}
543 <12pt & bk> \setlength\topmargin{.73in}
544 \fi
545 </yoko>
546 <*tate>
547 \if@stysize
548 \ifnum\c@paper=2 % A5
549 \setlength\topmargin{.8in}
550 \else % A4, B4, B5 and other
551 \setlength\topmargin{32mm}
552 \fi
553 \else

```

```

554 \setlength\topmargin{32mm}
555 \fi
556 \addtolength\topmargin{-1in}
557 \addtolength\topmargin{-\headheight}
558 \addtolength\topmargin{-\headsep}
559 </tate>
2e モードの場合 :
560 \else
561 \setlength\topmargin{\paperheight}
562 \addtolength\topmargin{-\headheight}
563 \addtolength\topmargin{-\headsep}
564 <tate> \addtolength\topmargin{-\textwidth}
565 <yoko> \addtolength\topmargin{-\textheight}
566 \addtolength\topmargin{-\footskip}

567 \if@stysize
568 \ifnum\c@paper=2 % A5
569 \addtolength\topmargin{-1.3in}
570 \else
571 \addtolength\topmargin{-2.0in}
572 \fi
573 \else
574 <yoko> \addtolength\topmargin{-2.0in}
575 <tate> \addtolength\topmargin{-2.8in}
576 \fi

577 \addtolength\topmargin{-.5\topmargin}
578 \fi
579 \@settopoint\topmargin

```

`\marginparsep` `\marginparsep` は、本文と傍注の間にあけるスペースの幅です。横組では本文の左(右)端と傍注、縦組では本文の下(上)端と傍注の間になります。`\marginparpush` は、傍注と傍注との間のスペースの幅です。

```

580 \if@twocolumn
581 \setlength\marginparsep{10\p@}
582 \else
583 <tate> \setlength\marginparsep{15\p@}
584 <yoko> \setlength\marginparsep{10\p@}
585 \fi
586 <tate> \setlength\marginparpush{7\p@}
587 <*yoko>
588 <10pt> \setlength\marginparpush{5\p@}
589 <11pt> \setlength\marginparpush{5\p@}
590 <12pt> \setlength\marginparpush{7\p@}
591 </yoko>

```

`\oddsidemargin` まず、互換モードでの長さを示します。
`\evensidemargin` 互換モード、縦組の場合 :
`\marginparwidth`

```

592 \if@compatibility
593 <tate> \setlength\oddsidemargin{0\p@}
594 <tate> \setlength\evensidemargin{0\p@}

```

互換モード、横組、book クラスの場合：

```

595 <*yoko>
596 <*bk>
597 <10pt> \setlength\oddsidemargin {1.5in}
598 <11pt> \setlength\oddsidemargin {1.25in}
599 <12pt> \setlength\oddsidemargin {1.25in}
600 <10pt> \setlength\evensidemargin {1.5in}
601 <11pt> \setlength\evensidemargin {1.25in}
602 <12pt> \setlength\evensidemargin {1.25in}
603 <10pt> \setlength\marginparwidth {1.75in}
604 <11pt> \setlength\marginparwidth {1in}
605 <12pt> \setlength\marginparwidth {1in}
606 </bk>

```

互換モード、横組、report と article クラスの場合：

```

607 <*!bk>
608 \if@twoside
609 <10pt> \setlength\oddsidemargin {44\p@}
610 <11pt> \setlength\oddsidemargin {36\p@}
611 <12pt> \setlength\oddsidemargin {21\p@}
612 <10pt> \setlength\evensidemargin {82\p@}
613 <11pt> \setlength\evensidemargin {74\p@}
614 <12pt> \setlength\evensidemargin {59\p@}
615 <10pt> \setlength\marginparwidth {107\p@}
616 <11pt> \setlength\marginparwidth {100\p@}
617 <12pt> \setlength\marginparwidth {85\p@}
618 \else
619 <10pt> \setlength\oddsidemargin {60\p@}
620 <11pt> \setlength\oddsidemargin {54\p@}
621 <12pt> \setlength\oddsidemargin {39.5\p@}
622 <10pt> \setlength\evensidemargin {60\p@}
623 <11pt> \setlength\evensidemargin {54\p@}
624 <12pt> \setlength\evensidemargin {39.5\p@}
625 <10pt> \setlength\marginparwidth {90\p@}
626 <11pt> \setlength\marginparwidth {83\p@}
627 <12pt> \setlength\marginparwidth {68\p@}
628 \fi
629 </!bk>

```

互換モード、横組、二段組の場合：

```

630 \if@twocolumn
631 \setlength\oddsidemargin {30\p@}
632 \setlength\evensidemargin {30\p@}
633 \setlength\marginparwidth {48\p@}
634 \fi
635 </yoko>

```

縦組、横組にかかわらず、スタイルオプション設定ではゼロです。

```
636 \ifstysize
637 \if@twocolumn\else
638 \setlength\oddsidemargin{0\p@}
639 \setlength\evensidemargin{0\p@}
640 \fi
641 \fi
```

互換モードでない場合：

```
642 \else
643 \setlength\@tempdima{\paperwidth}
644 \tate \addtolength\@tempdima{-\textheight}
645 \yoko \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
```

\oddsidemargin を計算します。

```
646 \if@twoside
647 \tate \setlength\oddsidemargin{.6\@tempdima}
648 \yoko \setlength\oddsidemargin{.4\@tempdima}
649 \else
650 \setlength\oddsidemargin{.5\@tempdima}
651 \fi
652 \addtolength\oddsidemargin{-1in}
```

\evensidemargin を計算します。

```
653 \setlength\evensidemargin{\paperwidth}
654 \addtolength\evensidemargin{-2in}
655 \tate \addtolength\evensidemargin{-\textheight}
656 \yoko \addtolength\evensidemargin{-\textwidth}
657 \addtolength\evensidemargin{-\oddsidemargin}
658 \@settopoint\oddsidemargin % 1999.1.6
659 \@settopoint\evensidemargin
```

\marginparwidth を計算します。ここで、\@tempdima の値は、
\paperwidth - \textwidth です。

```
660 \yoko
661 \if@twoside
662 \setlength\marginparwidth{.6\@tempdima}
663 \addtolength\marginparwidth{-.4in}
664 \else
665 \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
666 \addtolength\marginparwidth{-.4in}
667 \fi
668 \ifdim \marginparwidth >2in
669 \setlength\marginparwidth{2in}
670 \fi
671 \yoko
```

縦組の場合は、少し複雑です。

```
672 \tate
673 \setlength\@tempdima{\paperheight}
```

```

674 \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
675 \addtolength\@tempdima{-\topmargin}
676 \addtolength\@tempdima{-\headheight}
677 \addtolength\@tempdima{-\headsep}
678 \addtolength\@tempdima{-\footskip}
679 \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
680 \tate
681 \settopoint\marginparwidth
682 \fi

```

11.4 脚注

`\footnotesep` `\footnotesep` は、それぞれの脚注の先頭に置かれる“支柱”の高さです。このクラスでは、通常の `\footnotesize` の支柱と同じ長さですので、脚注間に余計な空白は入りません。

```

683 \setlength\footnotesep{6.65\p@}
684 \setlength\footnotesep{7.7\p@}
685 \setlength\footnotesep{8.4\p@}

```

`\footins` `\skip\footins` は、本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。

```

686 \setlength\skip\footins{9\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
687 \setlength\skip\footins{10\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
688 \setlength\skip\footins{10.8\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}

```

11.5 フロート

すべてのフロートパラメータは、 \LaTeX のカーネルでデフォルトが定義されています。そのため、カウンタ以外のパラメータは `\renewcommand` で設定する必要があります。

11.5.1 フロートパラメータ

`\floatsep` フロートオブジェクトが本文のあるページに置かれるとき、フロートとそのページにある別のオブジェクトの距離は、これらのパラメータで制御されます。これらのパラメータは、一段組モードと二段組モードの段抜きでないフロートの両方で使われます。

`\floatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

`\textfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。

`\intextsep` は、本文の途中に出力されるフロートと本文との距離です。

```

689 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
690 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
691 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

```

```

693 </10pt>
694 <*11pt>
695 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
696 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
697 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
698 </11pt>
699 <*12pt>
700 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
701 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
702 \setlength\intextsep {14\p@ \@plus 4\p@ \@minus 4\p@}
703 </12pt>

```

`\dblfloatsep` 二段組モードで、`\textwidth` の幅を持つ、段抜きのフロートオブジェクトが本文と同じページに置かれるとき、本文とフロートとの距離は、`\dblfloatsep` と `\dbltextfloatsep` によって制御されます。

`\dblfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。

`\dbltextfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

```

704 <*10pt>
705 \setlength\dblfloatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
706 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
707 </10pt>
708 <*11pt>
709 \setlength\dblfloatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
710 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
711 </11pt>
712 <*12pt>
713 \setlength\dblfloatsep {14\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
714 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
715 </12pt>

```

`\@fptop` フロートオブジェクトが、独立したページに置かれるとき、このページのレイアウトは、次のパラメータで制御されます。これらのパラメータは、一段組モードか、`\@fpsep` 二段組モードでの一段出力のフロートオブジェクトに対して使われます。

ページ上部では、`\@fptop` の伸縮長が挿入されます。ページ下部では、`\@fpbot` の伸縮長が挿入されます。フロート間には `\@fpsep` が挿入されます。

なお、そのページを空白で満たすために、`\@fptop` と `\@fpbot` の少なくともどちらか一方に、`plus ...fil` を含めてください。

```

716 <*10pt>
717 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
718 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
719 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
720 </10pt>
721 <*11pt>
722 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
723 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}

```

```

724 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
725 </11pt>
726 <*12pt>
727 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
728 \setlength\@fpsep{10\p@ \@plus 2fil}
729 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
730 </12pt>

```

`\@dblftop` 二段組モードでの二段抜きのフロートに対しては、これらのパラメータが使われ
`\@dblpsep` ます。

```

\@dblpbot 731 <*10pt>
732 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
733 \setlength\@dblpsep{8\p@ \@plus 2fil}
734 \setlength\@dblpbot{0\p@ \@plus 1fil}
735 </10pt>
736 <*11pt>
737 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
738 \setlength\@dblpsep{8\p@ \@plus 2fil}
739 \setlength\@dblpbot{0\p@ \@plus 1fil}
740 </11pt>
741 <*12pt>
742 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
743 \setlength\@dblpsep{10\p@ \@plus 2fil}
744 \setlength\@dblpbot{0\p@ \@plus 1fil}
745 </12pt>
746 </10pt | 11pt | 12pt>

```

11.5.2 フロートオブジェクトの上限値

`\c@topnumber` *topnumber* は、本文ページの上部に出力できるフロートの最大数です。

```

747 <*article | report | book>
748 \setcounter{topnumber}{2}

```

`\c@bottomnumber` *bottomnumber* は、本文ページの下部に出力できるフロートの最大数です。

```

749 \setcounter{bottomnumber}{1}

```

`\c@totalnumber` *totalnumber* は、本文ページに出力できるフロートの最大数です。

```

750 \setcounter{totalnumber}{3}

```

`\c@dbltopnumber` *dbltopnumber* は、二段組時における、本文ページの上部に出力できる段抜きのフロートの最大数です。

```

751 \setcounter{dbltopnumber}{2}

```

`\topfraction` これは、本文ページの上部に出力されるフロートが占有できる最大の割合です。

```

752 \renewcommand{\topfraction}{.7}

```


<code>\bottomfraction</code>	これは、本文ページの下部に出力されるフロートが占有できる最大の割合です。 753 <code>\renewcommand{\bottomfraction}{.3}</code>
<code>\textfraction</code>	これは、本文ページに最低限、入らなくてはならない本文の割合です。 754 <code>\renewcommand{\textfraction}{.2}</code>
<code>\floatpagefraction</code>	これは、フロートだけのページで最低限、入らなくてはならないフロートの割合です。 755 <code>\renewcommand{\floatpagefraction}{.5}</code>
<code>\dbltopfraction</code>	これは、2 段組時における本文ページに、2 段抜きフロートが占めることができる最大の割合です。 756 <code>\renewcommand{\dbltopfraction}{.7}</code>
<code>\dblfloatpagefraction</code>	これは、2 段組時におけるフロートだけのページに最低限、入らなくてはならない 2 段抜きフロートの割合です。 757 <code>\renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.5}</code>

12 改ページ（日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ）

<code>\pltx@cleartorightpage</code>	<code>\cleardoublepage</code> 命令は、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルでは「奇数ページになるまでページを繰る命令」として定義されています。しかし $\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルでは、アスキーの方針により「横組では奇数ページになるまで、縦組では偶数ページになるまでページを繰る命令」に再定義されています。すなわち、 $\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ では縦組でも横組でも右ページになるまでページを繰ることになります。
<code>\pltx@cleartoleftpage</code>	
<code>\pltx@cleartooddpage</code>	
<code>\pltx@cleartoevenpage</code>	

$\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 標準クラスの `book` は、横組も縦組も `openright` がデフォルトになっていて、これは従来 $\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルで定義された `\cleardoublepage` を利用していました。しかし、縦組で奇数ページ始まりの文書を作りたい場合もあるでしょうから、コミュニティ版クラスでは以下の（非ユーザ向け）命令を追加します。

1. `\pltx@cleartorightpage` : 右ページになるまでページを繰る命令
2. `\pltx@cleartoleftpage` : 左ページになるまでページを繰る命令
3. `\pltx@cleartooddpage` : 奇数ページになるまでページを繰る命令
4. `\pltx@cleartoevenpage` : 偶数ページになるまでページを繰る命令

```

758 \def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
759   \ifodd\c@page
760     \iftdir
761       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage

```

```

762     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
763   \fi
764   \else
765     \ifydir
766       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
767       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
768     \fi
769   \fi\fi}
770 \def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
771   \ifodd\c@page
772     \ifydir
773       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
774       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
775     \fi
776   \else
777     \iftdir
778       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
779       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
780     \fi
781   \fi\fi}

```

`\pltx@cleartooddpage` は L^AT_EX の `\cleardoublepage` に似ていますが、上の 2 つに合わせるため `\thispagestyle{empty}` を追加してあります。

```

782 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
783   \ifodd\c@page\else
784     \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
785     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
786   \fi\fi}
787 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
788   \ifodd\c@page
789     \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
790     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
791   \fi\fi}

```

`\cleardoublepage` そして report と book クラスの場合は、ユーザ向け命令である `\cleardoublepage` を、`openright` オプションが指定されている場合は `\pltx@cleartorightpage` に、`openleft` オプションが指定されている場合は `\pltx@cleartoleftpage` に、それぞれ `\let` します。`openany` の場合は pL^AT_EX カーネルの定義のままです。

```

792 <*\article>
793 \if@openleft
794   \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
795 \else\if@openright
796   \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
797 \fi\fi
798 <\/!article>

```

13 ページスタイル

pLATEX 2_ε では、つぎの6種類のページスタイルを使用できます。empty は ltpage.dtx で定義されています。

empty	ヘッダにもフッタにも出力しない
plain	フッタにページ番号のみを出力する
headnombre	ヘッダにページ番号のみを出力する
footnombre	フッタにページ番号のみを出力する
headings	ヘッダに見出しとページ番号を出力する
bothstyle	ヘッダに見出し、フッタにページ番号を出力する

ページスタイル *foo* は、`\ps@foo` コマンドとして定義されます。

`\@evenhead` これらは `\ps@...` から呼び出され、ヘッダとフッタを出力するマクロです。
`\@oddhead` `\@oddhead` 奇数ページのヘッダを出力
`\@evenfoot` `\@oddfoot` 奇数ページのフッタを出力
`\@oddfoot` `\@evenhead` 偶数ページのヘッダを出力
`\@evenfoot` 偶数ページのフッタを出力
これらの内容は、横組の場合は `\textwidth` の幅を持つ `\hbox` に入れられ、縦組の場合は `\textheight` の幅を持つ `\hbox` に入れられます。

13.1 マークについて

ヘッダに入る章番号や章見出しは、見出しコマンドで実行されるマークコマンドで決定されます。ここでは、実行されるマークコマンドの定義を行なっています。これらのマークコマンドは、T_EX の `\mark` 機能を用いて、‘left’ と ‘right’ の2種類のマークを生成するように定義しています。

`\markboth{<LEFT>}{<RIGHT>}`: 両方のマークに追加します。

`\markright{<RIGHT>}`: ‘右’ マークに追加します。

`\leftmark`: `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` マクロで使われ、現在の“左”マークを出力します。`\leftmark` は T_EX の `\botmark` コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてははいけません。

`\rightmark`: `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` マクロで使われ、現在の“右”マークを出力します。`\rightmark` は T_EX の `\firstmark` コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてははいけません。

マークコマンドの動作は、左マークの‘範囲内の’右マークのために合理的になっています。たとえば、左マークは `\chapter` コマンドによって変更されます。そし

て右マークは `\section` コマンドによって変更されます。しかし、同一ページに複数の `\markboth` コマンドが現れたとき、おかしい結果となることがあります。

`\tableofcontents` のようなコマンドは、`\mkboth` コマンドを用いて、あるページスタイルの中でマークを設定しなくてはなりません。`\mkboth` は、`\ps@...` コマンドによって、`\markboth` (ヘッダを設定する) か、`\gobbletwo` (何もしない) に `\let` されます。

13.2 plain ページスタイル

`\ps@plain` *jpl@in* に `\let` するために、ここで定義をします。

```
799 \def\ps@plain{\let\mkboth\gobbletwo
800   \let\ps@jpl@in\ps@plain
801   \let\@oddhead\@empty
802   \def\@oddfoot{\reset@font\hfil\thepage\hfil}%
803   \let\@evenhead\@empty
804   \let\@evenfoot\@oddfoot}
```

13.3 jpl@in ページスタイル

`\ps@jpl@in` *jpl@in* スタイルは、クラスファイル内部で使用するものです。L^AT_EX では、book クラスを *headings* としています。しかし、`\tableofcontents` コマンドの内部では *plain* として設定されるため、一つの文書でのページ番号の位置が上下に出力されることになります。

そこで、pL^AT_EX 2_ε では、`\tableofcontents` や `\theindex` のページスタイルを *jpl@in* にし、実際に出力される形式は、ほかのページスタイルで `\let` をしています。したがって、*headings* のとき、目次ページのページ番号はヘッダ位置に出力され、*plain* のときには、フッタ位置に出力されます。

ここで、定義をしているのは、その初期値です。

```
805 \let\ps@jpl@in\ps@plain
```

13.4 headnombre ページスタイル

`\ps@headnombre` *headnombre* スタイルは、ヘッダにページ番号のみを出力します。

```
806 \def\ps@headnombre{\let\mkboth\gobbletwo
807   \let\ps@jpl@in\ps@headnombre
808   \yoko \def\@evenhead{\thepage\hfil}%
809   \yoko \def\@oddhead{\hfil\thepage}%
810   \tate \def\@evenhead{\hfil\thepage}%
811   \tate \def\@oddhead{\thepage\hfil}%
812   \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty}
```

13.5 footnombre ページスタイル

`\ps@footnombre` *footnombre* スタイルは、フッタにページ番号のみを出力します。

```
813 \def\ps@footnombre{\let\mkboth\gobbletwo
814   \let\ps@jpl@in\ps@footnombre
815 <yoko> \def\@evenfoot{\thepage\hfil}%
816 <yoko> \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
817 <tate> \def\@evenfoot{\hfil\thepage}%
818 <tate> \def\@oddfoot{\thepage\hfil}%
819   \let\@oddhead\empty\let\@evenhead\empty}
```

13.6 headings スタイル

headings スタイルは、ヘッダに見出しとページ番号を出力します。

`\ps@headings` このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

```
820 \if@twoside
```

横組の場合は、奇数ページが右に、偶数ページが左にきます。縦組の場合は、奇数ページが左に、偶数ページが右にきます。

```
821   \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
822     \let\@oddfoot\empty\let\@evenfoot\empty
823 <yoko>   \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%
824 <yoko>   \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
825 <tate>   \def\@evenhead{\leftmark\hfil\thepage}%
826 <tate>   \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
827     \let\mkboth\markboth
828 <*article>
829       \def\sectionmark##1{\markboth{%
830         \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
831         ##1}{}}%
832       \def\subsectionmark##1{\markright{%
833         \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
834         ##1}}%
835 </article>
836 <*report | book>
837       \def\chaptermark##1{\markboth{%
838         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
839 <book>   \if@mainmatter
840           \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
841 <book>   \fi
842         \fi
843         ##1}{}}%
844       \def\sectionmark##1{\markright{%
845         \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
846         ##1}}%
847 </report | book>
848   }
```

片面印刷の場合：

```
849 \else % if not twoside
850   \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
851     \let\@oddfoot\empty
852     \yoko      \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
853     \tate      \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
854     \let\@mkboth\markboth
855     \*article
856     \def\sectionmark##1{\markright{%
857       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
858       ##1}}%
859   \*report | book
860   \def\chaptermark##1{\markright{%
861     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
862       \if@mainmatter
863         \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
864       \fi
865     \fi
866     ##1}}%
867   \*report | book
868   }
869   }
870 \fi
```

13.7 bothstyle スタイル

`\ps@bothstyle` *bothstyle* スタイルは、ヘッダに見出しを、フッタにページ番号を出力します。

このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

```
871 \if@twoside
872   \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
873     \*yoko
874     \def\@evenhead{\leftmark\hfil}% right page
875     \def\@evenfoot{\thepage\hfil}% right page
876     \def\@oddhead{\hfil\rightmark}% left page
877     \def\@oddfoot{\hfil\thepage}% left page
878   \*tate
879   \def\@evenhead{\hfil\leftmark}% right page
880   \def\@evenfoot{\hfil\thepage}% right page
881   \def\@oddhead{\rightmark\hfil}% left page
882   \def\@oddfoot{\thepage\hfil}% left page
883   \let\@mkboth\markboth
884   \*article
885   \def\sectionmark##1{\markboth{%
886     \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
887     ##1}{}}%
888   \def\subsectionmark##1{\markright{%
889     \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesubsection.\hskip1zw\fi
890     ##1}}%
```

```

891 \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
892 ##1}}}%
893 \end{article}
894 \ifreport|book
895 \def\chaptermark##1{\markboth{%
896 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
897 \book \ifmainmatter
898 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
899 \book \fi
900 \fi
901 ##1}}}%
902 \def\sectionmark##1{\markright{%
903 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
904 ##1}}}%
905 \end{report|book}
906 }

907 \else % if one column
908 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
909 \yoko \def\@oddhead{\hfil\rightmark}%
910 \yoko \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
911 \tate \def\@oddhead{\rightmark\hfil}%
912 \tate \def\@oddfoot{\thepage\hfil}%
913 \let\@mkboth\markboth
914 \end{article}
915 \def\sectionmark##1{\markright{%
916 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
917 ##1}}}%
918 \end{article}
919 \ifreport|book
920 \def\chaptermark##1{\markright{%
921 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
922 \book \ifmainmatter
923 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
924 \book \fi
925 \fi
926 ##1}}}%
927 \end{report|book}
928 }
929 \fi

```

13.8 myheading スタイル

`\ps@myheadings` *myheadings* ページスタイルは簡潔に定義されています。ユーザがページスタイルを設計するときのヒナ型として使用することができます。

```

930 \def\ps@myheadings{\let\ps@jpl@in\ps@plain%
931 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
932 \yoko \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%
933 \yoko \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%

```

```

934 <tate> \def\@evenhead{\leftmark}\hfil\thepage}%
935 <tate> \def\@oddhead{\thepage}\hfil\rightmark}%
936 \let\@mkboth\@gobbletwo
937 <!article> \let\chaptermark\@gobble
938 \let\sectionmark\@gobble
939 <article> \let\subsectionmark\@gobble
940 }

```

14 文書コマンド

14.1 表題

`\title` 文書のタイトル、著者、日付の情報のための、これらの3つのコマンドは `ltsect.dtx` で提供されています。これらのコマンドは次のように定義されています。

```

\date 941 %\newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}
942 %\newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}
943 %\newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}

```

`\date` マクロのデフォルトは、今日の日付です。

```
944 %\date{\today}
```

`titlepage` 通常環境では、ページの最初と最後を除き、タイトルページ環境は何もしません。また、ページ番号の出力を抑制します。レポートスタイルでは、ページ番号を1にリセットし、そして最後で1に戻します。互換モードでは、ページ番号はゼロに設定されますが、右起しページ用のページパラメータでは誤った結果になります。二段組スタイルでも一段組のページが作られます。

日本語 *T_EX* 開発コミュニティによる変更：上にあるのはアスキー版の説明です。改めてアスキー版の挙動を整理すると、以下のようになります。

1. アスキー版では、タイトルページの番号を必ず1にリセットしていましたが、これは正しくありません。これは、タイトルページが奇数ページ目か偶数ページ目かにかかわらず、レイアウトだけ奇数ページ用が適用されてしまうからです。さらに、タイトルの次のページも偶数のページ番号を持つてしまうため、両面印刷で奇数ページと偶数ページが交互に出なくなるという問題もあります。
2. アスキー版 `book` クラスは、タイトルページを必ず `\cleardoublepage` で始めていました。pL^AT_EX カーネルでの `\cleardoublepage` の定義から、縦組の既定ではタイトルが偶数ページ目に出ることになります。これ自体が正しくないと断定することはできませんが、タイトルのページ番号を1にリセットすることと合わさって、偶数ページに送ったタイトルに奇数ページ用レイアウトが適用されてしまうという結果は正しくありません。

そこで、コミュニティ版ではタイトルのレイアウトが必ず奇数ページ用になるという挙動を支持し、book クラスではタイトルページを奇数ページ目に送ることにしました。これでタイトルページが表紙らしく見えるようになります。また、report クラスのようなタイトルが成り行きに従って出る場合には

- 奇数ページ目に出る場合、ページ番号を 1（奇数）にリセット
- 偶数ページ目に出る場合、ページ番号を 0（偶数）にリセット

としました。

一つめの例を考えます。

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

- 1 ページ目：空白（ページ番号 1 は非表示）
- 2 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 3 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

ですが、仮に最初の空白ページさえなければ

- 1 ページ目：タイトルすなわち表紙（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 2 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

とみなせるため、コミュニティ版では空白ページを発生させないようにしました。

二つめの例を考えます。

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
テスト文章
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

- 1 ページ目：テスト文章（奇数レイアウト、ページ番号 1）
- 2 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 3 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

ですが、これでは奇数と偶数のページ番号が交互になっていないので正しくありません。そこで、コミュニティ版では

- 1 ページ目：テスト文章（奇数レイアウト、ページ番号 1）
- 2 ページ目：空白ページ（ページ番号 2 は非表示）
- 3 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 4 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

と直しました。

なお、pL^AT_EX 2.09 互換モードはアスキー版のまま、すなわち「ページ番号をゼロに設定」としてあります。これは、横組の右起こしの挙動としては誤りですが、縦組の右起こしの挙動としては一応正しくなっているといえます。

最初に互換モードの定義を作ります。

```

945 \if@compatibility
946 \newenvironment{titlepage}
947   {%
948   <book>      \cleardoublepage
949     \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
950     \else\@restonecolfalse\newpage\fi
951     \thispagestyle{empty}%
952     \setcounter{page}\z@
953   }%
954   {\if@restonecol\twocolumn\else\newpage\fi
955   }
```

そして、L^AT_EX ネイティブのための定義です。

```

956 \else
957 \newenvironment{titlepage}
958   {%
959   <book>      \pltx@cleartooddpage %% 2017/02/15
960     \if@twocolumn
961       \@restonecoltrue\onecolumn
962     \else
963       \@restonecolfalse\newpage
964     \fi
965     \thispagestyle{empty}%
966     \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017/02/15
967   }%
968   {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
```

両面モードでなければ、タイトルページの直後のページのページ番号も 1 にします。

```

969     \if@twoside\else
970       \setcounter{page}\@ne
971     \fi
972   }
973 \fi
```

`\maketitle` このコマンドは、表題を作成し、出力します。表題ページを独立させるかどうかによって定義が異なります。report と book クラスのデフォルトは独立した表題です。article クラスはオプションで独立させることができます。

`\p@thanks` 縦組のときは、`\thanks` コマンドを `\p@thanks` に `\let` します。このコマンドは `\footnotetext` を使わず、直接、文字を `\@thanks` に格納していきます。

著者名の脇に表示される合印は直立した数字、注釈側は横に寝た数字となっていました。不自然なので `\hbox{\yoko ...}` を追加し、両方とも直立するようにしました。

```
974 \def\p@thanks#1{\footnotemark
975   \protected@xdef\@thanks{\@thanks
976     \protect{\noindent\hbox{\yoko$\m@th^{\thefootnote$}\#1\protect\par}}}%

977 \if@titlepage
978   \newcommand{\maketitle}{\begin{titlepage}%
979     \let\footnotesize\small
980     \let\footnoterule\relax
981     \tate \let\thanks\p@thanks
982     \let\footnote\thanks

983     \tate \vbox to\textheight\bgroup\tate\hsize\textwidth
984       \null\vfil
985       \vskip 60\p@
986       \begin{center}%
987         {\LARGE \@title \par}%
988         \vskip 3em%
989         {\Large
990           \lineskip .75em%
991           \begin{tabular}[t]{c}%
992             \@author
993             \end{tabular}\par}%
994           \vskip 1.5em%
995           {\large \@date \par}%           % Set date in \large size.
996         \end{center}\par
997     \tate \vfil{\centering\@thanks}\vfil\null
998     \tate \egroup
999     \yoko \@thanks\vfil\null
1000   \end{titlepage}%
```

`footnote` カウンタをリセットし、`\thanks` と `\maketitle` コマンドを無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```
1001 \setcounter{footnote}{0}%
1002 \global\let\thanks\relax
1003 \global\let\maketitle\relax
1004 \global\let\p@thanks\relax
1005 \global\let\@thanks\@empty
1006 \global\let\@author\@empty
1007 \global\let\@date\@empty
1008 \global\let\@title\@empty
```

タイトルが組版されたら、`\title` コマンドなどの宣言を無効にできます。`\and` の定義は、`\author` の引数でのみ使用しますので、破棄します。

```

1009 \global\let\title\relax
1010 \global\let\author\relax
1011 \global\let\date\relax
1012 \global\let\and\relax
1013 }%
1014 \else
1015 \newcommand{\maketitle}{\par
1016 \begin{group}
1017 \renewcommand{\thefootnote}{\fnsymbol{footnote}}%
1018 \def\@makefnmark{\hbox{\ifdir $\m@th^{\@thefnmark}$
1019 \else\hbox{\yoko$\m@th^{\@thefnmark}$}\fi}}%
1020 \tate
1021 \long\def\@makefntext##1{\parindent 1zw\noindent
1022 \hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}##1}%
1023 \tate
1024 \yoko
1025 \long\def\@makefntext##1{\parindent 1em\noindent
1026 \hb@xt@ 1.8em{\hss$\m@th^{\@thefnmark}$}##1}%
1027 \yoko
1028 \if@twocolumn
1029 \ifnum \col@number=\@ne \maketitle
1030 \else \twocolumn[\maketitle]%
1031 \fi
1032 \else
1033 \newpage
1034 \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
1035 \maketitle
1036 \fi
1037 \thispagestyle{jpl@in}\@thanks

```

ここでグループを閉じ、*footnote* カウンタをリセットし、`\thanks`、`\maketitle`、`\@maketitle` を無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```

1038 \endgroup
1039 \setcounter{footnote}{0}%
1040 \global\let\thanks\relax
1041 \global\let\maketitle\relax
1042 \global\let\@maketitle\relax
1043 \global\let\p@thanks\relax
1044 \global\let\@thanks\@empty
1045 \global\let\@author\@empty
1046 \global\let\@date\@empty
1047 \global\let\@title\@empty
1048 \global\let\title\relax
1049 \global\let\author\relax
1050 \global\let\date\relax
1051 \global\let\and\relax
1052 }

```

`\@maketitle` 独立した表題ページを作らない場合の、表題の出力形式です。

```
1053 \def\@maketitle{%
1054 \newpage\null
1055 \vskip 2em%
1056 \begin{center}%
1057 \yoko \let\footnote\thanks
1058 \tate \let\footnote\p@thanks
1059 {\LARGE \@title \par}%
1060 \vskip 1.5em%
1061 {\large
1062 \lineskip .5em%
1063 \begin{tabular}[t]{c}%
1064 \@author
1065 \end{tabular}\par}%
1066 \vskip 1em%
1067 {\large \@date}%
1068 \end{center}%
1069 \par\vskip 1.5em}
1070 \fi
```

14.2 概要

`abstract` 要約文のための環境です。book クラスでは使えません。report スタイルと、`titlepage` オプションを指定した article スタイルでは、独立したページに出力されます。

```
1071 \if*article|report
1072 \if@titlepage
1073 \newenvironment{abstract}{%
1074 \titlepage
1075 \null\vfil
1076 \@beginparpenalty\@lowpenalty
1077 \begin{center}%
1078 {\bfseries\abstractname}%
1079 \@endparpenalty\@M
1080 \end{center}}%
1081 {\par\vfil\null\endtitlepage}
1082 \else
1083 \newenvironment{abstract}{%
1084 \if@twocolumn
1085 \section*{\abstractname}%
1086 \else
1087 \small
1088 \begin{center}%
1089 {\bfseries\abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z@}}%
1090 \end{center}%
1091 \quotation
1092 \fi}{\if@twocolumn\else\endquotation\fi}
1093 \fi
1094 \if*article|report
```

14.3 章見出し

14.3.1 マークコマンド

`\chaptermark` `\...mark` コマンドを初期化します。これらのコマンドはページスタイルの定義で使われます (第 13 節参照)。これらのたいていのコマンドは `ltsect.dtx` ですでに定義されています。

`\subsubsectionmark` 1095 `\newcommand*{\chaptermark}[1]{}`
1096 `%\newcommand*{\sectionmark}[1]{}`
`\paragraphmark` 1097 `%\newcommand*{\subsectionmark}[1]{}`
1098 `%\newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{}`
`\subparagraphmark` 1099 `%\newcommand*{\paragraph}[1]{}`
1100 `%\newcommand*{\subparagraph}[1]{}`

14.3.2 カウンタの定義

`\c@secnumdepth` *secnumdepth* には、番号を付ける、見出しコマンドのレベルを設定します。

1101 `\newcommand*{\setcounter{secnumdepth}{3}}`
1102 `\newcommand*{\setcounter{secnumdepth}{2}}`

`\c@chapter` これらのカウンタは見出し番号に使われます。最初の引数は、二番目の引数が増加するたびにリセットされます。二番目のカウンタはすでに定義されているものでなくてはなりません。

`\c@subsection` 1103 `\newcounter{part}`
1104 `\newcounter{*book | report}`
`\c@paragraph` 1105 `\newcounter{chapter}`
1106 `\newcounter{section}[chapter]`
1107 `\newcounter{/book | report}`
1108 `\newcounter{section}`
1109 `\newcounter{subsection}[section]`
1110 `\newcounter{subsubsection}[subsection]`
1111 `\newcounter{paragraph}[subsubsection]`
1112 `\newcounter{subparagraph}[paragraph]`

`\thepart` `\theCTR` が実際に出力される形式の定義です。

`\thechapter` `\arabic{COUNTER}` は、*COUNTER* の値を算用数字で出力します。

`\thesection` `\roman{COUNTER}` は、*COUNTER* の値を小文字のローマ数字で出力します。

`\thesubsection` `\Roman{COUNTER}` は、*COUNTER* の値を大文字のローマ数字で出力します。

`\thesubsubsection` `\alph{COUNTER}` は、*COUNTER* の値を 1 = a, 2 = b のようにして出力します。

`\theparagraph` `\Roman{COUNTER}` は、*COUNTER* の値を 1 = A, 2 = B のようにして出力します。

`\thesubparagraph` `\kansuji{COUNTER}` は、*COUNTER* の値を漢数字で出力します。

`\rensuji{<obj>}`は、`<obj>`を横に並べて出力します。したがって、横組のときには、何も影響しません。

```

1113 <*tate>
1114 \renewcommand{\thepart}{\rensuji{\@Roman\c@part}}
1115 <article>\renewcommand{\thesection}{\rensuji{\@arabic\c@section}}
1116 <*report | book>
1117 \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@arabic\c@chapter}}
1118 \renewcommand{\thesection}{\thechapter}{\rensuji{\@arabic\c@section}}
1119 </report | book>
1120 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection}{\rensuji{\@arabic\c@subsection}}
1121 \renewcommand{\thesubsubsection}{\%
1122   \thesubsection}{\rensuji{\@arabic\c@subsubsection}}
1123 \renewcommand{\theparagraph}{\%
1124   \thesubsubsection}{\rensuji{\@arabic\c@paragraph}}
1125 \renewcommand{\thesubparagraph}{\%
1126   \theparagraph}{\rensuji{\@arabic\c@subparagraph}}
1127 </tate>
1128 <*yoko>
1129 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
1130 <article>\renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
1131 <*report | book>
1132 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
1133 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
1134 </report | book>
1135 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\@arabic\c@subsection}
1136 \renewcommand{\thesubsubsection}{\%
1137   \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
1138 \renewcommand{\theparagraph}{\%
1139   \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
1140 \renewcommand{\thesubparagraph}{\%
1141   \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
1142 </yoko>

```

`\@chapapp` `\@chapapp`の初期値は‘`\prechaptername`’です。

`\@chappos` `\@chappos`の初期値は‘`\postchaptername`’です。

`\appendix` コマンドは `\@chapapp` を‘`\appendixname`’に、`\@chappos` を空に再定義します。

```

1143 <*report | book>
1144 \newcommand{\@chapapp}{\prechaptername}
1145 \newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
1146 </report | book>

```

14.3.3 前付け、本文、後付け

`\frontmatter` 一冊の本は論理的に3つに分割されます。表題や目次や「はじめに」あるいは権利

`\mainmatter` などの前付け、そして本文、それから用語集や索引や奥付けなどの後付けです。

`\backmatter`

日本語 $T_{E}X$ 開発コミュニティによる補足： $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{E}X$ の `classes.dtx` は、1996/05/26 (v1.3r) と 1998/05/05 (v1.3y) の計 2 回、`\frontmatter` と `\mainmatter` の定義を修正しています。一回目はこれらの命令を `openany` オプションに応じて切り替え、二回目はそれを元に戻しています。アスキーによる `jclasses.dtx` は、1997/01/15 に一回目の修正に追随しましたが、二回目の修正には追随していません。コミュニティ版では、一旦はアスキーによる仕様を維持しようと考えました (2016/11/22) が、以下の理由により二回目の修正にも追随することにしました (2017/03/05)。

アスキー版での `\frontmatter` と `\mainmatter` の改ページ挙動は

`openright` なら `\cleardoublepage`、`openany` なら `\clearpage` を実行

というものでした。しかし、`\frontmatter` 及び `\mainmatter` はノンブルを 1 にリセットしますから、改ページの結果が偶数ページ目になる場合²にノンブルが偶奇逆転してしまいました。このままでは `openany` の場合に両面印刷がうまくいかないため、新しいコミュニティ版では

必ず `\pltx@cleartooddpage` を実行

としました。これは両面印刷 (twoside) の場合は奇数ページに送り、片面印刷 (oneside) の場合は単に改ページとなります。(参考：[latex/2754](#))

```
1147 <*book>
1148 \newcommand{\frontmatter}{%
1149   \pltx@cleartooddpage
1150   \@mainmatterfalse\pagenumbering{roman}}
1151 \newcommand{\mainmatter}{%
1152   \pltx@cleartooddpage
1153   \@mainmattertrue\pagenumbering{arabic}}
1154 \newcommand{\backmatter}{%
1155   \if@openleft \cleardoublepage \else
1156   \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1157   \@mainmatterfalse}
1158 </book>
```

14.3.4 ボックスの組み立て

クラスファイル定義の、この部分では、`\@startsection` と `\secdef` の二つの内部マクロを使います。これらの構文を次に示します。

`\@startsection` マクロは 6 つの引数と 1 つのオプション引数 `*` を取ります。
`\@startsection<name><level><indent><beforeskip><afterskip><style> optional *`
`[\<altheading>]<heading>`

それぞれの引数の意味は、次のとおりです。

²縦 `tbook` のデフォルト (`openright`) が該当するほか、横 `jbook` と縦 `tbook` の `openany` のときには成り行き次第で該当する可能性があります。

<name> レベルコマンドの名前です (例:section)。

<level> 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。 “<level> ≤ カウンタ *secnumdepth* の値” のとき、見出し番号が出力されます。

<indent> 見出しに対する、左マージンからのインデント量です。

<beforeskip> 見出しの上に置かれる空白の絶対値です。負の場合は、見出しに続くテキストのインデントを抑制します。

<afterskip> 正のとき、見出しの後の垂直方向のスペースとなります。負の場合は、見出しの後の水平方向のスペースとなります。

<style> 見出しのスタイルを設定するコマンドです。

<*> 見出し番号を付けないとき、対応するカウンタは増加します。

<heading> 新しい見出しの文字列です。

見出しコマンドは通常、`\@startsection` と 6 つの引数で定義されています。

`\secdef` マクロは、見出しコマンドを `\@startsection` を用いずに定義するときに使います。このマクロは、2 つの引数を持ちます。

```
\secdef<unstarcmds><starcmds>
```

<unstarcmds> 見出しコマンドの普通の形式で使われます。

<starcmds> * 形式の見出しコマンドで使われます。

`\secdef` は次のようにして使うことができます。

```
\def\chapter {... \secdef \CMDA \CMDB }
\def\CMDA    [#1]#2{...} % \chapter[...]{...} の定義
\def\CMDB    #1{...}    % \chapter*{...} の定義
```

14.3.5 part レベル

\part このコマンドは、新しいパート (部) をはじめます。

article クラスの場合は、簡単です。

新しい段落を開始し、小さな空白を入れ、段落後のインデントを行い、`\secdef` で作成します。(アスキーによる元のドキュメントには「段落後のインデントをしないようにし」と書かれていましたが、実際のコードでは段落後のインデントを行っていました。そこで日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティは、ドキュメントをコードに合わせて「段落後のインデントを行い」へと修正しました。)

1159 **<*article>**

```

1160 \newcommand{\part}{%
1161   \if@noskipsec \leavevmode \fi
1162   \par\advspace{4ex}%
1163   \@afterindenttrue
1164   \secdef\@part\@spart}
1165 \end{article}

```

report と book スタイルの場合は、少し複雑です。

まず、右ページからはじまるように改ページをします。そして、部扉のページスタイルを `empty` にします。2 段組の場合でも、1 段組で作成しますが、後ほど 2 段組に戻すために、`\@restonecol` スイッチを使います。

```

1166 \report | book
1167 \newcommand{\part}{%
1168   \if@openleft \cleardoublepage \else
1169   \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1170   \thispagestyle{empty}%
1171   \if@twocolumn\onecolumn\@tempwattrue\else\@tempwafalse\fi
1172   \null\vfil
1173   \secdef\@part\@spart}
1174 \end{report | book}

```

`\@part` このマクロが実際に部レベルの見出しを作成します。このマクロも文書クラスによって定義が異なります。

article クラスの場合は、`secnumdepth` が -1 よりも大きいとき、見出し番号を付けます。このカウンタが -1 以下の場合には付けません。

```

1175 \article
1176 \def\@part[#1]#2{%
1177   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1178     \refstepcounter{part}%
1179     \addcontentsline{toc}{part}{%
1180       \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1zw}#1}%
1181   \else
1182     \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1183   \fi
1184   \markboth{}{}%
1185   {\parindent\z@\raggedright
1186     \interlinepenalty\@M\normalfont
1187     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1188       \Large\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
1189       \par\nobreak
1190     \fi
1191     \huge\bfseries#2\par}%
1192   \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
1193 \end{article}

```

report と book クラスの場合は、`secnumdepth` が -2 よりも大きいときに、見出し番号を付けます。 -2 以下では付けません。

```

1194 <*report | book>
1195 \def\@part[#1]#2{%
1196   \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1197     \refstepcounter{part}%
1198     \addcontentsline{toc}{part}{%
1199       \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1em}#1}%
1200   \else
1201     \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1202   \fi
1203   \markboth{}{}%
1204   {\centering
1205     \interlinepenalty\@M\normalfont
1206     \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1207       \huge\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
1208       \par\vskip20\p@
1209     \fi
1210     \Huge\bfseries#2\par}%
1211   \@endpart}
1212 </report | book>

```

`\@spart` このマクロは、番号を付けないときの体裁です。

```

1213 <*article>
1214 \def\@spart#1{%
1215   \parindent\z@\raggedright
1216   \interlinepenalty\@M\normalfont
1217   \huge\bfseries#1\par}%
1218   \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
1219 </article>

1220 <*report | book>
1221 \def\@spart#1{%
1222   \centering
1223   \interlinepenalty\@M\normalfont
1224   \Huge\bfseries#1\par}%
1225   \@endpart}
1226 </report | book>

```

`\@endpart` `\@part` と `\@spart` の最後で実行されるマクロです。両面印刷モードのときは、白ページを追加します。二段組モードのときには、これ以降のページを二段組に戻します。2016 年 12 月から、`openany` のときに白ページを追加するのをやめました。このバグは L^AT_EX では `classes.dtx` v1.4b (2000/05/19) で修正されていました。(参考: latex/3155、texjporg/jsclasses#48)

```

1227 <*report | book>
1228 \def\@endpart{\vfil\newpage
1229   \if@twoside
1230     \if@openleft %% \if@openleft added (2017/02/15)
1231     \null\thispagestyle{empty}\newpage
1232     \else\if@openright %% \if@openright added (2016/12/18)

```

```

1233 \null\thispagestyle{empty}\newpage
1234 \fi\fi %% added (2016/12/18, 2017/02/15)
1235 \fi

```

二段組文書のとき、スイッチを二段組モードに戻す必要があります。

```

1236 \if@tempswa\twocolumn\fi}
1237 </report | book>

```

14.3.6 chapter レベル

chapter 章レベルは、必ずページの先頭から開始します。openright オプションが指定されている場合は、右ページからはじまるように \cleardoublepage を呼び出します。そうでなければ、\clearpage を呼び出します。なお、縦組の場合でも右ページからはじまるように、フォーマットファイルで \clerdoublepage が定義されています。

日本語 *TEX* 開発コミュニティによる補足：コミュニティ版の実装では、openright と openleft の場合に \cleardoublepage をクラスファイルの中で再々定義しています。12 を参照してください。

章見出しが出力されるページのスタイルは、jpl@in になります。jpl@in は、headnomble か footnomble のいずれかです。詳細は、第 13 節を参照してください。

また、\@topnum をゼロにして、章見出しの上にトップフロートが置かれないうにしています。

```

1238 <*report | book>
1239 \newcommand{\chapter}{%
1240 \if@openleft \cleardoublepage \else
1241 \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1242 \thispagestyle{jpl@in}%
1243 \global\@topnum\z@
1244 \@afterindenttrue
1245 \secdef\@chapter\@schapter}

```

\@chapter このマクロは、章見出しに番号を付けるときに呼び出されます。secnumdepth が -1 よりも大きく、\@mainmatter が真 (book クラスの場合) のときに、番号を出力します。

日本語 *TEX* 開発コミュニティによる補足：本家 *L^AT_EX* の classes では、二段組のときチャプタータイトルは一段組に戻されますが、アスキーによる jclasses では二段組のままにされています。したがって、チャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るという挙動になっていますが、コミュニティ版でもアスキー版の挙動を維持しています。

```

1246 \def\@chapter[#1]#2{%
1247 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1248 <book> \if@mainmatter
1249 \refstepcounter{chapter}%

```

```

1250 \typeout{\@chapapp\space\thechapter\space\@chappos}%
1251 \addcontentsline{toc}{chapter}%
1252 {\protect\numberline{\@chapapp\thechapter\@chappos}#1}%
1253 <book> \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
1254 \else
1255 \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
1256 \fi
1257 \chaptermark{#1}%
1258 \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\p@}}%
1259 \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\p@}}%
1260 \@makechapterhead{#2}\@afterheading

```

`\@makechapterhead` このマクロが実際に章見出しを組み立てます。

```

1261 \def\@makechapterhead#1{\hbox{}%
1262 \vskip2\Cvs
1263 {\parindent\z@
1264 \raggedright
1265 \normalfont\huge\bfseries
1266 \leavevmode
1267 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1268 \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1269 <book> \if@mainmatter
1270 \setbox\z@\hbox{\@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw}%
1271 \addtolength\@tempdima{-\wd\z@}%
1272 \unhbox\z@\nobreak
1273 <book> \fi
1274 \vtop{\hsize\@tempdima#1}%
1275 \else
1276 #1\relax
1277 \fi}\nobreak\vskip3\Cvs}

```

`\@schapter` このマクロは、章見出しに番号を付けないときに呼び出されます。

日本語 *T_EX* 開発コミュニティによる補足：やはり二段組でチャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るといふ挙動を維持してあります。

```

1278 \def\@schapter#1{%
1279 \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
1280 }

```

`\@makeschapterhead` 番号を付けない場合の形式です。

```

1281 \def\@makeschapterhead#1{\hbox{}%
1282 \vskip2\Cvs
1283 {\parindent\z@
1284 \raggedright
1285 \normalfont\huge\bfseries
1286 \leavevmode
1287 \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1288 \vtop{\hsize\@tempdima#1}\vskip3\Cvs}
1289 </report | book>

```

14.3.7 下位レベルの見出し

`\section` 見出しの前後に空白を付け、`\Large\bfseries` で出力をします。

```
1290 \newcommand{\section}{\@startsection{section}{1}{\z@}%  
1291   {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%  
1292   {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%  
1293   {\normalfont\Large\bfseries}}
```

`\subsection` 見出しの前後に空白を付け、`\large\bfseries` で出力をします。

```
1294 \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%  
1295   {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%  
1296   {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%  
1297   {\normalfont\large\bfseries}}
```

`\subsubsection` 見出しの前後に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。

```
1298 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%  
1299   {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%  
1300   {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%  
1301   {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

`\paragraph` 見出しの前に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。見出しの後ろで改行されません。

```
1302 \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%  
1303   {3.25ex \@plus 1ex \@minus .2ex}%  
1304   {-1em}%  
1305   {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

`\subparagraph` 見出しの前に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。見出しの後ろで改行されません。

```
1306 \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%  
1307   {3.25ex \@plus 1ex \@minus .2ex}%  
1308   {-1em}%  
1309   {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

14.3.8 付録

`\appendix` article クラスの場合、`\appendix` コマンドは次のことを行ないます。

- `section` と `subsection` カウンタをリセットする。
- `\thesection` を英小文字で出力するように再定義する。

```
1310 \langle *article \rangle  
1311 \newcommand{\appendix}{\par  
1312   \setcounter{section}{0}%  
1313   \setcounter{subsection}{0}%
```

```

1314 <tate> \renewcommand{\thesection}{\rensuji{\@Alph{c@section}}}
1315 <yoko> \renewcommand{\thesection}{\@Alph{c@section}}
1316 </article>

```

report と book クラスの場合、\appendix コマンドは次のことを行ないます。

- chapter と section カウンタをリセットする。
- \@chapapp を \appendixname に設定する。
- \@chappos を空にする。
- \thechapter を英小文字で出力するように再定義する。

```

1317 <*report | book>
1318 \newcommand{\appendix}{\par
1319 \setcounter{chapter}{0}%
1320 \setcounter{section}{0}%
1321 \renewcommand{\@chapapp}{\appendixname}%
1322 \renewcommand{\@chappos}{\space%
1323 <tate> \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@Alph{cchapter}}}
1324 <yoko> \renewcommand{\thechapter}{\@Alph{cchapter}}
1325 </report | book>

```

14.4 リスト環境

ここではリスト環境について説明をしています。

リスト環境のデフォルトは次のように設定されます。

まず、\rightmargin, \listparindent, \itemindent をゼロにします。そして、K 番目のレベルのリストは \@listK で示されるマクロが呼び出されます。ここで ‘K’ は小文字のローマ数字で示されます。たとえば、3 番目のレベルのリストとして \@listiii が呼び出されます。 \@listK は \leftmargin を \leftmarginK に設定します。

```

\leftmargin 二段組モードのマージンは少しだけ小さく設定してあります。
\leftmargini 1326 \if@twocolumn
1327 \setlength\leftmargini {2em}
\leftmarginii 1328 \else
1329 \setlength\leftmargini {2.5em}
\leftmarginiv 1330 \fi
\leftmarginv 次の3つの値は、\labelsep とデフォルトラベル (‘(m)’, ‘vii.’, ‘M.’) の幅の合計よ
\leftmarginvi りも大きくしてあります。
1331 \setlength\leftmarginii {2.2em}
1332 \setlength\leftmarginiii {1.87em}
1333 \setlength\leftmarginiv {1.7em}

```

```

1334 \if@twocolumn
1335   \setlength\leftmarginv {.5em}
1336   \setlength\leftmarginvi {.5em}
1337 \else
1338   \setlength\leftmarginv {1em}
1339   \setlength\leftmarginvi {1em}
1340 \fi

```

`\labelsep` `\labelsep` はラベルとテキストの項目の間の距離です。`\labelwidth` はラベルの幅です。

```

1341 \setlength \labelsep {.5em}
1342 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
1343 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}

```

`\@beginparpenalty` これらのペナルティは、リストや段落環境の前後に挿入されます。

`\@endparpenalty`
`\@itempenalty` このペナルティは、リスト項目の間に挿入されます。

```

1344 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
1345 \@endparpenalty -\@lowpenalty
1346 \@itempenalty -\@lowpenalty
1347 </article | report | book>

```

`\partopsep` リスト環境の前に空行がある場合、`\parskip` と `\topsep` に `\partopsep` が加えられた値の縦方向の空白が取られます。

```

1348 <10pt>\setlength\partopsep{2\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
1349 <11pt>\setlength\partopsep{3\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
1350 <12pt>\setlength\partopsep{3\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

```

`\@listi` `\@listi` は、`\leftmargin`, `\parsep`, `\topsep`, `\itemsep` などのトップレベルの定義をします。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます（たとえば、`\small` の中では“小さい” リストパラメータになります）。

このため、`\normalsize` がすべてのパラメータを戻せるように、`\@listI` は `\@listi` のコピーを保存するように定義されています。

```

1351 <*10pt | 11pt | 12pt>
1352 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
1353 <*10pt>
1354   \parsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1355   \topsep 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
1356   \itemsep4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
1357 </10pt>
1358 <*11pt>
1359   \parsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1360   \topsep 9\p@   \@plus3\p@ \@minus5\p@
1361   \itemsep4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
1362 </11pt>
1363 <*12pt>

```



```

1364 \parsep 5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@
1365 \topsep 10\p@ \@plus4\p@ \@minus6\p@
1366 \itemsep5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@}
1367 </12pt>
1368 \let\@listI\@listi

```

ここで、パラメータを初期化しますが、厳密には必要ありません。

```

1369 \@listi

```

\@listii 下位レベルのリスト環境のパラメータの設定です。これらは保存用のバージョンを
\@listiii 持たないことと、フォントサイズコマンドによって変更されないことに注意をして
\@listiv ください。言い換えれば、このクラスは、本文サイズが\normalsizeで現れるリス
\@listv トの入れ子についてだけ考えています。

```

\@listvi 1370 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
1371 \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
1372 <*10pt>
1373 \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1374 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1375 </10pt>
1376 <*11pt>
1377 \topsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1378 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1379 </11pt>
1380 <*12pt>
1381 \topsep 5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@
1382 \parsep 2.5\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1383 </12pt>
1384 \itemsep\parsep}
1385 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
1386 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
1387 <10pt> \topsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1388 <11pt> \topsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1389 <12pt> \topsep 2.5\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1390 \parsep\z@
1391 \partopsep \p@ \@plus\z@ \@minus\p@
1392 \itemsep\topsep}
1393 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
1394 \labelwidth\leftmarginiv
1395 \advance\labelwidth-\labelsep}
1396 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
1397 \labelwidth\leftmarginv
1398 \advance\labelwidth-\labelsep}
1399 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
1400 \labelwidth\leftmarginvi
1401 \advance\labelwidth-\labelsep}
1402 </10pt | 11pt | 12pt>

```

14.4.1 enumerate 環境

enumerate 環境は、カウンタ `enumi`, `enumii`, `enumiii`, `enumiv` を使います。 `enumN` は N 番目のレベルの番号を制御します。

`\theenumi` 出力する番号の書式を設定します。これらは、すでに `ltlists.dtx` で定義されています。
`\theenumii` ます。

```
\theenumiii 1403 <*article | report | book>
\theenumiv 1404 <*tate>
1405 \renewcommand{\theenumi}{\rensuji{\@arabic\c@enumi}}
1406 \renewcommand{\theenumii}{\rensuji{\@alph\c@enumii}}
1407 \renewcommand{\theenumiii}{\rensuji{\@roman\c@enumiii}}
1408 \renewcommand{\theenumiv}{\rensuji{\@Alph\c@enumiv}}
1409 </tate>
1410 <*yoko>
1411 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
1412 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
1413 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
1414 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
1415 </yoko>
```

`\labelenumi` enumerate 環境のそれぞれの項目のラベルは、`\labelenumi` ... `\labelenumiv` で生成されます。

```
\labelenumiii 1416 <*tate>
\labelenumiv 1417 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi}
1418 \newcommand{\labelenumii}{\theenumii}
1419 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii}
1420 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv}
1421 </tate>
1422 <*yoko>
1423 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
1424 \newcommand{\labelenumii}{(\theenumii)}
1425 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
1426 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
1427 </yoko>
```

`\p@enumii` `\ref` コマンドによって、enumerate 環境の N 番目のリスト項目が参照されるとき
`\p@enumiii` の書式です。

```
\p@enumiv 1428 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
1429 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi(\theenumii)}
1430 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

`enumerate` トップレベルで使われたときに、最初と最後に平行分のスペースを開けるように、変更します。この環境は、`ltlists.dtx` で定義されています。

```
1431 \renewenvironment{enumerate}
1432 {\ifnum \@enumdepth >\thr@@\@toodeep\else
```

```

1433 \advance\@enumdepth\@ne
1434 \edef\@enumctr{enum\romannumeral\the\@enumdepth}%
1435 \expandafter \list \csname label\@enumctr\endcsname{%
1436   \iftdir
1437     \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1438     \else\topsep\z@\fi
1439     \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1440     \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1441     \ifnum \@enumdepth=\@ne \leftmargin1zw\relax
1442     \else\leftmargin\leftskip\fi
1443     \advance\leftmargin 1zw
1444   \fi
1445   \usecounter{\@enumctr}%
1446   \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%
1447 \fi}{\endlist}

```

14.4.2 itemize 環境

`\labelitemi` itemize 環境のそれぞれの項目のラベルは、`\labelenumi ... \labelenumiv` で生成されます。

```

\labelitemiii 1448 \newcommand{\labelitemi}{\textbullet}
\labelitemii 1449 \newcommand{\labelitemii}{%
\labelitemiv 1450   \iftdir
1451     {\textcircled{~}}
1452   \else
1453     {\normalfont\bfseries\textendash}
1454   \fi
1455 }
1456 \newcommand{\labelitemiii}{\textasteriskcentered}
1457 \newcommand{\labelitemiv}{\textperiodcentered}

```

`itemize` トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、変更します。この環境は、`ltlists.dtx` で定義されています。

```

1458 \renewenvironment{itemize}
1459 {\ifnum \@itemdepth >\thr@@\@toodeep\else
1460   \advance\@itemdepth\@ne
1461   \edef\@itemitem{labelitem\romannumeral\the\@itemdepth}%
1462   \expandafter \list \csname \@itemitem\endcsname{%
1463     \iftdir
1464       \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1465       \else\topsep\z@\fi
1466       \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1467       \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1468       \ifnum \@itemdepth =\@ne \leftmargin1zw\relax
1469       \else\leftmargin\leftskip\fi
1470       \advance\leftmargin 1zw
1471     \fi
1472     \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%

```

```
1473 \fi}{\endlist}
```

14.4.3 description 環境

description description 環境を定義します。縦組時には、インデントが3字分だけ深くなります。

```
1474 \newenvironment{description}
1475 {\list{}{\labelwidth\z@ \itemindent-\leftmargin
1476 \iftdir
1477 \leftmargin\leftskip \advance\leftmargin3\Cwd
1478 \rightmargin\rightskip
1479 \labelsep=1zw \itemsep\z@
1480 \listparindent\z@ \topskip\z@ \parskip\z@ \partopsep\z@
1481 \fi
1482 \let\makelabel\descriptionlabel}}{\endlist}
```

\descriptionlabel ラベルの形式を変更する必要がある場合は、**\descriptionlabel** を再定義してください。

```
1483 \newcommand{\descriptionlabel}[1]{%
1484 \hspace\labelsep\normalfont\bfseries #1}
```

14.4.4 verse 環境

verse verse 環境は、リスト環境のパラメータを使って定義されています。改行をするには **** を用います。**** は **\@centercr** に **\let** されています。

```
1485 \newenvironment{verse}
1486 {\let\\ \@centercr
1487 \list{}{\itemsep\z@ \itemindent -1.5em%
1488 \listparindent\itemindent
1489 \rightmargin\leftmargin \advance\leftmargin 1.5em}%
1490 \item\relax}{\endlist}
```

14.4.5 quotation 環境

quotation quotation 環境もまた、list 環境のパラメータを使用して定義されています。この環境の各行は、**\textwidth** よりも小さく設定されています。この環境における、段落の最初の行はインデントされます。

```
1491 \newenvironment{quotation}
1492 {\list{}{\listparindent 1.5em%
1493 \itemindent\listparindent
1494 \rightmargin\leftmargin
1495 \parsep\z@ \@plus\p@}%
1496 \item\relax}{\endlist}
```

14.4.6 quote 環境

`quote` `quote` 環境は、段落がインデントされないことを除き、`quotation` 環境と同じです。

```
1497 \newenvironment{quote}
1498   {\list{}{\rightmargin\leftmargin}%
1499     \item\relax}{\endlist}
```

14.5 フロート

`ltfloat.dtx` では、フロートオブジェクトを操作するためのツールしか定義していません。タイプが `TYPE` のフロートオブジェクトを扱うマクロを定義するには、次の変数が必要です。

`\fps@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートを置くデフォルトの位置です。

`\ftype@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートの番号です。各 `TYPE` には、一意な、2 の倍数の `TYPE` 番号を割り当てます。たとえば、図が番号 1 ならば、表は 2 です。次のタイプは 4 となります。

`\ext@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートの目次を出力するファイルの拡張子です。たとえば、`\ext@figure` は `'lot'` です。

`\fnum@TYPE` キャプション用の図番号を生成するマクロです。たとえば、`\fnum@figure` は `'図 \thefigure'` を作ります。

14.5.1 figure 環境

ここでは、`figure` 環境を実装しています。

`\c@figure` 図番号です。

```
\thefigure 1500 <article>\newcounter{figure}
1501 <report | book>\newcounter{figure}[chapter]
1502 <*tate>
1503 <article>\renewcommand{\thefigure}{\rensuji{\@arabic\c@figure}}
1504 <*report | book>
1505 \renewcommand{\thefigure}{%
1506   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{}\cdot\fi\rensuji{\@arabic\c@figure}}
1507 </report | book>
1508 </tate>
1509 <*yoko>
1510 <article>\renewcommand{\thefigure}{\@arabic\c@figure}
1511 <*report | book>
1512 \renewcommand{\thefigure}{%
1513   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi\@arabic\c@figure}
1514 </report | book>
1515 </yoko>
```

`\fps@figure` フロートオブジェクトタイプ “figure” のためのパラメータです。

```

\ftype@figure 1516 \def\fps@figure{tbp}
\ext@figure 1517 \def\ftype@figure{1}
1518 \def\ext@figure{lof}
\fnun@figure 1519 \tate\def\fnun@figure{\figurename\thefigure}
1520 \yoko\def\fnun@figure{\figurename~\thefigure}

```

`figure` *形式は 2 段抜きのフロートとなります。

```

figure* 1521 \newenvironment{figure}
1522         {\@float{figure}}
1523         {\end@float}
1524 \newenvironment{figure*}
1525         {\@dblfloat{figure}}
1526         {\end@dblfloat}

```

14.5.2 table 環境

ここでは、table 環境を実装しています。

`\c@table` 表番号です。

```

\thetable 1527 \article\newcounter{table}
1528 \report|book\newcounter{table}[chapter]
1529 \*tate
1530 \article\renewcommand{\thetable}{\rensujif\@arabic\c@table}}
1531 \*report|book
1532 \renewcommand{\thetable}{%
1533   \ifnum\c@chapter>z\thechapter}\fi\rensujif\@arabic\c@table}}
1534 \report|book
1535 \tate
1536 \*yoko
1537 \article\renewcommand{\thetable}{\@arabic\c@table}
1538 \*report|book
1539 \renewcommand{\thetable}{%
1540   \ifnum\c@chapter>z\thechapter.\fi\@arabic\c@table}
1541 \report|book
1542 \yoko

```

`\fps@table` フロートオブジェクトタイプ “table” のためのパラメータです。

```

\ftype@table 1543 \def\fps@table{tbp}
1544 \def\ftype@table{2}
\ext@table 1545 \def\ext@table{lot}
\fnun@table 1546 \tate\def\fnun@table{\tablename\thetable}
1547 \yoko\def\fnun@table{\tablename~\thetable}

```

`table` *形式は 2 段抜きのフロートとなります。

```

table* 1548 \newenvironment{table}
1549         {\@float{table}}

```

```

1550             {\end@float}
1551 \newenvironment{table*}
1552             {\@dblfloat{table}}
1553             {\end@dblfloat}

```

14.6 キャプション

`\makecaption` `\caption` コマンドは、キャプションを組み立てるために `\mkcaption` を呼出します。このコマンドは二つの引数を取ります。一つは、 $\langle number \rangle$ で、フロートオブジェクトの番号です。もう一つは、 $\langle text \rangle$ でキャプション文字列です。 $\langle number \rangle$ には通常、‘図 3.2’ のような文字列が入っています。このマクロは、`\parbox` の中で呼び出されます。書体は `\normalsize` です。

`\abovecaptionskip` これらの長さはキャプションの前後に挿入されるスペースです。

```

\belowcaptionskip 1554 \newlength\abovecaptionskip
1555 \newlength\belowcaptionskip
1556 \setlength\abovecaptionskip{10\p@}
1557 \setlength\belowcaptionskip{0\p@}

```

キャプション内で複数の段落を作成することができるように、このマクロは `\long` で定義をします。

```

1558 \long\def\makecaption#1#2{%
1559   \vskip\abovecaptionskip
1560   \iftdir\sbox\@tempboxa{#1\hskip1zw#2}%
1561   \else\sbox\@tempboxa{#1: #2}%
1562   \fi
1563   \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
1564     \iftdir #1\hskip1zw#2\relax\par
1565     \else #1: #2\relax\par\fi
1566   \else
1567     \global \@minipagefalse
1568     \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1569   \fi
1570   \vskip\belowcaptionskip}

```

14.7 コマンドパラメータの設定

14.7.1 array と tabular 環境

`\arraycolsep` array 環境のカラムは `2\arraycolsep` で分離されます。

```

1571 \setlength\arraycolsep{5\p@}

```

`\tabcolsep` tabular 環境のカラムは `2\tabcolsep` で分離されます。

```

1572 \setlength\tabcolsep{6\p@}

```

`\arrayrulewidth` `array` と `tabular` 環境内の罫線の幅です。

```
1573 \setlength\arrayrulewidth{.4\p@}
```

`\doublerulesep` `array` と `tabular` 環境内の罫線間を調整する空白です。

```
1574 \setlength\doublerulesep{2\p@}
```

14.7.2 tabbing 環境

`\tabbingsep` `\'` コマンドで置かれるスペースを制御します。

```
1575 \setlength\tabbingsep{\labelsep}
```

14.7.3 minipage 環境

`\@mpfootins` `minipage` にも脚注を付けることができます。`\skip\@mpfootins` は、通常の `\skip\footins` と同じような動作をします。

```
1576 \skip\@mpfootins = \skip\footins
```

14.7.4 framebox 環境

`\fboxsep` `\fboxsep` は、`\fbox` と `\framebox` での、テキストとボックスの間に入る空白です。

`\fboxrule` `\fboxrule` は `\fbox` と `\framebox` で作成される罫線の幅です。

```
1577 \setlength\fboxsep{3\p@}
```

```
1578 \setlength\fboxrule{.4\p@}
```

14.7.5 equation と eqnarray 環境

`\theequation` `equation` カウンタは、新しい章の開始でリセットされます。また、`equation` 番号には、章番号が付きます。

このコードは `\chapter` 定義の後、より正確には `chapter` カウンタの定義の後、でなくてはなりません。

```
1579 <article>\renewcommand{\theequation}{\@arabic\c@equation}
```

```
1580 <*report | book>
```

```
1581 \@addtoreset{equation}{chapter}
```

```
1582 \renewcommand{\theequation}{%
```

```
1583   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi \@arabic\c@equation}
```

```
1584 </report | book>
```

15 フォントコマンド

`disablejfam` オプションが指定されていない場合には、以下の設定がなされます。

まず、数式内に日本語を直接、記述するために数式記号用文字に“JY2/mc/m/n”を登録します。数式バージョンが `bold` の場合は、“JY2/gt/m/n”を用います。これ

らは、`\mathmc`、`\mathgt` として登録されます。また、日本語数式ファミリーとして `\symmincho` がこの段階で設定されます。`mathrmmc` オプションが指定されていた場合には、これに引き続き `\mathrm` と `\mathbf` を和欧文両対応にするための作業がなされます。この際、他のマクロとの衝突を避けるため `\AtBeginDocument` を用いて展開順序を遅らせる必要があります。

`disablejfam` オプションが指定されていた場合には、`\mathmc` と `\mathgt` に対してエラーを出すだけのダミーの定義を与える設定のみが行われます。

変更

p_{La}T_EX 2.09 compatibility mode では和文数式フォント fam が 2 重定義されていたので、その部分を変更しました。

```

1585 \if@enablejfam
1586   \if@compatibility\else
1587     \DeclareSymbolFont{mincho}{JY2}{mc}{m}{n}
1588     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
1589     \SetSymbolFont{mincho}{bold}{JY2}{gt}{m}{n}
1590     \jfam\symmincho
1591     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{JY2}{gt}{m}{n}
1592   \fi
1593   \if@mathrmmc
1594     \AtBeginDocument{%
1595       \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}
1596       \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathgt}
1597     }%
1598   \fi
1599 \else
1600   \DeclareRobustCommand{\mathmc}{%
1601     \@latex@error{Command \noexpand\mathmc invalid with\space
1602       'disablejfam' class option.}\@eha
1603   }
1604   \DeclareRobustCommand{\mathgt}{%
1605     \@latex@error{Command \noexpand\mathgt invalid with\space
1606       'disablejfam' class option.}\@eha
1607   }
1608 \fi

```

ここでは L^AT_EX 2.09 で一般的に使われていたコマンドを定義しています。これらのコマンドはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のために提供をしますが、できるだけ `\text...` と `\math...` を使うようにしてください。

`\mc` これらのコマンドはフォントファミリーを変更します。互換モードの同名コマンドと
`\gt` 異なり、すべてのコマンドがデフォルトフォントにリセットしてから、対応する属
`\rm` 性を変更することに注意してください。
`\sf` 1609 \DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
`\tt`

```

1610 \DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathgt}
1611 \DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
1612 \DeclareOldFontCommand{\sf}{\normalfont\sffamily}{\mathsf}
1613 \DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}

```

`\bf` このコマンドはボールド書体にします。ノーマル書体に変更するには、`\mdseries` と指定をします。

```

1614 \DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mathbf}

```

`\it` これらのコマンドはフォントシェイプを切替えます。スラント体とスモールキャップ
`\sl` プの数式アルファベットはありませんので、数式モードでは何もしませんが、警告
`\sc` メッセージを出力します。`\upshape` コマンドで通常のシェイプにすることができ
ます。

```

1615 \DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit}
1616 \DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\@nomath\sl}
1617 \DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}

```

`\cal` これらのコマンドは数式モードでだけ使うことができます。数式モード以外では何
`\mit` もしません。現在の NFSS は、これらのコマンドが警告を生成するように定義して
いますので、‘手ずから’定義する必要があります。

```

1618 \DeclareRobustCommand*\cal{\@fontswitch\relax\mathcal}
1619 \DeclareRobustCommand*\mit{\@fontswitch\relax\mathnormal}

```

16 相互参照

16.1 目次

`\section` コマンドは、`.toc` ファイルに、次のような行を出力します。

```
\contentsline{section}{\langle title \rangle}{\langle page \rangle}
```

`\langle title \rangle` には項目が、`\langle page \rangle` にはページ番号が入ります。`\section` に見出し番号
が付く場合は、`\langle title \rangle` は、`\numberline{\langle num \rangle}{\langle heading \rangle}` となります。`\langle num \rangle` は
`\thesection` コマンドで生成された見出し番号です。`\langle heading \rangle` は見出し文字列で
す。この他の見出しコマンドも同様です。

figure 環境での `\caption` コマンドは、`.lof` ファイルに、次のような行を出力し
ます。

```
\contentsline{figure}{\numberline{\langle num \rangle}{\langle caption \rangle}}{\langle page \rangle}
```

`\langle num \rangle` は、`\thefigure` コマンドで生成された図番号です。`\langle caption \rangle` は、キャプ
ション文字列です。table 環境も同様です。

`\contentsline{\langle name \rangle}` コマンドは、`\l@{\langle name \rangle}` に展開されます。したがって、
目次の体裁を記述するには、`\l@chapter`, `\l@section` などを定義します。図目次

のためには `\l@figure` です。これらの多くのコマンドは `\@dottedtocline` コマンドで定義されています。このコマンドは次のような書式となっています。

`\@dottedtocline{<level>}{<indent>}{<numwidth>}{<title>}{<page>}`

`<level>` “`<level> <= tocdepth`” のときにだけ、生成されます。`\chapter` はレベル 0、`\section` はレベル 1、... です。

`<indent>` 一番外側からの左マージンです。

`<numwidth>` 見出し番号 (`\numberline` コマンドの `<num>`) が入るボックスの幅です。

`\c@tocdepth` `tocdepth` は、目次ページに出力をする見出しレベルです。

```
1620 <article>\setcounter{tocdepth}{3}
1621 <!article>\setcounter{tocdepth}{2}
```

また、目次を生成するために次のパラメータも使います。

`\@pnumwidth` ページ番号の入るボックスの幅です。

```
1622 \newcommand{\@pnumwidth}{1.55em}
```

`\@tocmarg` 複数行にわたる場合の右マージンです。

```
1623 \newcommand{\@tocmarg}{2.55em}
```

`\@dotsep` ドットの間隔 (μ 単位) です。2 や 1.7 のように指定をします。

```
1624 \newcommand{\@dotsep}{4.5}
```

`\toclineskip` この長さ変数は、目次項目の間に入るスペースの長さです。デフォルトはゼロとなっています。縦組のとき、スペースを少し広げます。

```
1625 \newdimen\toclineskip
1626 <yoko>\setlength\toclineskip{\z@}
1627 <tate>\setlength\toclineskip{2\p@}
```

`\numberline` `\numberline` マクロの定義を示します。オリジナルの定義では、ボックスの幅を `\@lnumwidth` `\@tempdima` にしていますが、この変数はいろいろな箇所で使われますので、期待した値が入らない場合があります。

たとえば、 $\mathrm{p\LaTeX\ 2_{\epsilon}}$ での `\selectfont` は、和欧文のベースラインを調整するために `\@tempdima` 変数を用いています。そのため、`\l@...` マクロの中でフォントを切替えると、`\numberline` マクロのボックスの幅が、ベースラインを調整するときに計算した値になってしまいます。

フォント選択コマンドの後、あるいは `\numberline` マクロの中でフォントを切替えてもよいのですが、一時変数を意識したくないので、見出し番号の入るボック

スを `\@lnumwidth` 変数を用いて組み立てるように `\numberline` マクロを再定義します。

```
1628 \newdimen\@lnumwidth
1629 \def\numberline#1{\hb@xt@\@lnumwidth{#1\hfil}}
```

`\@dottedtocline` 目次の各行間に `\toclineskip` を入れるように変更します。このマクロは `ltsect.dtx` で定義されています。

```
1630 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{%
1631   \ifnum #1>\c@tocdepth \else
1632     \vskip\toclineskip \@plus.2\p@
1633     {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
1634     \parindent #2\relax\@afterindenttrue
1635     \interlinepenalty\@M
1636     \leavevmode
1637     \@lnumwidth #3\relax
1638     \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
1639     {#4}\nobreak
1640     \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu.\mkern \@dotsep mu$}%
1641     \hfill\nobreak
1642     \hb@xt@\@pnumwidth{\hss\normalfont \normalcolor #5}%
1643     \par}%
1644   \fi}
```

`\addcontentsline` ページ番号を `\rensuji` で囲むように変更します。横組のときにも '`\rensuji`' コマンドが出力されますが、このコマンドによる影響はありません。

このマクロは `ltsect.dtx` で定義されています。

```
1645 \def\addcontentsline#1#2#3{%
1646   \protected@write\@auxout
1647     {\let\label\@gobble \let\index\@gobble \let\glossary\@gobble
1648   \tate)\@temptokena{\rensuji{\thepage}}}%
1649   \yoko)\@temptokena{\thepage}}}%
1650   {\string\@writefile{#1}%
1651     {\protect\contentsline{#2}{#3}{\the\@temptokena}}}%
1652 }
```

16.1.1 本文目次

`\tableofcontents` 目次を生成します。

```
1653 \newcommand{\tableofcontents}{%
1654   \if*report\book
1655     \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1656     \else\@restonecolfalse\fi
1657   \ifreport\book
1658     \section*{\contentsname
1659   \ifarticle
     \chapter*{\contentsname
```

`\tableofcontents` では、`\@mkboth` は heading の中に入れてあります。ほかの命令 (`\listoffigures` など) については、`\@mkboth` は heading の外に出してあります。これは L^AT_EX の `classes.dtx` に合わせています。

```
1660 \mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
1661 }\starttoc{toc}%
1662 <report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1663 }
```

`\l@part` part レベルの目次です。

```
1664 \newcommand*{\l@part}[2]{%
1665 \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
1666 <article> \addpenalty{\@secpenalty}%
1667 <!article> \addpenalty{-\@highpenalty}%
1668 \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
1669 \begingroup
1670 \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth
1671 \parfillskip-\@pnumwidth
1672 {\leavevmode\large\bfseries
1673 \setlength{\@lnumwidth}{4zw}%
1674 #1\hfil\nobreak
1675 \hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}}\par
1676 \nobreak
1677 <article> \if@compatibility
1678 \global\@nobreaktrue
1679 \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}}%
1680 <article> \fi
1681 \endgroup
1682 \fi}
```

`\l@chapter` chapter レベルの目次です。

```
1683 <*report | book>
1684 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
1685 \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
1686 \addpenalty{-\@highpenalty}%
1687 \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
1688 \begingroup
1689 \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
1690 \leavevmode\bfseries
1691 \setlength{\@lnumwidth}{4zw}%
1692 \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
1693 #1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}\par
1694 \penalty\@highpenalty
1695 \endgroup
1696 \fi}
1697 </report | book>
```

`\l@section` section レベルの目次です。

```

1698 <*article>
1699 \newcommand*{\l@section}[2]{%
1700   \ifnum \c@tocdepth >\z@
1701     \addpenalty{\@secpenalty}%
1702     \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
1703     \begingroup
1704       \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
1705       \leavevmode\bfseries
1706       \setlength\@lnumwidth{1.5em}%
1707       \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
1708       #1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}\par
1709     \endgroup
1710   \fi}
1711 </article>

1712 <*report | book>
1713 <tate>\newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
1714 <yoko>\newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
1715 </report | book>

```

\l@section 下位レベルの目次項目の体裁です。

```

\l@subsubsection 1716 <tate>
\l@paragraph 1717 <*article>
\l@subparagraph 1718 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{1zw}{4zw}}
1719 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2zw}{6zw}}
1720 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{3zw}{8zw}}
1721 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4zw}{9zw}}
1722 </article>
1723 <*report | book>
1724 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{2zw}{6zw}}
1725 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3zw}{8zw}}
1726 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{4zw}{9zw}}
1727 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{5zw}{10zw}}
1728 </report | book>
1729 </tate>
1730 <*yoko>
1731 <*article>
1732 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
1733 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
1734 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{7.0em}{4.1em}}
1735 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
1736 </article>
1737 <*report | book>
1738 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{3.8em}{3.2em}}
1739 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
1740 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
1741 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
1742 </report | book>
1743 </yoko>

```

16.1.2 図目次と表目次

`\listoffigures` 図の一覧を作成します。

```
1744 \newcommand{\listoffigures}{%
1745   <*report | book>
1746   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1747   \else\@restonecolfalse\fi
1748   \chapter*{\listfigurename}%
1749   </report | book>
1750   <article> \section*{\listfigurename}%
1751   \mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
1752   \starttoc{lof}%
1753   <report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1754 }
```

`\l@figure` 図目次の体裁です。

```
1755 <tate> \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
1756 <yoko> \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
```

`\listoftables` 表の一覧を作成します。

```
1757 \newcommand{\listoftables}{%
1758   <*report | book>
1759   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1760   \else\@restonecolfalse\fi
1761   \chapter*{\listtablename}%
1762   </report | book>
1763   <article> \section*{\listtablename}%
1764   \mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
1765   \starttoc{lot}%
1766   <report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1767 }
```

`\l@table` 表目次の体裁は、図目次と同じにします。

```
1768 \let\l@table\l@figure
```

16.2 参考文献

`\bibindent` オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。

```
1769 \newdimen\bibindent
1770 \setlength\bibindent{1.5em}
```

`\newblock` `\newblock` のデフォルト定義は、小さなスペースを生成します。

```
1771 \newcommand{\newblock}{\hspace{.11em}\@plus.33em\@minus.07em}
```

`thebibliography` 参考文献や関連図書のリストを作成します。

```
1772 \newenvironment{thebibliography}[1]
1773 <article>{\section*{\refname}\mkboth{\refname}{\refname}%
```

```

1774 <report | book>{\chapter*{\bibname}\mkboth{\bibname}{\bibname}}%
1775 \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
1776 {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
1777 \leftmargin\labelwidth
1778 \advance\leftmargin\labelsep
1779 \@openbib@code
1780 \usecounter{enumiv}%
1781 \let\p@enumiv\@empty
1782 \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
1783 \sloppy

1784 \clubpenalty4000
1785 \@clubpenalty\clubpenalty
1786 \widowpenalty4000%
1787 \sfcode'\.\@m}
1788 {\def\@noitemerr
1789 {\@latex@warning{Empty 'thebibliography' environment}}}%
1790 \endlist}

```

`\@openbib@code` `\@openbib@code` のデフォルト定義は何もしません。この定義は、`openbib` オプションによって変更されます。

```
1791 \let\@openbib@code\@empty
```

`\@biblabel` The label for a `\bibitem[...]` command is produced by this macro. The default from `latex.dtx` is used.

```
1792 % \renewcommand*{\@biblabel}[1]{[#1]\hfill}
```

`\@cite` The output of the `\cite` command is produced by this macro. The default from `ltbibl.dtx` is used.

```
1793 % \renewcommand*{\@cite}[1]{[#1]}
```

16.3 索引

`theindex` 2 段組の索引を作成します。索引の先頭のページのスタイルは `jpl@in` とします。したがって、`headings` と `bothstyle` に適した位置に出力されます。

```

1794 \newenvironment{theindex}
1795 {\if@twocolumn\@restonecolfalse\else\@restonecoltrue\fi
1796 <article> \twocolumn[\section*{\indexname}]%
1797 <report | book> \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}]%
1798 \mkboth{\indexname}{\indexname}%
1799 \thispagestyle{jpl@in}\parindent\z@

```

パラメータ `\columnseprule` と `\columnsep` の変更は、`\twocolumn` が実行された後でなければなりません。そうしないと、索引の前のページにも影響してしまうためです。

```
1800 \parskip\z@ \@plus .3\p@\relax
```



```

1801 \columnseprule\z@ \columnsep 35\p@
1802 \let\item\@idxitem}
1803 {\if@restonecol\onecolumn\else\clearpage\fi}

```

`\@idxitem` 索引項目の字下げ幅です。`\@idxitem` は `\item` の項目の字下げ幅です。

```

\subitem 1804 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 40\p@}
1805 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{20\p@}}
\subsubitem 1806 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{30\p@}}

```

`\indexspace` 索引の“文字”見出しの前に入るスペースです。

```

1807 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@ \@plus5\p@ \@minus3\p@\relax}

```

16.4 脚注

`\footnoterule` 本文と脚注の間に引かれる罫線です。

```

1808 \renewcommand{\footnoterule}{%
1809 \kern-3\p@
1810 \hrule\@width.4\columnwidth
1811 \kern2.6\p@}

```

`\c@footnote` report と book クラスでは、chapter レベルでリセットされます。

```

1812 \<article>\@addtoreset{footnote}{chapter}

```

`\@makefnmark` このマクロにしたがって脚注が組まれます。

`\@makefnmark` は脚注記号を組み立てるマクロです。

```

1813 \<*tate>
1814 \newcommand\@makefnmark[1]{\parindent 1zw
1815 \noindent\hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}#1}
1816 \</tate>
1817 \<*yoko>
1818 \newcommand\@makefnmark[1]{\parindent 1em
1819 \noindent\hb@xt@ 1.8em{\hss\@makefnmark}#1}
1820 \</yoko>

```

17 今日の日付

組版時における現在の日付を出力します。

`\if 西暦` `\today` コマンドの‘年’を、西暦か和暦のどちらで出力するかを指定するコマンド
`\ 西暦` です。

```

\ 和暦 1821 \newif\if 西暦 \ 西暦 false
1822 \def\ 西暦{\ 西暦 true}
1823 \def\ 和暦{\ 西暦 false}

```

`\heisei` `\today` コマンドを `\rightmark` で指定したとき、`\rightmark` を出力する部分で和暦のための計算ができないので、クラスファイルを読み込む時点で計算しておきます。

```
1824 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
```

`\today` 縦組の場合は、漢数字で出力します。

```
1825 \def\today{%
1826   \iftdir
1827     \if 西暦
1828       \kansuji\number\year 年
1829       \kansuji\number\month 月
1830       \kansuji\number\day 日
1831     \else
1832       平成 \ifnum\heisei=1 元年 \else\kansuji\number\heisei 年 \fi
1833       \kansuji\number\month 月
1834       \kansuji\number\day 日
1835     \fi
1836   \else
1837     \if 西暦
1838       \number\year~年
1839       \number\month~月
1840       \number\day~日
1841     \else
1842       平成 \ifnum\heisei=1 元年 \else\number\heisei~年 \fi
1843       \number\month~月
1844       \number\day~日
1845     \fi
1846   \fi}}
```

18 初期設定

```
\prepartname
\postpartname 1847 \newcommand{\prepartname}{第}
\prechaptername 1848 \newcommand{\postpartname}{部}
\postchaptername 1849 <report | book>\newcommand{\prechaptername}{第}
1850 <report | book>\newcommand{\postchaptername}{章}
```

```
\contentsname
\listfigurename 1851 \newcommand{\contentsname}{目 次}
\listtablename 1852 \newcommand{\listfigurename}{図 目 次}
1853 \newcommand{\listtablename}{表 目 次}
```

```
\refname
\bibname 1854 <article>\newcommand{\refname}{参考文献}
\indexname 1855 <report | book>\newcommand{\bibname}{関連図書}
1856 \newcommand{\indexname}{索 引}
```

```

\figurename
\tablename 1857 \newcommand{\figurename}{図}
            1858 \newcommand{\tablename}{表}

\appendixname
\abstractname 1859 \newcommand{\appendixname}{付 録}
              1860 <article | report> \newcommand{\abstractname}{概 要}

              1861 <book> \pagestyle{headings}
              1862 <!book> \pagestyle{plain}
              1863 \pagenumbering{arabic}
              1864 \raggedbottom
              1865 \if@twocolumn
              1866   \twocolumn
              1867   \sloppy
              1868 \else
              1869   \onecolumn
              1870 \fi

```

\@mparswitch は傍注を左右（縦組では上下）どちらのマージンに出力するかの指定です。偽の場合、傍注は一方の側にしか出力されません。このスイッチを真とすると、とくに縦組の場合、奇数ページでは本文の上に、偶数ページでは本文の下に傍注が出力されますので、おかしいことになります。

また、縦組のときには、傍注を本文の下に出すようにしています。\\reversemarginpar とすると本文の上側に出力されます。ただし、二段組の場合は、つねに隣接するテキスト側のマージンに出力されます。

```

1871 <*tate>
1872 \normalmarginpar
1873 \@mparswitchfalse
1874 </tate>
1875 <*yoko>
1876 \if@twoside
1877   \@mparswitchtrue
1878 \else
1879   \@mparswitchfalse
1880 \fi
1881 </yoko>
1882 </article | report | book>

```

変更履歴

1992/02/04 ujclasses.dtx v1.1d	1995/08/31 uplfonts.dtx v1.0c
General: disablejfam の判断を間違えてたのを修正	\adjustbaseline: 欧文書体の基準を ‘M’ から ‘/’ に変更
57	25
1995/03/28 uplfonts.dtx v1.1b	1995/09/12 uplfonts.dtx v1.1c
\ktenc@list: リストの初期値を変更	General: \xkanjiskip のデフォルト値
9	39
\notffam@list: リストの初期値を変更	1995/09/26 ujclasses.dtx v1.0a
10	General: Change b4paper width/height 352x250 to 364x257
1995/04/12 uplfonts.dtx v1.1b	54
\textunderscore: 下線マクロを追加	Change b5paper width/height 250x176 to 257x182
32	54
1995/04/26 uplfonts.dtx v1.1b	1995/11/09 uplfonts.dtx v1.2
\selectfont: ベースラインの調整をサイズ変更時に行なうようにした	\DeclareFixedFont:
23	\DeclareFixedFont の日本語化
1995/05/10 uplfonts.dtx v1.1b	17
\fontfamily: \notkfam@list に、エンコードごとに登録されてしまふのを修正した。欧文についても同様。	1995/11/21 uplfonts.dtx v1.2
29	\@notffam: \fontfamily コマンド用のフラグ追加
\ktenc@list: リスト内の空白を削除	\adjustbaseline: 縦組時のみ調整するようにした
9	25
\notffam@list: リスト内の空白を削除	\fontfamily: 代用フォントが使われないバグを修正
10	28
1995/05/16 uplvers.dtx v1.0	1995/11/22 uplfonts.dtx v1.2
General: pL ^A T _E X 2 _ε 用に ltvers.dtx を修正	\selectfont: エラーフォントに対応した
1	22
1995/08/22 uplfonts.dtx v1.0c	1995/11/24 ujclasses.dtx v1.1d
\@kenc@update: 縦横用エンコードの保存	\marginparwidth:
27	typo: \marginmarwidth to \marginparwidth
\selectfont: 縦横両方のフォントを切り替えるようにした	72
22	1995/11/24 uplfonts.dtx v1.2
1995/08/23 ujclasses.dtx v1.0d	General: it, sl, sc の宣言を外した
\ps@bothstyle: 横組の evenfoot が中央揃えになっていたのを修正	40
81	1995/12/25 ujclasses.dtx v1.0c
\ps@myheadings: 横組モードの左右が逆であったのを修正	General: Macro \if@openbib removed
82	53
1995/08/24 uplfonts.dtx v1.1c	openbib オプションを再実装
\strut: “\centerling\strut” の幅がゼロになってしまうのを修正	57
11	1995/12/25 ujclasses.dtx v1.1c
1995/08/30 ujclasses.dtx v1.0a	\maxdepth: \@maxdepth の設定を外した
General: 柱の書体がノンブルに影響するバグの修正	64
79	1995/12/28 ujclasses.dtx v1.0c
1995/08/30 uplvers.dtx v1.0a	\listoftables: fix the \listoftable typo.
General: L ^A T _E X <1995/06/01>版用に修正	114
1	1996/01/31 uplvers.dtx v1.0b
	General: L ^A T _E X <1995/12/01>版用に修正
	1

1996/02/29 ujclasses.dtx v1.0d		<code>\columnseprule: \columnsep:</code>	
General: article と report のデフォルトを <i>plain</i> に修正	118	10pt to 3\Cwd or 2\Cwd.	62
<code>\ps@jpl@in: jpl@in</code> の初期値を定義	79	<code>\marginparwidth:</code>	
1996/03/05 ujclasses.dtx v1.0d		<code>\oddsidemargin,</code>	
<code>\ps@bothstyle:</code> 横組で偶数ページと奇数ページの設定が逆なのを修正	81	<code>\evensidemargin: 0pt if specified papersize at</code>	
1996/03/06 uplfonts.dtx v1.1c		<code>\documentstyle</code> option.	72
<code>\notffam@list: \notkfam@list</code> と <code>\notffam@list</code> の初期値を変更	10	1997/01/25 ujclasses.dtx v1.1a	
1996/03/14 ujclasses.dtx v1.0e		<code>\if@stysize: Add \if@stysize.</code>	53
<code>description: \topskip</code> や <code>\parkip</code> などの値を縦組時のみに設定するようにした	103	<code>\textheight: Add paper option with compatibility mode.</code>	67
<code>itemize: 縦組時のみに設定するようにした</code>	102	<code>\textwidth: Add paper option with compatibility mode.</code>	64
1996/03/21 ujclasses.dtx v1.0e		1997/01/25 uplfonts.dtx v1.1	
General: <code>\usepackage to \RequirePackage</code>	58	<code>\ktenc@list: Add TS1 encoding to the starting member of</code>	
1996/07/10 ujclasses.dtx v1.0f		<code>\fenc@list.</code>	9
General: 面付けオプションを追加	55	1997/01/28 ujclasses.dtx v1.1a	
1996/09/03 ujclasses.dtx v1.0g		<code>\labelitemiv: Bug fix:</code>	
General: Add to <code>\@bannertoken.</code>	55	<code>\labelitemii.</code>	102
1996/12/17 ujclasses.dtx v1.0h		1997/01/28 ujclasses.dtx v1.1b	
<code>\</code> 和暦: Typo:和歴 to 和暦	116	<code>\if@enablejfam:</code>	
1997/01/11 uplvers.dtx v1.0c		Add <code>\if@enablejfam</code>	53
General: \LaTeX <1996/06/01>版用に修正	1	1997/01/28 uplfonts.dtx v1.3b	
1997/01/15 ujclasses.dtx v1.1		<code>\textgt: \textmc, \textgt</code> の動作修正	38
<code>\backmatter: \frontmatter, \mainmatter, \backmatter</code> を \LaTeX の定義に修正	90	1997/01/29 uplfonts.dtx v1.3b	
<code>\part: \part</code> を \LaTeX の定義に修正	93	General: フォント定義ファイルのサイズ指定の調整	40
1997/01/23 ujclasses.dtx v1.1a		1997/01/30 uplfonts.dtx v1.0	
General: 日付出力オプション	55	<code>\reDeclareMathAlphabet:</code>	
<code>thebibliography:</code>		<code>\reDeclareMathAlphabet</code> を追加。ありがとう、ymt さん。	18
\LaTeX <1996/12/01>に合わせて修正	115	1997/01/30 uplfonts.dtx v1.3b	
1997/01/23 uplvers.dtx v1.0d		General: 数式用フォントの宣言をクラスファイルに移動した	38
General: \LaTeX <1996/12/01>版用に修正	1	1997/02/05 ujclasses.dtx v1.1d	
1997/01/24 uplfonts.dtx v1.3		General: 開始ページがおかしくなるのを修正	56
General: Rename font definition filename.	37	<code>\topmargin: \tompargin</code> を半分にするのはアキ領域の計算後	70
Rename provided font definition filename.	40	1997/02/12 ujclasses.dtx v1.1d	
1997/01/25 ujclasses.dtx v1.0g		<code>\maketitle:</code> 縦組クラスの表紙を縦書きにするようにした	86
General: Insert <code>\hbox</code> , to switch tate-mode.	56	1997/02/14 ujclasses.dtx v1.1d	
		<code>\thefigure: \ifnum</code> 文の構文エラーを訂正。	104
		1997/03/11 uplfonts.dtx v1.3b	
		General: すべてのサイズをロード可能にした	40

1997/04/08 ujclasses.dtx v1.1e	タイルにすると、コンパイルエ	
\topmargin: 横組クラスでの調整量	ラーになるのを修正	82
を-2.4 インチから-2.0 インチに		
した。	1998/02/03 ujclasses.dtx v1.1j	
70	\topmargin: 互換モード時の a5p の	
1997/04/08 uplfonts.dtx v1.3c	トップマージンを 0.7in 増加 . .	70
\DeclareTateKanjiEncoding@: 和	1998/02/17 uplvers.dtx v1.0f	
文エンコード宣言コマンドを縦組	General: L ^A T _E X <1997/12/01>版用	
用と横組用で分けるようにした。 14	に修正	1
1997/04/09 uplfonts.dtx v1.3c	1998/03/23 ujclasses.dtx v1.1k	
\DeclareFixedFont: 縦横エンコー	\@spart: report と book クラスで番	
ド・リストの分離による拡張 . .	号を付けない見出しのペナルティ	
17	が\MQだったのを\QMに修正 . .	94
1997/04/24 uplfonts.dtx v1.3c	1998/04/07 ujclasses.dtx v1.1m	
\fontfamily: フォント定義ファイ	\heisei: \today の計算手順を変更	117
ル名を小文字に変換してから探	1998/08/10 uplfonts.dtx v1.3f	
すようにした。	\DeclareFixedFont: プリアンプ	
29	ル・コマンドにしてしまってい	
1997/06/25 uplfonts.dtx v1.3d	たのを解除	17
\eminnershape: \em,\emph で和文	1998/09/01 uplvers.dtx v1.0g	
を強調書体に	General: L ^A T _E X <1998/06/01>版用	
38	に修正	1
1997/07/02 uplvers.dtx v1.0e	1998/10/13 ujclasses.dtx v1.1n	
General: L ^A T _E X <1997/06/01>版用	General: 動作していなかったのを修	
に修正	正。ありがとう、刀祢さん . . .	55
1	\thetable: report, book クラスで	
1997/07/08 ujclasses.dtx v1.1f	chapter カウンタを考慮していな	
General: 縦組時にベースラインがお	かったのを修正。ありがとう、	
かしくなるのを修正	平川@慶應大さん。	105
56	1998/12/24 ujclasses.dtx v1.1o	
1997/07/10 uplfonts.dtx v1.3e	\@makechapterhead: secnumdepth	
\fontfamily: fd ファイル名の小文	カウンタを -1 以下にすると、見	
字化が効いていなかったのを修正	出し文字列も消えてしまうのを	
29	修正	96
fd ファイル名の小文字化が効いて	1999/04/05 uplfonts.dtx v1.3g	
いなかったのを修正。ありがと	\process@table: plpatch.ltx の内	
う、大岩さん	容を反映。ありがとう、山本さ	
29	ん。	31
1997/08/25 ujclasses.dtx v1.1g	1999/04/05 uplvers.dtx v1.0h	
\ps@bothstyle: 片面印刷のとき、	General: L ^A T _E X <1998/12/01>版用	
section レベルが出力されないの	に修正	1
を修正	1999/05/18 ujclasses.dtx v1.1q	
82	enumerate: 縦組時のみに設定するよ	
\ps@headings: 片面印刷のとき、	うにした	101
section レベルが出力されないの	1999/08/09 ujclasses.dtx v1.1r	
を修正	\topmargin: \if@stysize フラグに	
81	限らず半分にする	70
1997/09/03 ujclasses.dtx v1.1f	1999/08/09 uplfonts.dtx v1.3h	
\textheight: landscape での指定を	\strut: 縦組のとき、幅のあるボッ	
追加	クスになってしまうのを修正 . .	11
67		
1997/09/03 ujclasses.dtx v1.1h		
General: landscape オプションを互		
換モードでも有効に		
55		
オプションの処理時に縦横の値を		
交換		
55		
\textwidth: landscape での指定を		
追加		
64		
1997/12/12 ujclasses.dtx v1.1i		
\ps@bothstyle: report, book クラ		
スで片面印刷時に、bothstyle ス		

1999/08/09 uplvers.dtx v1.0i	2004/06/14 uplfonts.dtx v1.3m
General: \LaTeX <1999/06/01>版用 に修正 1	$\backslash\@notffam: \fontfamily$ コマンド 内部フラグ変更 28
1999/1/6 ujclasses.dtx v1.1p	$\backslash\fontfamily: \fontfamily$ コマ ンド内部フラグ変更 28
$\backslash\marginparwidth: \oddsidemargin$ のポイントへの変換を後ろに . . 72	2004/08/10 uplfonts.dtx v1.3n
2000/02/29 uplvers.dtx v1.0j	$\backslash\@kenc@update: \text{和文エンコーディングの切り替えを有効化} 27$
General: \LaTeX <1999/12/01>版用 に修正 1	$\backslash\text{KanjiEncodingPair: 和文エンコーディングの切り替えを有効化} . . 23$
2000/07/13 uplfonts.dtx v1.3i	$\backslash\text{selectfont: 和文エンコーディングの切り替えを有効化} 22$
General: $\backslash\text{text}..$ コマンドの左側に $\backslash\text{xkanjiskip}$ が入らないのを修 正 (ありがとう、乙部@東大さ ん) 36	2004/08/10 uplvers.dtx v1.0m
2000/10/24 uplfonts.dtx v1.3j	General: \LaTeX <2003/12/01>版対 応確認 1
$\backslash\text{adjustbaseline: 文頭に鉤括弧などがあるときに余計なアキがでる問題に対処} 25$	2005/01/04 uplfonts.dtx v1.3o
2000/11/03 uplvers.dtx v1.0k	$\backslash\text{fontfamily: \fontfamily}$ 中のフ ラグ修正 28
General: \LaTeX <2000/06/01>版用 に修正 1	2006/01/04 uplfonts.dtx v1.3p
2001/05/10 uplfonts.dtx v1.3k	$\backslash\text{DeclareFontEncoding@:}$ $\backslash\text{DeclareFontEncoding@}$ 中で $\backslash\text{LastDeclaredEncoding}$ の再定 義が抜けていたので追加 13
$\backslash\text{adjustbaseline:}$ $\backslash\text{adjustbaseline}$ の調整量 (再 び ‘M’ を基準にした) 25	2006/06/27 ujclasses.dtx v1.6
2001/09/04 ujclasses.dtx v1.2	General: フォントコマンドを修正。 ありがとう、ymt さん。 108
$\backslash\@makechapterhead: \text{chapter}$ の 出力位置がアスタリスク形式と そうでないときと違うのを修正 (ありがとう、鈴木@津さん) . . 96	2006/06/27 uplfonts.dtx v1.4
$\backslash\@makeschapterhead: \text{chapter}$ の 出力位置がアスタリスク形式と そうでないときと違うのを修正 (ありがとう、鈴木@津さん) . . 96	$\backslash\text{reDeclareMathAlphabet:}$ $\backslash\text{reDeclareMathAlphabet}$ を修 正。ありがとう、ymt さん。 . . 18
2001/09/04 uplvers.dtx v1.0l	2006/11/10 uplfonts.dtx v1.5
General: \LaTeX <2001/06/01>版用 に修正 1	$\backslash\text{reDeclareMathAlphabet:}$ $\backslash\text{reDeclareMathAlphabet}$ を修 正。ありがとう、ymt さん。 . . 18
2001/10/04 ujclasses.dtx v1.3	2016/02/01 uplfonts.dtx v1.6
$\backslash\@dottedtocline: \text{第 5 引数の書体を \rmfamily から \normalfontに変更} 111$	$\backslash\text{eminnershapes: \LaTeX}$ <2015/01/01>での $\backslash\text{em}$ の定義変 更に対応。 $\backslash\text{eminnershapes}$ を追 加。 38
2002/04/05 uplfonts.dtx v1.3l	2016/02/01 uplvers.dtx v1.0s
$\backslash\text{adjustbaseline:}$ $\backslash\text{adjustbaseline}$ でフォントの 基準値が縦書き以外では設定さ れないのを修正 25	General: \LaTeX <2015/01/01>版用 に修正 1
2002/04/09 ujclasses.dtx v1.4	latexrelease 利用時に警告を出す ようにした 5
General: 縦組スタイルで $\backslash\text{flushbottom}$ しないようにし た 118	2016/02/03 uplvers.dtx v1.0t
	$\backslash\text{plIncludeInRelease:}$ $\backslash\text{plIncludeInRelease}$ と $\backslash\text{plEndIncludeInRelease}$ を新 設。 4

2016/04/01 uplfonts.dtx v1.6a	2016/06/19 uplvers.dtx v1.0x
\@text@composite: ベースライン補正量が 0 でないときに \AA など一部の合成文字がおかしくなることに対応するため再定義 . . . 34	\ppatch@level: パッチレベルを plvers.dtx で設定 1
\@text@composite@x: ベースライン補正量が 0 でないときに \AA など一部の合成文字がおかしくなることへの対応。 34	2016/06/26 uplfonts.dtx v1.6e
2016/04/17 uplvers.dtx v1.0u	\@text@composite@x: v1.6a 以降の修正で全てのアクセント付き文字でトラブルが相次いだため、いったんパッチを除去。 34
General: L ^A T _E X <2016/03/31>版対応確認 1	2016/06/29 uplvers.dtx v1.0y-u01
2016/04/30 uplfonts.dtx v1.6b-u00	General: uplatex.cfg の読み込みを追加 3
General: uptrace.sty の冒頭で tracefmt.sty を	2016/08/26 uplvers.dtx v1.0z-u01
\RequirePackageWithOptions	General: uplatex.cfg の読み込みを uplcore.ltx から
するようにした 7	uplatex.ltx へ移動 3
2016/05/07 uplvers.dtx v1.0v	2016/09/14 uplvers.dtx v1.1-u01
General: パッチファイルをロードするのをやめた。 2	\everyjob: 起動時のバナーを取得するコードを改良 3
\everyjob: 起動時の文字列を最新の L ^A T _E X に合わせた。 3	2016/11/12 ujclasses.dtx v1.7
2016/05/12 uplvers.dtx v1.0w	\@makefntext: Replaced all \hbox to by \hb@xt@ (sync with classes.dtx v1.3a) 116
\everyjob: 起動時の文字列に入れる L ^A T _E X のバージョンを元の L ^A T _E X のバナーから引き継ぐように改良 3	\footnoterule: use \@width (sync with classes.dtx v1.3a) 116
2016/05/12 uplvers.dtx v1.0w-u00	thebibliography: Moved
\everyjob: 起動時の文字列に入れる Babel のバージョンを元の L ^A T _E X のバナーから取得するコードを uplatex.ini から取り入れた 3	\@mkboth out of heading arg (sync with classes.dtx v1.4c) 114
2016/05/21 uplvers.dtx v1.0w-u01	theindex: \columnsep と \columnseprule の変更を後ろに移動 (sync with classes.dtx v1.4f) 115
\documentstyle: サポート外の L ^A T _E X 2.09 互換モードが使われた場合に明確なエラーを出すようにした。 1	\listoffigures: Moved \@mkboth out of heading arg (sync with classes.dtx v1.4c) 114
2016/06/06 uplfonts.dtx v1.6c	\listoftables: Moved \@mkboth out of heading arg (sync with classes.dtx v1.4c) 114
\@text@composite: v1.6a での誤った再定義を削除 (forum:1941) . 34	\maketitle: ドキュメントに反して \@maketitle が空になっていなかったのを修正 87
\@text@composite@x: v1.6a での修正でもなど全てのアクセント付き文字で周囲に \xkanjiskip が入らなくなっていたのを修正。 . 34	2016/11/16 ujclasses.dtx v1.7a
\g@tlastchart@: マクロ追加 . . . 33	\@dottedtocline: Added
\pltx@isletter: マクロ追加 . . . 33	\nobreak for latex/2343 (sync with ltsect.dtx v1.0z) 111
2016/06/19 uplfonts.dtx v1.6d	\@makechapterhead: replace
\pltx@isletter: アクセント付き文字をさらに修正 (forum:1951) . 33	\reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c) . 96
	\@makeschapterhead: replace
	\reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c) . 96

\@part: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	93	titlepage: book クラスで titlepage を必ず奇数ページに送るように 変更	85
\@spart: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	94	titlepage のページ番号を奇数なら ば 1 に、偶数ならば 0 にリセッ トするように変更	85
enumerate: Use \expandafter (sync with ltlists.dtx v1.0j) .	101	\p@thanks: 縦組クラスの所属表示の 番号を直立にした	86
\paragraph: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	97	\pltx@cleartoevenpage: \cleardoublepage の代用とな る命令群を追加	76
\part: Check @noskipsec switch and possibly force horizontal mode (sync with classes.dtx v1.4a)	92	2017/02/20 uplfonts.dtx v1.6f \set@fontsize: \ystrutbox を組み 立てるように	23
\section: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	97	\strut: \strutbox の代わりに \ystrutbox を使用	11
\subparagraph: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c) .	97	\strutbox: \strutbox を縦横両対 応に	11
\subsection: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	97	\ystrut: \ystrut を追加	12
\subsubsection: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c) .	97	\ystrutbox: \ystrutbox を追加 .	11
itemize: Use \expandafter (sync with ltlists.dtx v1.0j)	102	2017/02/20 uplvers.dtx v1.1a General: L ^A T _E X <2017/01/01>版対 応確認	1
2016/11/22 ujclasses.dtx v1.7b \backmatter: 補足ドキュメントを 追加	91	2017/03/05 ujclasses.dtx v1.7e General: トンボに表示するジョブ情 報の書式を変更	55
2016/12/18 ujclasses.dtx v1.7c \endpart: Only add empty page after part if twoside and openright (sync with classes.dtx v1.4b)	94	\backmatter: \frontmatter と \mainmatter を奇数ページに送 るように変更	91
\@schapter: 奇妙な article ガード とコードを削除してドキュメン トを追加	96	2017/03/07 uplfonts.dtx v1.6g \textunderscore: ベースライン補 正量を修正	32
2017/02/15 ujclasses.dtx v1.7d General: openleft オプション追加	56	2017/03/19 uplvers.dtx v1.1b \document@default@language: \document@default@language の定義を保証 (sync with ltfinal 2017/03/09 v2.0t)	4
\if@openleft: \if@openleft ス イッチ追加	53	\l@nohyphenation: \l@nohyphenation の定義を保 証 (sync with ltfinal 2017/03/09 v2.0t)	4
		2017/04/23 uplvers.dtx v1.1c General: L ^A T _E X <2017/04/15>版対 応確認	1

索引

イタリック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。

Symbols	
\#	c8
\\$	c9
\%	c10
\&	c11
\.	d1787
\<	b1001
\@enc@update	b551
\@end	a48, a60, b995
\@kenc@update	b563, <u>b572</u>
\@addtoreset	d1581, d1812
\@afterheading	
.....	d1192, d1218, d1260, d1279
\@afterindenttrue	d1163, d1244, d1634
\@Alph	d1314,
	d1315, d1323, d1324, d1408, d1414
\@alph	d1406, d1412
\@arabic	d1115, d1117, d1118,
	d1120, d1122, d1124, d1126,
	d1130, d1132, d1133, d1135,
	d1137, d1139, d1141, d1405,
	d1411, d1503, d1506, d1510,
	d1513, d1530, d1533, d1537,
	d1540, d1579, d1583, d1775, d1782
\@author	d942, d992, d1006, d1045, d1064
\@auxout	d1646
\@bannertoken	d70
\@beginparpenalty	d1076, <u>d1344</u>
\@biblabel	d1775, d1776, <u>d1792</u>
\@ccclvi	b840, b843, b844, b852
\@centercr	d1486
\@changed@cmd	b119
\@changed@kcmd	b153, b177, b573, b594
\@chapapp	d840, d864, d898, d923,
	<u>d1143</u> , d1250, d1252, d1270, d1321
\@chappos	d840, d864, d898, d923,
	<u>d1143</u> , d1250, d1252, d1270, d1322
\@chapter	d1245, <u>d1246</u>
\@cite	<u>d1793</u>
\@clubpenalty	d1785
\@current@cmd	b574
\@currname	a111, a118
\@date	d943, d995, d1007, d1046, d1067
\@dblfloat	d1525, d1552
\@dblfpbot	<u>d731</u>
\@dblfpsep	<u>d731</u>
\@dblfpstop	<u>d731</u>
\@defaultunits	b445, b447, b483, b485
\@depth	
	b458, b461, b464, b496, b499, b502
\@dotsep	<u>d1624</u> , d1640
\@dottedtocline	
	<u>d1630</u> , d1713, d1714, d1718,
	d1719, d1720, d1721, d1724,
	d1725, d1726, d1727, d1732,
	d1733, d1734, d1735, d1738,
	d1739, d1740, d1741, d1755, d1756
\@eha	b211, b230, b249, b399,
	b545, b557, b589, d1602, d1606
\@enablejfamfalse	d113
\@enablejfamtrue	d16
\@endparpenalty	d1079, <u>d1344</u>
\@endpart	d1211, d1225, <u>d1227</u>
\@enumctr	d1434, d1435, d1445
\@enumdepth	d1432, d1433, d1434, d1441
\@evenfoot	<u>d799</u> , d804, d812,
	d815, d817, d822, d875, d881, d931
\@evenhead	
	<u>d799</u> , d803, d808, d810, d819,
	d823, d825, d874, d880, d932, d934
\@firstoftwo	b345,
	b764, b768, b777, b812, b869, b892
\@float	d1522, d1549
\@font@info	b123, b158,
	b182, b196, b202, b432, b472, b510
\@fontswitch	b350, d1618, d1619
\@fpbot	<u>d716</u>
\@fpsep	<u>d716</u>
\@fptop	<u>d716</u>
\@gobble	b314, b315, b316,
	b322, d937, d938, d939, d1647

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

<code>\@gobble@plIncludeInRelease</code>	<code>\@mathrmtrue</code> d111, d114
. a115, a122, a125	<code>\@medpenalty</code> <u>d283</u>
<code>\@gobbletwo</code> b317,	<code>\@minipagefalse</code> d1567
b319, b320, d799, d806, d813, d936	<code>\@mkboth</code> d799, d806, d813, d827,
<code>\@height</code>	d854, d885, d913, d936, d1660,
b458, b461, b464, b496, b499, b502	d1751, d1764, d1773, d1774, d1798
<code>\@highpenalty</code> <u>d283</u> , d1667, d1686, d1694	<code>\@mparswitchfalse</code> d1873, d1879
<code>\@idxitem</code> d1802, <u>d1804</u>	<code>\@mparswitchtrue</code> d1877
<code>\@ifpackageloaded</code> a130, a131	<code>\@mpfootins</code> <u>d1576</u>
<code>\@ifundefined</code> b210, b229	<code>\@namedef</code> b125, b126,
<code>\@inmathwarn</code> b596	b160, b161, b184, b185, b264, b438
<code>\@itemdepth</code> d1459, d1460, d1461, d1468	<code>\@nil</code> a112, a113, b273, b897
<code>\@itemitem</code> d1461, d1462	<code>\@nnil</code> b445, b447, b483, b485
<code>\@itempenalty</code> <u>d1344</u>	<code>\@nobreakfalse</code> d1679
<code>\@ixpt</code> d175, d217	<code>\@nobreaktrue</code> d1678
<code>\@knjcmdfalse</code> b415	<code>\@noitemerr</code> d1788
<code>\@knjcmdtrue</code> b380	<code>\@nomath</code> b942, b949, b955, d1616, d1617
<code>\@landscapefalse</code> d3	<code>\@normalsize</code> <u>d139</u>
<code>\@landscapetrue</code> d63	<code>\@notffam</code> <u>b612</u>
<code>\@latex@error</code>	<code>\@notffamfalse</code> b620
. a23, b211, b230, b249, b399,	<code>\@notffamtrue</code> b649, b661
b545, b557, b589, d1601, d1605	<code>\@notkfam</code> <u>b612</u>
<code>\@latex@warning</code> b130, d1789	<code>\@notkfamfalse</code> b619
<code>\@latex@warning@no@line</code> a132	<code>\@notkfamtrue</code> b627, b640
<code>\@listdepth</code> d1437, d1464	<code>\@oddfoot</code> <u>d799</u> , d802,
<code>\@listI</code> d163, <u>d1351</u>	d804, d812, d816, d818, d822,
<code>\@listi</code> d163, d179, d189,	d851, d877, d883, d910, d912, d931
d199, d211, d221, d231, <u>d1351</u>	<code>\@oddhead</code> <u>d799</u> , d801, d809, d811,
<code>\@listii</code> <u>d1370</u>	d819, d824, d826, d852, d853,
<code>\@listiii</code> <u>d1370</u>	d876, d882, d909, d911, d933, d935
<code>\@listiv</code> <u>d1370</u>	<code>\@onlypreamble</code>
<code>\@listv</code> <u>d1370</u>	b188, b189, b190, b191, b192,
<code>\@listvi</code> <u>d1370</u>	b208, b283, b284, b328, b716, b717
<code>\@lnumwidth</code> <u>d1628</u> , d1637, d1638,	<code>\@openbib@code</code> d103, d1779, <u>d1791</u>
d1673, d1691, d1692, d1706, d1707	<code>\@openleftfalse</code> d95, d97
<code>\@lowpenalty</code>	<code>\@openlefttrue</code> d96
<u>d283</u> , d1076, d1344, d1345, d1346	<code>\@openrightfalse</code> d96, d97
<code>\@M</code> d1079,	<code>\@openrighttrue</code> d93, d95
d1186, d1205, d1216, d1223, d1635	<code>\@parse@version</code> a112, a113
<code>\@m</code> d1787	<code>\@part</code> d1164, d1173, <u>d1175</u>
<code>\@mainmatterfalse</code> d1150, d1157	<code>\@plIncludeInRelease</code> a108, a109
<code>\@mainmattertrue</code> d11, d1153	<code>\@plIncludeInRelease</code> a106, a107, a108
<code>\@makecaption</code> <u>d1554</u>	<code>\@pnumwidth</code>
<code>\@makechapterhead</code> d1260, <u>d1261</u>	. <u>d1622</u> , d1642, d1670, d1671,
<code>\@makefnmark</code> d1018, d1022, d1815, d1819	d1675, d1689, d1693, d1704, d1708
<code>\@makefntext</code> d1021, d1025, <u>d1813</u>	<code>\@ptsiz</code> <u>d4</u> , d57, d59,
<code>\@makeschapterhead</code> d1279, <u>d1281</u> , d1797	d61, d62, d133, d134, d135, d136
<code>\@maketitle</code>	<code>\@restonecolfalse</code> d950,
d1029, d1030, d1035, d1042, <u>d1053</u>	d963, d1656, d1747, d1760, d1795
<code>\@mathrmfalse</code> d17	

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\addcontentsline`
 d1179, d1182, d1198,
 d1201, d1251, d1253, d1255, d1645
`\addpenalty` d1666, d1667, d1686, d1701
`\addto@hook` b257, b259
`\addtocontents` d1258, d1259
`\addvspace` d1162,
 d1258, d1259, d1668, d1687, d1702
`\adjust@box` b518, b521, b522,
 b523, b524, b529, b530, b531, b535
`\adjust@dimen` b519, b530,
 b531, b532, b533, b534, b535, b536
`\adjustbaseline`
 b455, b493, b518, b697, d84
`\afont` b28, b287, b305, b309, b427
`\aftergroup` ... b474, b512, b828, b899
`\all@shape` b352
`\and` d1012, d1051
`\appendix` d1310
`\appendixname` d1321, d1859
`\arraycolsep` d1571
`\arrayrulewidth` d1573
`\AtBeginDocument` ... a129, d83, d1594
`\AtEndOfPackage` d102
`\author` d941, d1010, d1049
`\autospacing` b997
`\autoxspacing` b999
- B**
- `\backmatter` d1147
`\baselineskip`
 b452, b453, b454, b458, b461,
 b464, b490, b491, b492, b496,
 b499, b502, d171, d505, d528, d530
`\baselinestretch`
 ... b434, b435, b450, b488, d275
`\batchmode` a48, a60
`\begin` d978, d986,
 d991, d1056, d1063, d1077, d1088
`\belowcaptionskip` d1554, d1570
`\belowdisplayshortskip`
 d150, d155, d160,
 d178, d188, d198, d210, d220, d230
`\belowdisplayskip` .. d162, d204, d236
`\bf` d1614
`\bfseries`
 . d1078, d1089, d1188, d1191,
 d1207, d1210, d1217, d1224,
 d1265, d1285, d1293, d1297,
 d1301, d1305, d1309, d1453,
 d1484, d1614, d1672, d1690, d1705
`\bibindent` d104, d105, d1769
`\bibname` d1774, d1854
`\bigskipamount` d278
`\bottomfraction` d753
- C**
- `\c@paper` ... d1, d291, d321, d337,
 d353, d439, d455, d471, d548, d568
`\c@bottomnumber` d749
`\c@chapter` d1103,
 d1117, d1132, d1323, d1324,
 d1506, d1513, d1533, d1540, d1583
`\c@dbltopnumber` d751
`\c@enumi` d1405, d1411
`\c@enumii` d1406, d1412
`\c@enumiii` d1407, d1413
`\c@enumiv` . d1408, d1414, d1775, d1782
`\c@equation` d1579, d1583
`\c@figure` d1500
`\c@footnote` d1812
`\c@page` .. d759, d771, d783, d788, d966
`\c@paragraph` d1103, d1124, d1139
`\c@part` d1114, d1129
`\c@secnumdepth`
 d830, d833, d838, d845,
 d857, d862, d888, d891, d896,
 d903, d916, d921, d1101, d1177,
 d1187, d1196, d1206, d1247, d1267
`\c@section` d1103, d1115,
 d1118, d1130, d1133, d1314, d1315
`\c@subparagraph` . d1103, d1126, d1141
`\c@subsection` ... d1103, d1120, d1135
`\c@subsubsection` d1103, d1122, d1137
`\c@table` d1527
`\c@tocdepth`
 d1620, d1631, d1665, d1685, d1700
`\c@topnumber` d747
`\c@totalnumber` d750
`\cal` d1618
`\Cdp` b19, d167, d507
`\cdp` b19, b523, b527, b534
`\cdp@elt` b115, b116, b149,
 b150, b173, b174, b254, b257, b259
`\cdp@list` b116, b150, b174, b261, b262
`\centering` d997, d1204, d1222
`\cf@encoding` b548, b604
`\chapter` d1238,
 d1239, d1659, d1748, d1761, d1774

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\chaptermark` d837, d861,
 d895, d920, d937, d1095, d1257
`\char` b521, d167
`\check@icl` b898, b905, b907
`\check@icr` b899, b908, b913
`\check@nocorr@` b897
`\Chs` b25, d167
`\chs` b25, b526
`\Cht` b17, d167, d306, d506
`\cHT` b27, b527, b532
`\cht` b17, b522, b527
`\ck@encoding`
 . b7, b560, b573, b579, b597, b607
`\cleardoublepage` d792, d948, d1155,
 d1156, d1168, d1169, d1240, d1241
`\clearpage` d758, d770, d782,
 d787, d1156, d1169, d1241, d1803
`\clubpenalty` d1784, d1785
`\col@number` d1029
`\columnsep` d265, d1801
`\columnseprule` d265, d1801
`\columnwidth` d1810
`\contentsline` d1651
`\contentsname`
 d1658, d1659, d1660, d1851
`\ct@encoding` b7, b391, b396, b403, b587
`\curr@fontshape` b428
`\curr@kfontshape` b15, b404, b409
`\Cvs` b23, d167, d441, d442,
 d443, d444, d445, d446, d448,
 d449, d450, d451, d452, d453,
 d457, d458, d459, d460, d461,
 d462, d464, d465, d466, d467,
 d468, d469, d473, d474, d475,
 d476, d477, d478, d480, d481,
 d482, d483, d484, d485, d489,
 d490, d491, d492, d493, d494,
 d496, d497, d498, d499, d500,
 d501, d513, d514, d515, d1262,
 d1277, d1282, d1288, d1291,
 d1292, d1295, d1296, d1299, d1300
`\cvs` b23, b525
`\Cwd` b21,
 d167, d267, d268, d277, d323,
 d324, d325, d326, d327, d328,
 d330, d331, d332, d333, d334,
 d335, d339, d340, d341, d342,
 d343, d344, d346, d347, d348,
 d349, d350, d351, d355, d356,
 d357, d358, d359, d360, d362,
 d363, d364, d365, d366, d367,
 d371, d372, d373, d374, d375,
 d376, d378, d379, d380, d381,
 d382, d383, d388, d396, d397,
 d398, d418, d419, d420, d1477
`\cwd` b21, b524, b526
`\cy@encoding` b7, b390, b397, b408, b583
- ## D
- `\date` d941, d1011, d1050
`\day` .. d71, d1830, d1834, d1840, d1844
`\dblfloatpagefraction` d757
`\dblfloatsep` d704
`\dbltextfloatsep` d704
`\dbltopfraction` d756
`\DeclareErrorKanjiFont` .. b247, b918
`\DeclareFixedFont` b285
`\DeclareFontEncoding` b106
`\DeclareFontEncoding@` b106
`\DeclareFontFamily` b209
`\DeclareFontShape`
 b1012, b1013, b1019,
 b1020, b1025, b1026, b1031, b1032
`\DeclareKanjiEncoding` b129
`\DeclareKanjiEncodingDefaults` ..
 b193, b917
`\DeclareKanjiFamily`
 b228, b1009, b1016, b1023, b1029
`\DeclareKanjiSubstitution`
 b247, b920, b922
`\DeclareMathAlphabet` d1591
`\DeclareOldFontCommand`
 . d1609, d1610, d1611, d1612,
 d1613, d1614, d1615, d1616, d1617
`\DeclareOption`
 . d18, d21, d24, d27, d31, d34,
 d37, d40, d44, d47, d50, d53,
 d59, d61, d62, d63, d67, d74,
 d78, d82, d86, d87, d88, d89,
 d90, d91, d95, d96, d97, d99,
 d100, d101, d113, d114, d116, d117
`\DeclarePreloadSizes`
 b961, b962, b963, b964, b967,
 b968, b969, b970, b973, b974,
 b975, b976, b979, b981, b983, b985
`\DeclareRelationFont` b352, b1010,
 b1011, b1017, b1018, b1024, b1030
`\DeclareRobustCommand`
 b383, b543, b555,
 b567, b615, b616, b617, b668,

b669, b670, b671, b672, b673, b687, b699, b702, b941, b948, b954, d1600, d1604, d1618, d1619	\endquotation d1092
\DeclareSymbolFont d1587	\endtitlepage d1081
\DeclareSymbolFontAlphabet ... d1588	enumerate (environment) d1431
\DeclareTateKanjiEncoding <u>b129</u> , b921	environments:
\DeclareTateKanjiEncoding@ <u>b129</u>	abstract d1071
\DeclareTextCommandDefault b722, b732	description d1474
\DeclareTextFontCommand . b936, b937	enumerate d1431
\DeclareYokoKanjiEncoding <u>b129</u> , b919	figure d1521
\DeclareYokoKanjiEncoding@ <u>b129</u>	figure* d1521
\default@family b117, b264	itemize d1458
\default@k@family b151, b175, b274, b277	quotation d1491
\default@k@series b151, b175, b275, b278	quote d1497
\default@k@shape b152, b176, b276, b279	table d1548
\default@KM b161, b185, b201, b204, b207	table* d1548
\default@KT ... b195, b198, b206, b575	thebibliography d1772
\default@M b126	theindex d1794
\default@series b117, b265	titlepage d945
\default@shape b118, b266	verse d1485
description (environment) <u>d1474</u>	\errhelp b990
\descriptionlabel d1482, <u>d1483</u>	\errmessage b993
\DLMfontsw@oldlfont b338, b351	\error@fontshape ... b384, b385, b414
\DLMfontsw@oldstyle b335, b350	\error@kfontshape b270, b385
\DLMfontsw@standard . b332, b340, b349	\euc b521, d167
\document@default@language a100	\evensidemargin d592
\documentclass a24, a30, a31	\every@math@size b289
\documentstyle a21	\everyjob a64
\doublerulesep <u>d1574</u>	\everypar d1679
\DualLang@mathalph@bet .. b323, b329	\ExecuteOptions d121, d122, d125, d126, d129, d130
\DualLang@Mfontsw b332, b335, b338, b340, b345, b347	\ext@figure d1516
	\ext@table d1543
	F
E	\f@baselineskip b281, b435, b448, b452, b473, b486, b490, b511
\em b938	\f@encoding b16, b547, b548
\eminnershape b938	\f@family . b16, b615, b646, b659, b666
\emph b938	\f@linespread b434, b449, b450, b453, b467, b470, b487, b488, b491, b505, b508
\enc@elt b33, b35, b36, b120, b121, b154, b155, b156, b178, b179, b180, b632, b653	\f@series b16, b668
\enc@update b433, b549, b551	\f@shape b16, b671
\encodingdefault b692	\f@size b280, b404, b409, b428, b435, b446, b473, b484, b511
\end d993, d996, d1000, d1065, d1068, d1080, d1090	\fam@elt b33, b40, b41, b42, b216, b217, b235, b236, b630, b641, b651, b662
\end@dblfloat d1526, d1553	\familydefault b693
\end@float d1523, d1550	\fboxrule d1577
\endlist d1447, d1473, d1482, d1490, d1496, d1499, d1790	\fboxsep d1577

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\fenc@list` b35, b121, b656
`\ffam@list` b40, b214, b217, b645
`figure` (environment) d1521
`figure*` (environment) d1521
`\figurename` d1519, d1520, d1857
`\floatpagefraction` d755
`\floatsep` d689
`\fmtname` a2
`\fmtversion` a3
`\fnsymbol` d1017
`\fnum@figure` d1516
`\fnum@table` d1543
`\font` b28, b287,
 b296, b302, b305, b308, b309,
 b402, b407, b427, b942, b949, b955
`\font@name` b404,
 b406, b409, b411, b428, b430, b432
`\fontdimen` b942, b949, b955
`\fontencoding` b543, b934, b935
`\fontfamily` b615
`\fontseries` b668
`\fontshape` b671
`\fontsize` b290
`\footins` d686, d1576
`\footnote` d982, d1057, d1058
`\footnotemark` d974
`\footnoterule` d980, d1808
`\footnotesep` d683
`\footnotesize` d205, d979
`\footskip` d307, d566, d678
`\fps@figure` d1516
`\fps@table` d1543
`\frontmatter` d1147
`\ftype@figure` d1516
`\ftype@table` d1543
- G**
- `\g@tlastchart@` b748, b826
`\GenericInfo` a114, a117, a121
`\glossary` d1647
`\gt` d1609
`\gtdefault` b704, b924
`\gtfamily` b699,
 b937, b943, b950, b956, d1610
- H**
- `\hangindent` d1804
`\hb@xt@` d1022,
 d1026, d1568, d1629, d1642,
 d1675, d1693, d1708, d1815, d1819
- `\headheight` d287, d557, d562, d676
`\headsep` d287, d558, d563, d677
`\heisei` d1824, d1832, d1842
`\hour` d12, d72
`\hrule` b727, b735, d1810
`\hspace`
 d1180, d1199, d1484, d1805, d1806
`\Huge` d237, d1210, d1224
`\huge` d237,
 d1191, d1207, d1217, d1265, d1285
- I**
- `\if@compatibility` d56,
 d92, d110, d314, d319, d437,
 d535, d592, d945, d1586, d1677
`\if@enablejfam` d16, d1585
`\if@knjcmd` b379, b415
`\if@landscape` d3, d322, d338,
 d354, d370, d440, d456, d472, d488
`\if@mainmatter` d11, d839,
 d863, d897, d922, d1248, d1269
`\if@mathrmc` d17, d1593
`\if@noskipsec` d1161
`\if@notffam` b613, b665
`\if@notkfam` b612, b665
`\if@openleft` d10,
 d793, d1155, d1168, d1230, d1240
`\if@openright` d9,
 d795, d1156, d1169, d1232, d1241
`\if@restonecol` d5, d954,
 d968, d1662, d1753, d1766, d1803
`\if@stysize`
 . d15, d266, d290, d320, d402,
 d438, d518, d537, d547, d567, d636
`\if@tempswa` d1236
`\if@tempswz` b614, b637, b658
`\if@titlepage` d6, d977, d1072
`\if@twocolumn` d387,
 d403, d421, d580, d630, d637,
 d762, d767, d774, d779, d785,
 d790, d949, d960, d1028, d1084,
 d1092, d1171, d1326, d1334,
 d1655, d1746, d1759, d1795, d1865
`\if@twoside` d608, d646,
 d661, d758, d770, d782, d787,
 d820, d871, d969, d1229, d1876
`\IfFileExists` a32, b633, b654
`\ifin@` b215, b234, b294,
 b300, b389, b395, b571, b583,
 b587, b623, b627, b646, b649, b684

- `\ifmdir` b724, b832, b875
`\ifodd` b845, d759, d771, d783, d788, d966
`\iftdir` b61, b528, b724, b734, b831,
 b874, d760, d777, d1436, d1450,
 d1463, d1476, d1560, d1564, d1826
`\ifydir` ... b72, b82, d765, d772, d1018
`\if 西曆` d1821
`\ignorespaces` b676, b679, b696
`\in@` b31, b32
`\in@@` b30, b32
`\in@false` b31
`\in@true` b31
`\index` d1647
`\indexname` d1796, d1797, d1798, d1854
`\indexspace` d1807
`\inhibitglue` b1001
`\inhibitxspcode`
 . c314, c315, c316, c317, c318,
 c319, c320, c321, c322, c323,
 c324, c325, c326, c327, c328,
 c329, c330, c331, c332, c333,
 c334, c335, c336, c337, c338,
 c339, c340, c341, c342, c343,
 c344, c345, c346, c347, c348,
 c349, c350, c351, c355, c356,
 c357, c358, c359, c360, c361,
 c362, c363, c364, c365, c366,
 c367, c368, c369, c370, c371,
 c372, c373, c374, c375, c376,
 c377, c378, c382, c383, c384,
 c385, c386, c390, c391, c392, c393
`\inlist@` ... b29, b214, b233, b293,
 b299, b388, b394, b570, b582,
 b586, b622, b626, b645, b648, b683
`\input` a37,
 b742, b930, b931, b932, b933,
 d99, d100, d133, d134, d135, d136
`\InputIfFileExists` b738, b988
`\interlinepenalty`
 d1186, d1205, d1216, d1223, d1635
`\intertextsep` d689
`\it` d1615
`\item` d1490, d1496, d1499, d1802
`\itemindent` d105,
 d106, d1475, d1487, d1488, d1493
`itemize (environment)` d1458
`\itemsep` d182,
 d192, d202, d214, d224, d234,
 d1356, d1361, d1366, d1384,
 d1392, d1439, d1466, d1479, d1487
`\itshape` b943, b950, b956, d1615
- ## J
- `\jcharwidowpenalty` b1000
`\jfam` d1590
`\jfont` b296, b407
`\jis` c37, c38, c39, c40, c41,
 c42, c43, c44, c45, c46, c47, c56,
 c57, c58, c59, c60, c61, c62, c63,
 c64, c65, c66, c67, c86, c96, c97, c98
- ## K
- `\k@encoding` ... b7, b15, b386, b390,
 b391, b396, b397, b399, b403,
 b408, b412, b417, b419, b421,
 b424, b559, b560, b574, b576,
 b577, b579, b580, b583, b587, b589
`\k@family` b12, b15, b277, b417, b419,
 b421, b424, b616, b623, b638, b666
`\k@series` b13, b15,
 b278, b417, b419, b421, b424, b669
`\k@shape` b14, b15, b279, b417, b424, b672
`\kanjiencoding`
 b543, b675, b688, b707, b929, d165
`\kanjiencodingdefault`
 ... b688, b707, b925, d164, d165
`\KanjiEncodingPair` b438
`\kanjifamily`
 b615, b675, b689, b701, b704, b708
`\kanjifamilydefault` . b689, b708, b926
`\kanjiprocess@table` b705
`\kanjiseries` .. b668, b675, b690, b709
`\kanjiseriesdefault` . b690, b709, b927
`\kanjishape` ... b671, b675, b691, b710
`\kanjishapedefault` .. b691, b710, b928
`\kanjiskip` b996
`\kansuji` d1828,
 d1829, d1830, d1832, d1833, d1834
`\kenc@list`
 b35, b156, b180, b570, b635, b683
`\kenc@update`
 ... b413, b561, b563, b578, b593
`\kernel@ifnextchar` a105
`\kfam@list` b40, b233, b236, b622
`\ktenc@list` b35, b179, b299, b394, b586
`\kyenc@list` b35, b155, b293, b388, b582
- ## L
- `\l@chapter` d1683
`\l@figure` d1755, d1768

M

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\mc` d1609
`\mcdefault` b701, b923, b926
`\mcfamily` b699,
 b936, b944, b950, b956, d1609
`\mddefault` b927
`\medskipamount` d278
`\MessageBreak` a24, a26, a27, a28, a30,
 a133, a134, a135, b132, b134, b136
`\minute` d12, d72
`\mit` d1618
`\mkern` d1640
`\month` d71, d1829, d1833, d1839, d1843
- N**
- `\NeedsTeXFormat` b2
`\newblock` d109, d1771
`\newbox` b45, b46, b51, b66, b518
`\newcount` d1824
`\newcounter` d2, d1103, d1105, d1106,
 d1108, d1109, d1110, d1111,
 d1112, d1500, d1501, d1527, d1528
`\newdimen` b17, b18, b19, b20,
 b21, b22, b23, b24, b25, b26,
 b27, b519, d1625, d1628, d1769
`\newenvironment` d946,
 d957, d1073, d1083, d1474,
 d1485, d1491, d1497, d1521,
 d1524, d1548, d1551, d1772, d1794
`\newif` . b379, b612, b613, b614, d3,
 d5, d6, d9, d10, d11, d15, d16, d17
`\newlanguage` a98
`\newlength` d1554, d1555
`\newpage` d761,
 d762, d766, d767, d773, d774,
 d778, d779, d784, d785, d789,
 d790, d950, d954, d963, d968,
 d1033, d1054, d1228, d1231, d1233
`\nfss@catcodes` b108, b142, b166
`\nobreak` d1189, d1192, d1218,
 d1272, d1277, d1638, d1639,
 d1641, d1674, d1676, d1693, d1708
`\nocorr` b897, b900
`\noindent`
 d976, d1021, d1025, d1815, d1819
`\normalbaselineskip`
 .. b454, b492, b525, d1437, d1464
`\normalcolor` d1642
`\normalfont` ... b687, d1186, d1205,
 d1216, d1223, d1265, d1285,
 d1293, d1297, d1301, d1305,
 d1309, d1453, d1484, d1609,
 d1610, d1611, d1612, d1613,
 d1614, d1615, d1616, d1617, d1642
`\normallineskip` d273
`\normalmarginpar` d1872
`\normalsize` . d139, d1301, d1305, d1309
`\not@math@alphabet` b700, b703
`\notffam@list` b40, b648, b662
`\notkfam@list` b40, b626, b641
`\null` d984, d997, d999, d1054, d1075,
 d1081, d1172, d1231, d1233, d1638
`\number` . d71, d1828, d1829, d1830,
 d1832, d1833, d1834, d1838,
 d1839, d1840, d1842, d1843, d1844
`\numberline` d1252, d1628
- O**
- `\oddsidemargin` d592
`\onecolumn` d949, d961, d1171,
 d1655, d1746, d1759, d1803, d1869
`\overfullrule` d116, d117
- P**
- `\p@enumii` d1428
`\p@enumiii` d1428
`\p@enumiv` d1428, d1781
`\p@known@latexreleaseversion` ... a6
`\p@thanks`
 . d974, d981, d1004, d1043, d1058
`\pagenumbering` .. d1150, d1153, d1863
`\pagestyle` d1861, d1862
`\paperheight` .. d19, d22, d25, d28,
 d32, d35, d38, d41, d45, d48,
 d51, d54, d64, d65, d405, d408,
 d411, d521, d522, d525, d561, d673
`\paperwidth` ... d20, d23, d26, d29,
 d33, d36, d39, d42, d46, d49,
 d52, d55, d65, d66, d404, d407,
 d412, d519, d520, d524, d643, d653
`\par` d109, d976,
 d987, d993, d995, d996, d1015,
 d1059, d1065, d1069, d1081,
 d1162, d1189, d1191, d1208,
 d1210, d1217, d1224, d1311,
 d1318, d1564, d1565, d1643,
 d1675, d1693, d1708, d1804, d1807
`\paragraph` d1099, d1302
`\paragraphmark` d1095
`\parfillskip` d1633, d1671, d1689, d1704

`\parindent` [d276](#),
 [d1021](#), [d1025](#), [d1185](#), [d1215](#),
 [d1263](#), [d1283](#), [d1634](#), [d1670](#),
 [d1689](#), [d1704](#), [d1799](#), [d1814](#), [d1818](#)
`\parse@@BANNER` [a69](#), [a74](#), [a78](#), [a84](#), [a86](#)
`\parsep` [d107](#), [d181](#), [d182](#), [d191](#), [d192](#),
 [d201](#), [d202](#), [d213](#), [d214](#), [d223](#),
 [d224](#), [d233](#), [d234](#), [d1354](#), [d1359](#),
 [d1364](#), [d1374](#), [d1378](#), [d1382](#),
 [d1384](#), [d1390](#), [d1439](#), [d1466](#), [d1495](#)
`\parskip`
 [d276](#), [d1439](#), [d1466](#), [d1480](#), [d1800](#)
`\part` [d1159](#)
`\partopsep` [d1348](#), [d1391](#), [d1480](#)
`\patch@level` [a64](#), [a65](#)
`\penalty` [d1694](#)
`\pfmtname` [a10](#), [a73](#), [a77](#)
`\pfmtversion`
 [a10](#), [a38](#), [a43](#), [a54](#), [a73](#), [a77](#), [a113](#)
`\pfmtversion@topatch`
 [a36](#), [a38](#), [a42](#), [a53](#), [a62](#)
`\pickup@font` [b405](#), [b410](#), [b429](#)
`\platexBANNER` [a74](#), [a78](#), [a86](#), [a90](#)
`\platexreleaseversion` [a14](#)
`\platexTMP` [a70](#), [a82](#), [a85](#), [a88](#), [a89](#), [a94](#)
`\plEndIncludeInRelease` [a125](#),
 [a126](#), [b53](#), [b57](#), [b63](#), [b67](#), [b78](#),
 [b87](#), [b100](#), [b104](#), [b479](#), [b516](#),
 [b729](#), [b736](#), [b753](#), [b757](#), [b780](#),
 [b784](#), [b790](#), [b799](#), [b805](#), [b815](#),
 [b862](#), [b885](#), [b895](#), [b946](#), [b952](#), [b958](#)
`\plIncludeInRelease`
 [a104](#), [b48](#), [b54](#), [b58](#), [b64](#),
 [b68](#), [b79](#), [b94](#), [b101](#), [b441](#), [b480](#),
 [b719](#), [b730](#), [b748](#), [b754](#), [b758](#),
 [b781](#), [b785](#), [b791](#), [b800](#), [b806](#),
 [b816](#), [b863](#), [b886](#), [b939](#), [b947](#), [b953](#)
`\pltx@cleartoevenpage` [d758](#)
`\pltx@cleartoleftpage` ... [d758](#), [d794](#)
`\pltx@cleartooddpage`
 [d758](#), [d959](#), [d1149](#), [d1152](#)
`\pltx@cleartorightpage` .. [d758](#), [d796](#)
`\pltx@composite@temp` [b827](#), [b828](#)
`\pltx@cond` [b763](#), [b768](#), [b771](#), [b775](#), [b776](#)
`\pltx@isletter` [b758](#), [b821](#)
`\pltx@isletter@i` [b766](#), [b767](#)
`\pltx@isletter@ii` [b769](#), [b770](#)
`\pltx@isletter@iii` [b772](#), [b773](#)
`\pltx@isletter@iv` [b772](#), [b774](#)
`\pltx@mark` [b761](#),
 [b768](#), [b769](#), [b771](#), [b773](#), [b774](#), [b775](#)
`\pltx@mark@` [b761](#)
`\pltx@scanstop`
 ... [b762](#), [b766](#), [b767](#), [b769](#), [b770](#)
`\postbreakpenalty`
 [c8](#), [c9](#), [c10](#), [c11](#), [c12](#),
 [c15](#), [c26](#), [c40](#), [c44](#), [c46](#), [c49](#), [c51](#),
 [c53](#), [c54](#), [c56](#), [c58](#), [c60](#), [c62](#), [c64](#),
 [c66](#), [c73](#), [c74](#), [c75](#), [c76](#), [c111](#),
 [c113](#), [c115](#), [c117](#), [c119](#), [c121](#),
 [c127](#), [c128](#), [c135](#), [c158](#), [c159](#), [c171](#)
`\postchaptername` [d1145](#), [d1847](#)
`\postpartname`
 [d1180](#), [d1188](#), [d1199](#), [d1207](#), [d1847](#)
`\ppatch@level`
 [a10](#), [a39](#), [a66](#), [a67](#), [a71](#), [a77](#)
`\prebreakpenalty`
 [c6](#), [c7](#), [c13](#), [c14](#), [c16](#),
 [c17](#), [c18](#), [c19](#), [c20](#), [c21](#), [c22](#), [c23](#),
 [c24](#), [c25](#), [c28](#), [c29](#), [c30](#), [c31](#), [c32](#),
 [c33](#), [c34](#), [c35](#), [c36](#), [c37](#), [c38](#), [c39](#),
 [c41](#), [c42](#), [c43](#), [c45](#), [c47](#), [c48](#), [c50](#),
 [c52](#), [c55](#), [c57](#), [c59](#), [c61](#), [c63](#), [c65](#),
 [c67](#), [c68](#), [c69](#), [c70](#), [c71](#), [c72](#), [c77](#),
 [c78](#), [c79](#), [c80](#), [c81](#), [c82](#), [c83](#), [c84](#),
 [c85](#), [c86](#), [c87](#), [c88](#), [c89](#), [c90](#), [c91](#),
 [c92](#), [c93](#), [c94](#), [c95](#), [c96](#), [c97](#), [c98](#),
 [c100](#), [c101](#), [c102](#), [c103](#), [c107](#),
 [c108](#), [c109](#), [c110](#), [c112](#), [c114](#),
 [c116](#), [c118](#), [c120](#), [c122](#), [c123](#),
 [c124](#), [c125](#), [c126](#), [c129](#), [c130](#),
 [c131](#), [c132](#), [c133](#), [c134](#), [c136](#),
 [c137](#), [c138](#), [c139](#), [c140](#), [c141](#),
 [c142](#), [c143](#), [c144](#), [c145](#), [c146](#),
 [c147](#), [c148](#), [c149](#), [c150](#), [c151](#),
 [c152](#), [c153](#), [c154](#), [c160](#), [c161](#),
 [c162](#), [c166](#), [c167](#), [c168](#), [c169](#), [c170](#)
`\prechaptername` [d1144](#), [d1847](#)
`\prepartname`
 [d1180](#), [d1188](#), [d1199](#), [d1207](#), [d1847](#)
`\process@table` [b705](#)
`\ProcessOptions` [d132](#)
`\protect` [b313](#), [b595](#),
 [d976](#), [d1252](#), [d1258](#), [d1259](#), [d1651](#)
`\protected@write` [d1646](#)
`\protected@xdef` [d975](#)
`\ProvidesFile`
 [b745](#), [b1003](#), [b1004](#), [b1005](#), [b1006](#)
`\ProvidesPackage` [b3](#)

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\ps@bothstyle` d871
`\ps@footnombre` d813, d872, d908
`\ps@headings` d820
`\ps@headnombre` d806, d821, d850
`\ps@jpl@in` d800, d805, d807,
d814, d821, d850, d872, d908, d930
`\ps@myheadings` d930
`\ps@plain` d799, d805, d930
- Q**
- `\quotation` d1091
`quotation (environment)` d1491
`quote (environment)` d1497
- R**
- `\raggedbottom` d1864
`\raggedright` d1185, d1215, d1264, d1284
`\raise` b724, b734
`\reDeclareMathAlphabet`
..... b312, d1595, d1596
`\refname` d1773, d1854
`\refstepcounter` . d1178, d1197, d1249
`\rel@fontshape` b16
`\rel@shape` ... b354, b355, b368, b369
`\renewenvironment` d1431, d1458
`\rensuji` d1114, d1115,
d1117, d1118, d1120, d1122,
d1124, d1126, d1314, d1323,
d1405, d1406, d1407, d1408,
d1503, d1506, d1530, d1533, d1648
`\RequirePackage` d137
`\RequirePackageWithOptions` b5
`\reserved@a` b219, b222, b224, b238,
b241, b243, b252, b256, b468,
b470, b473, b506, b508, b511,
b633, b634, b654, b655, b900, b903
`\reserved@b` ... b255, b256, b901, b903
`\reserved@c` b902, b904, b911
`\reset@font` b698, d802
`\rightmargin` d1478, d1489, d1494, d1498
`\rightmark` d824, d826, d852, d853,
d876, d882, d909, d911, d933, d935
`\rightskip`
d1478, d1633, d1670, d1689, d1704
`\rm` b334, d1609
`\rmfamily` d1611
`\romanencoding` b358,
b363, b371, b375, b543, b678, b692
`\romanfamily` b358,
b363, b371, b375, b615, b678, b693
- `\romannumeral` d1434, d1461
`\romanprocess@table` b705
`\romanseries` b359,
b364, b372, b376, b668, b678, b694
`\romanshape` b364, b376, b671, b678, b695
- S**
- `\sbox` d1560, d1561
`\sc` d1615
`\scriptsize` d237
`\scshape` d1617
`\secdef` d1164, d1173, d1245
`\section` d1085, d1290,
d1658, d1750, d1763, d1773, d1796
`\sectionmark` d829, d844, d856,
d887, d902, d915, d938, d1095
`\selectfont` b381, b676,
b679, b696, b701, b704, b934, b935
`\seriesdefault` b694
`\set@fontsize` b435, b440
`\setcounter` d18, d21, d24,
d27, d31, d34, d37, d40, d44,
d47, d50, d53, d748, d749, d750,
d751, d952, d966, d970, d1001,
d1039, d1101, d1102, d1312,
d1313, d1319, d1320, d1620, d1621
`\SetRelationFont` b352
`\SetSymbolFont` d1589
`\settowidth` d1776
`\sf` d1609
`\sfcode` d1787
`\sffamily` d1612
`\shapedefault` b695
`\size@update`
... b437, b451, b477, b489, b515
`\skip` d686, d687, d688, d1576
`\sl` d1615
`\sloppy` d1783, d1867
`\slshape` d1616
`\small` d173, d979, d1087
`\smallskipamount` d278
`\split@name` b271
`\strip@pt` b446, b484
`\strut` b68
`\strutbox` b58, b83, b494
`\subitem` d1804
`\subparagraph` d1100, d1306
`\subparagraphmark` d1095
`\subsection` d1294
`\subsectionmark` d832, d890, d939, d1095

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- \subsubitem [d1804](#)
- \subsubsection [d1298](#)
- \subsubsectionmark [d1095](#)
- \symmincho [d1590](#)
- T**
- \tabbingsep [d1575](#)
- \tabcolsep [d1572](#)
- table (environment) [d1548](#)
- table* (environment) [d1548](#)
- \tablename [d1546](#), [d1547](#), [d1857](#)
- \tableofcontents [d1653](#)
- \tate [b89](#), [b91](#),
[b459](#), [b462](#), [b497](#), [b500](#), [d83](#), [d983](#)
- \tbaselineshift [b529](#),
[b536](#), [b538](#), [b725](#), [b734](#), [b796](#),
[b824](#), [b833](#), [b835](#), [b856](#), [b876](#), [b878](#)
- \textasteriskcentered [d1456](#)
- \textbaselineshiftfactor . [b848](#), [b849](#)
- \textbullet [d1448](#)
- \textcircled [d1451](#)
- \textendash [d1453](#)
- \textfloatsep [d689](#)
- \textfraction [d754](#)
- \textgt [b936](#)
- \textheight [d437](#), [d565](#), [d644](#), [d655](#), [d983](#)
- \textmc [b936](#)
- \textperiodcentered [d1457](#)
- \TextSymbolUnavailable [b600](#)
- \textunderscore [b718](#)
- \textwidth
[d319](#), [d564](#), [d645](#), [d656](#), [d674](#), [d983](#)
- \tfont [b302](#), [b402](#)
- \thanks [d981](#), [d982](#), [d1002](#), [d1040](#), [d1057](#)
- thebibliography (environment) . [d1772](#)
- \thechapter [d840](#),
[d864](#), [d898](#), [d923](#), [d1113](#), [d1250](#),
[d1252](#), [d1270](#), [d1323](#), [d1324](#),
[d1506](#), [d1513](#), [d1533](#), [d1540](#), [d1583](#)
- \theenumi
[d1403](#), [d1417](#), [d1423](#), [d1428](#), [d1429](#)
- \theenumii [d1403](#), [d1418](#), [d1424](#), [d1429](#)
- \theenumiii [d1403](#), [d1419](#), [d1425](#), [d1430](#)
- \theenumiv [d1403](#), [d1420](#), [d1426](#), [d1782](#)
- \theequation [d1579](#)
- \thefigure [d1500](#), [d1519](#), [d1520](#)
- \thefootnote [d976](#), [d1017](#)
- theindex (environment) [d1794](#)
- \thepage [d802](#), [d808](#),
[d809](#), [d810](#), [d811](#), [d815](#), [d816](#),
[d817](#), [d818](#), [d823](#), [d824](#), [d825](#),
[d826](#), [d852](#), [d853](#), [d875](#), [d877](#),
[d881](#), [d883](#), [d910](#), [d912](#), [d932](#),
[d933](#), [d934](#), [d935](#), [d1648](#), [d1649](#)
- \theparagraph [d1113](#)
- \thepart
[d1113](#), [d1180](#), [d1188](#), [d1199](#), [d1207](#)
- \thesection [d830](#), [d845](#), [d857](#), [d888](#),
[d903](#), [d916](#), [d1113](#), [d1314](#), [d1315](#)
- \thesubparagraph [d1113](#)
- \thesubsection [d833](#), [d891](#), [d1113](#)
- \thesubsubsection [d1113](#)
- \thetable [d1527](#), [d1546](#), [d1547](#)
- \thispagestyle
[d761](#), [d766](#), [d773](#), [d778](#),
[d784](#), [d789](#), [d951](#), [d965](#), [d1037](#),
[d1170](#), [d1231](#), [d1233](#), [d1242](#), [d1799](#)
- \thr@@ [d1432](#), [d1459](#)
- \time [d12](#), [d14](#)
- \tiny [d237](#)
- \title [d941](#), [d1009](#), [d1048](#)
- \titlepage [d1074](#)
- titlepage (environment) [d945](#)
- \tmp@error@fontshape [b384](#), [b414](#)
- \tmp@item [b212](#), [b214](#),
[b231](#), [b233](#), [b291](#), [b293](#), [b299](#),
[b386](#), [b388](#), [b394](#), [b412](#), [b568](#),
[b570](#), [b580](#), [b582](#), [b586](#), [b618](#),
[b622](#), [b626](#), [b645](#), [b648](#), [b681](#), [b683](#)
- \toclineskip [d1625](#), [d1632](#)
- \today [d944](#), [d1825](#)
- \toks@ [a110](#), [a114](#),
[a117](#), [a121](#), [b253](#), [b257](#), [b259](#), [b262](#)
- \tombowdatefalse [d75](#), [d79](#)
- \tombowdatetrue [d68](#)
- \tombowtrue [d68](#), [d75](#), [d79](#)
- \topfraction [d752](#)
- \topmargin [d535](#), [d675](#)
- \topsep [d180](#), [d190](#),
[d200](#), [d212](#), [d222](#), [d232](#), [d1355](#),
[d1360](#), [d1365](#), [d1373](#), [d1377](#),
[d1381](#), [d1387](#), [d1388](#), [d1389](#),
[d1392](#), [d1437](#), [d1438](#), [d1464](#), [d1465](#)
- \topskip [d287](#), [d317](#), [d504](#), [d533](#), [d1480](#)
- \tracingfonts . [b431](#), [b466](#), [b504](#), [b537](#)
- \tstrut [b89](#)
- \tstrutbox
[b45](#), [b61](#), [b75](#), [b85](#), [b90](#), [b459](#), [b497](#)
- \tt [d1609](#)
- \ttfamily [d1613](#)

- `\two@digits` d71, d72
`\twocolumn` d954,
 d968, d1030, d1236, d1662,
 d1753, d1766, d1796, d1797, d1866
`\type@restoreinfo` b474, b512
`\typeout` .. a33, a40, a51, a69, a72,
 a76, a84, a86, b538, b739, d1250
- U**
- `\unhcopy` b73, b75, b83, b85, b90, b92, b98
`\updefault` b928
`\upshape` b944, b950, b951, b956
`\usecounter` d1445, d1780
`\usefont` b674
`\usekanji` b295, b301, b674
`\userelfont` b379
`\useroman` b304, b674
- V**
- `verse` (environment) d1485
`\vfil` d984, d997,
 d999, d1075, d1081, d1172, d1228
`\vrule` b457, b460, b463, b495, b498, b501
`\vspace` d1089
- W**
- `\widowpenalty` d1786
- X**
- `\xkanjiskip` b998
`\xspcode` b845, b853, c174,
 c175, c176, c177, c178, c179,
 c180, c181, c182, c184, c185,
 c186, c187, c188, c189, c190,
 c191, c192, c193, c194, c195,
 c196, c197, c198, c199, c200,
 c201, c202, c203, c204, c205,
 c206, c207, c208, c209, c210,
 c211, c212, c213, c214, c215,
 c216, c217, c218, c219, c220,
 c221, c222, c223, c224, c225,
 c226, c227, c228, c229, c230,
 c231, c232, c233, c234, c235,
 c236, c237, c238, c239, c240,
 c241, c242, c243, c244, c245,
 c246, c247, c248, c249, c250,
 c251, c252, c253, c254, c255,
 c256, c257, c258, c259, c260,
 c261, c262, c263, c264, c265,
 c266, c267, c268, c269, c270,
 c271, c272, c273, c274, c275,
 c276, c277, c278, c279, c280,
 c281, c282, c283, c284, c285,
 c286, c287, c288, c289, c290,
 c291, c292, c293, c294, c295,
 c296, c297, c298, c299, c300,
 c301, c302, c303, c304, c305,
 c306, c307, c308, c309, c310, c311
- Y**
- `\ybaselineshift` . b724, b726, b796,
 b824, b833, b838, b856, b876, b881
`\year` d71, d1824, d1828, d1838
`\yoko` b97, b456, b494, d976, d1019
`\ystrut` b93
`\ystrutbox` b47, b61, b69,
 b73, b80, b98, b442, b456, b481
- Z**
- `\zstrut` b89
`\zstrutbox` b45, b92, b462, b500
- セ**
- `\西暦` d1821
- ワ**
- `\和暦` d1821